

辨認番号	出土地点	器種	法 番(cm)	①磨七 ②色調 ③焼成	形 様・手 法 の 特 徴	備 考
112-9	S K40	脚 部	底径 11.5 (脚部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②に赤・黄褐色 ③普通	端部が肥厚して面をもち、1条の回轉文を施す 外底及び内面部斜ナガ調整、脚柱部ケズリ調整	
112-10	S K40	脚 部	(脚部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石・金雲母など)含む ②外表面黄褐色、内面暗黄褐色 ③普通	2ヶ月と見られる掌状模様をもつ、口縁部には4条の回轉文を施す 上及び側面の口沿部に切目を施す	上製品の可能性あり
119-1	S K41	高 环	口径 18.8 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②外表面黄褐色、内面暗黄褐色 ③普通	背曲して立ち上がる体形から内側する口縁部に移行し、脚部は しつかりした掌状模様をもつ、口縁部には6条の回轉文を施す 上及び側面の口沿部に切目を施す 内面裏とも丁寧なナガ調整	
119-2	S K42	甕	口径 13.7 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英、角閃石など)少 しきまし ②外表面黄褐色、内面暗黄褐色 ③普通	ならかな脚部から頸部は「く」の字状に屈折し脚部に至 る。口縁部は上口に肥厚して面をもち、3条の回轉文を施す 外底内外面ともナガ調整、外表面黒化著しく調整不規	外表面付着
119-3	S K43	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英、角閃石・長石など)含む ②に赤・黄褐色 ③普通	広口の口縁で、脚部は上下に肥厚して面をもち、3条の回轉文を施す 内面裏にケズリ調整、外表面黒化著しく調整不明	口縫地面上に墨班あり
119-4	S K43	底 部	底径 6.0 (底部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面茶褐色、内面に赤・黄褐色 ③普通	手底	
119-5	S K44	甕	口径 15.2 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子(石英、角閃石など)含む ②赤・黄褐色 ③普通	口縁部がかなり肥厚されて面をもち、風化著しい回轉文が確認できる 内面裏ともナガ調整	
119-6	S K44	甕	口径 16.8 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英、角閃石など)含む ②赤・黄褐色 ③普通	僅口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は痕に引き出す。肩部 に直角原彌字による刻文があり該部が難解される 外表面脚部以下ケズリ調整、他内面裏ともナガ調整	
119-7	S K44	甕	口径 20.0 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英、角閃石・長石・金雲母など)含む ②に赤・灰・黄褐色 ③普通	ならかな脚部から頸部はくり上げて口縁部に至る。口縁は上 下に肥厚して面をもち、3条の回轉文を施す 外表面脚部に及ぶ内面裏上半にナガ調整、外表面脚部以下ハ ク日調整、内面脚部下ケズリ調整	
119-8	S K45	甕	口径 25.5 (口縁部 1/7存)	①1~2mmの大砂粒子(石英など)含む ②に赤・黄褐色 ③普通	ならかな脚部から頸部は「く」の字状に屈曲し脚部に至る。 口縁部は上口に肥厚して面をもち、3条の回轉文を施す 口縫地内外面ともナガ調整、地黒化著しく調整不明	
119-9	S K46	甕	口径 16.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・角閃石など)含む ②外表面褐色、内面暗黄褐色 ③普通	ならかな脚部から頸部は「く」の字状にきつく屈曲し、口縁部 に至る。口縁は上に肥厚して面をきつく2~3条の回轉文を施す 内面裏とも顔料上ナガ調整、以ハケ日調整	外表面付着
119-10	S K46	高 环	口径 22.6 (口縁部 1/7存)	①微砂粒子(角閃石・石英など)含む ②に赤・黄褐色 ③普通	後に広がる腹部である。少々厚手で端部は丸くおさめる 外表面ミガキ調整と思われる。内面裏化著しく調整不明	
119-11	S K47	底 部	底径 9.3 (底部 1/4存)	①微砂粒子(石英・角閃石など)含む ②灰・黄褐色 ③普通	手底。内面の凹面頃小窓のあるもの 底面及び内面裏ナガ調整、地黒化著しく調整不明	
119-12	S K47	底 部	底径 7.0 (底部 1/7存)	①微砂粒子(石英・角閃石など)含む ②に赤・黄褐色 ③普通	やや薄手の手底 底面及び内面裏ナガ調整、外表面ミガキ調整	
119-13	S K48	甕	(口縁部破片)	①1mmの大砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む ②に赤・黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る。口 縁部は直角原彌字による回轉文を施すしたち難解しを部分的 に行なう 外表面ケズリ調整、内面裏原彌字以上丁寧なナガ調整、以下ケズリ調整	
119-14	S K48	高 环	脚柱部径 5.4 (脚柱合部 完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)多く含む ②唯黄褐色に赤・黄褐色 ③普通	所持面のいきている脚柱部の付け根付近である。しつかりした 直角原彌字が施され、舟の凸合部に刻目が施される 所持面内ハケ日調整と思われる	
119-15	S K48	脚 柱 壺	(脚部破片)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②外表面黄褐色、内面黑褐色 ③普通	器形の算定次第を見るので、脚部2条の割りだし突唇部分で ある。平行比線文及び「く」の字のスランプ文が施されている 風化著しく調査不明	
119-16	S K48	脚 部	(脚部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②に赤・黄褐色 ③普通	外表面に平行比線文及び竹管文が施されている 外表面ハケ日調整と思われる。内面ケズリ調整	
126-1	S D11	並	口径 16.0 (口縁部 1/6存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②赤・黄褐色 ③普通	上に拡張された口縁部に内傾し、口縁面には24条の回轉文を施す 外表面ケズリ、内面裏ハケ目が併解觀察される。地は黒化著 しく調査不明	
126-2	S D11	甕	口径 17.5 (口縁部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②赤褐色 ③普通	まことにびらのびらのびらのびらのびらのびらのびらのびらのびらの 口縁部は欠損して居る。口縁部に至る、口縁は上に肥厚し、口縁部に至 る。口縁は上に肥厚して面をもたら3条の回轉文を施す 外表面脚部以上ナガ調整、内面裏ハケ目が併解觀察、内面裏口縁部ヨコ ナガ調整、脚柱部に位陥ハケ日調整、以下ケズリ調整	
126-3	S D11	甕	口径 17.8 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(長石・石英・角閃石など)含む ②唯黄褐色 ③普通	ならかな脚部から頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部に至 る。口縁は上に肥厚して面をもたら3条の回轉文を施す 内面裏とも頭部以上ヨコナガ調整、頸部以下外表面ナガ調整、 内面不規則のナガ調整	
126-4	S D11	甕	口径 15.7 (口縁部 1/7存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②黑褐色 ③普通	ならかな脚部から頸部「く」の字状に屈曲し、すぐ口縁部 に至る。口縁は上に肥厚して面をもたら3条の回轉文を施す 外表面脚部以上ナガ調整、以下ケズリ調整、内面裏ヨコ ナガ調整、脚柱部位陥ハケ日調整、以下ケズリ調整	
126-5	S D11	底 部	底径 5.9 (底部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黒灰色 ③普通	手底。底面の器壁となる 内面ケズリ調整、外表面黒化著しく調査不明	全体に黒っぽいのは黒底？

辨認番号	出土地点	器種	法量(cm)	①釉土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
126-7	SD13	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合化してしまった、口縁部が鉛錆されたもの。口縁面には外縁及び内面縁部以上ナゲ調整、以下ケメリ調整	
126-8	SD13	甕	(口縁部破片)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②外表面黄褐色、内面黄褐色 ③普通	複合口縁で、縁部はわずかに平坦ぎみにし、突出部は削め下に出る外縁及び内面縁部以上ナゲ調整、以下ケメリ調整	口縁部無底あり
126-9	SD13	高杯	(体部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	口縁部が反り縮れがかなり軽をもつて厚手にするもの。口縁面には軽い沈線文が施される外縁及び内面縁部ナゲ調整、体部外面ミガキ調整、内面風化著しく調査不明	
125-1	SD14	甕	口径 21.2 (口縁部 1/9分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	縁部のほとんど見られないもので、頭部は「し」字状に基曲口縁部に至る。口縁部はわずかに肥厚する。外縁及び内面縁部以上ナゲ調整、底部ハケ目調査	
125-2	SD14	甕	口径 29.0 (口縁部 1/7分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	やや肩部が張り出る「く」の字状に折出しで口縁部に至る。口縁部はわずかに肥厚する。内面縁部ハケ目調査、他外表面ともナゲ調整	外表面黒錆保付帯
125-3	SD14	甕	口径 18.3 (口縁部 1/6分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	などならかな肩部から頭部「く」の字状に折出し、口縁部に至る。口縁部は軽く肥厚して頭をもたらし、1条の凹輪文と刻目を施す内縁及び外面縁部以上ナゲ調整、以下ナゲ目調査	
125-4	SD14	甕	口径 18.4 (口縁部 1/3分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び平均の1mmの砂粒子含む ②黄褐色 ③普通	などならかな肩部から頭部「く」の字状に折出し、口縁部に至る。口縁部は複合口縁で、軽く肥厚して頭をもたらし、4条の凹輪文を施す内面縁部以上ナゲ調整、以下ケメリ調整	
125-5	SD14	甕	口径 18.0 (口縁部 1/6分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②暗黄褐色 ③普通	頭部がやや長めで、口縁部は上下に鉛錆して頭をもち、4条の凹輪文を施す内面縁部以下ナゲ調整、他外表面ともナゲ調整	
125-6	SD14	甕	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縁部は軽らで丸くおおめ、突出部は下に出る。口縁部は風化色(いわゆる)が比較的の薄い頭部のうかがえる口縁部内面ナゲ調整、他外表面著しく調査不明	
125-7	SD14	底盤	底盤 8.6 (底部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	しっかりした平底、1度くびれさせて形を形成。壁端を立ち上げていて、外縁及び調査、内面風化著しく調査不明	外表面黒錆あり
125-8	SD14	胴部～底盤	底盤 6.7 (底部 1/5分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面黄褐色、内面灰褐色 ③普通	胴部の立ち上がりに対しても小さな平底、内面は鉛錆して頭部のうかがえる外縁及び調査、内面風化著しく調査不明	内面の黒褐色は底盤？
125-9	SD14	底盤	底盤 6.5 (底部 1/3分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	底盤部の広がった上げ底である。頭部はあまりがらず頭部に立ち上がる内面ともナゲ調整、特に外表面は丁寧に行なう	
125-10	SD14	底盤	底盤 10.6 (底部 完)	①1mmの大砂粒子(石英・長石など)や多く含む ②外表面にひびき黄褐色、内面灰褐色 ③普通	広くくびれさせた平底で、内面は鉛錆さえにより底面積を広げている。内面調査、外表面ミガキ調査、底盤ミガキのラヨコナゲ調査	
125-11	SD14	底盤	底盤 8.5 (底部 ほぼ完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	どくさりとした底盤、底盤ナゲ調査、外表面ミガキ調査、底盤ミガキのラヨコナゲ調査、内面ナゲ調査	
125-12	SD14	高杯	口径 26.2 (外縁部 1/7分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	曲した体部から屈曲して外傾し、複合口縁状の口縁部を有する。口縁部には軽い凹輪文を施す。外縁及び内面縁部ナゲ調整、体部ミガキのケメリ調整、内面口縁部ナゲ調査、以下丁寧なナゲ調査	
126-11	SD16	底盤	底盤 5.8 (底部 1/4分)	①1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	平底で、肩手の要綱へと立ち上がっていく。外表面ナゲ調査、内面底部ナゲ調査、調査ケメリ調整	
130-1	土器群18	表施 瓷	最大径 18.6 (胴部 1/7分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	頭部に2枚の割り出し突起をつくり算盤状を呈するもの。削り出しある面には「く」の字状のスタンプ文、3条の平行弦文、裏面には3条の平行弦文、逆「S」字状のスタンプ文、3~4条の平行弦文を施す。内面底盤丁寧なナゲ調査、外表面著しく調査不明	外表面黒錆りの風化跡をばくに確認できる
130-2	上部群18	蓋	口径 16.4 (口縁部 1/10分)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	広口の口縁で、底盤部は肥厚して3条の凹輪文を施す風化著しく調査不明	朱赤り底あり
130-3	上部群18	蓋	口径 9.8 (口縁部 1/6分)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石など)含む ②外表面灰褐色、内面暗褐色 ③普通	小型でイマイである。底立した頭部に口縁部が水平に肥厚して頭をもたらし、1条の凹輪文を施す。底盤には進化的山形文が軽く施されている。内面底盤丁寧なナゲ調査、頭部ケメリのち丁寧なナゲ調査、外表面著しく調査不明	
130-4	上部群18	蓋	口径 17.2 (口縁部 1/8分)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	跡状として口縁の広いものである。頭部から腹部へとメリハリなくだらかに移行し、口縁部は上下に肥厚して頭をもたらす。内面底盤丁寧なナゲ調査、頭部ケメリのち丁寧なナゲ調査、外表面風化著しく調査不明	
130-5	土器群18	表	口径 14.3 (口縁部 1/8分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の大砂粒子含む ②暗黄褐色 ③普通	口縁部が上に肥厚して頭をもたらす。外表面及び内面底盤以上ナゲ調査、以下ケメリ調査	

標識番号	出土地点	器種	出 積(cm)	①地土 ②色調 ③焼成	形 塵・手 法 の 特 徴	備 考
130-6	土器群18	壺	口径 16.3 (口縁部 1/6存)	①1~2mmの大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、表面はわざかに下に出る。口縁部には具鉄標識による約3条の焼成範文を施す。口縁部内面は外側をつくり受け口部となっている。肩部は腰の薄いものとなる。外面部及び内面部縁部ナデ調整、頸部窓ケズリ調整	
131-1	土器群18	壺	口径 16.5 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②灰青褐色 ③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字に屈曲し、口縁はわずかに内凹する。外面部はほとんど風化著しく調査不明	
131-2	土器群18	壺	口径 16.0 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②暗褐色 ③普通	ほとんど張りのない肩部から頸部「し」字状に屈曲して口縁部に至り、口縁部は上に肥厚して面をもち2条の回転文を施す。内面部及び外面部縁部以上ナデ調整、以下タケハ目が施される	
131-3	土器群18	壺	口径 19.0 (口縁部 1/6存)	①微細粒子(石英、長石、角閃石など)及び若干の1~2mmの大砂粒子含む ②黄褐色 ③普通	なだらかな肩部からスラッシュによって口縁部に移行し、口縁は上に張り出して面をもち2条の回転文を施す。内面部と頭部以上ナデ調整、以下タケハ目が施される	
131-4	土器群18	壺	口径 21.9 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字に屈曲し、口縁はわずかに内凹する。外面部はほとんど風化著しく調査不明	
131-5	土器群18	壺	口径 33.2 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	大型で厚手のタイプである。複合口縁で端部を丸くおさめ突出部は内側へ引き出す。口縁部には3条の回転文を施す。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-6	土器群18	壺	口径 25.0 (口縁部 1/5存)	①1mm大の砂粒子(石英、長石、角閃石など)及び若干の2~3mmの大砂粒子含む ②灰青褐色 ③普通	やや大型で厚手のタイプである。複合口縁で端部を丸くおさめ突出部は内側へ引き出す。口縁部には3条の回転文を施す。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-7	土器群18	壺	口径 17.3 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②外面部暗褐色→暗褐色、内面部にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に引いて出る。口縁部には具鉄標識による7条の回転文を施している。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-8	土器群18	壺	口径 21.7 (口縁部 1/5存)	①1mmの大砂粒子(石英、長石、角閃石、褐色粒子など)含む ②灰青褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に引いて出る。口縁部には具鉄標識による7条の回転文を施されている。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-9	土器群18	壺	口径 15.4 (口縁部 1/7存)	①1~2mmの大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②外面部暗褐色、内面部暗褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に引いて出る。口縁部には具鉄標識による7条の回転文を施され、上部はナデ窓である。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-10	土器群18	壺	口径 15.2 (口縁部 1/4存)	①1~2mmの大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はわざかに斜め下に出る。口縁部には小さな具鉄標識による焼成範文が施され、下部には焼成範文が施されている。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-11	土器群18	壺	口径 14.8 (口縁部 ほぼ完)	①1mm大の砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は膨らませて平底ぎみに丸くおさめ、突出部はわざかに下に引る。口縁部には具鉄標識による8条の回転文を施す。内面部窓部には焼成範文が施されている。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-12	土器群18	壺	口径 19.9 (口縁部 1/4存)	①微細粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②外面部暗褐色、内面部にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はまわりを抉り込ませて下に引く。口縁部には8条の回転文を施す。内面部窓部にはナデ窓である。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131-13	土器群18	壺	口径 19.4 (口縁部 2/3存)	①1mm大の砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③青赤	複合口縁で、端部は平面面をなし、突出部はわざかに斜め下に出る。口縁部には具鉄標識による約13条の回転文が施される。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
132-1	土器群18	壺	口径 22.6 (口縁部 1/10存)	①微細粒子(石英、長石、角閃石など)及び若干の1~2mmの大砂粒子含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はまわりを抉り込ませて下に引く。口縁部には具鉄標識による約13条の回転文が施される。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
132-2	土器群18	壺	口径 21.0 (口縁部 1/5存)	①1~2mmの大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②外面部暗褐色、内面部にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はまわりを抉り込ませて下に引く。口縁部には具鉄標識による約13条の回転文が施される。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面部に付ける事ができる
132-3	土器群18	壺	口径 19.8 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の大砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くゆるやかな平坦面をもち、突出部は脛らまで斜め下に出る。口縁部には具鉄標識による約10条の回転文が施されている。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
132-4	土器群18	壺	口径 17.9 (口縁部 1/6存)	①1~2mmの大砂粒子(石英、長石、角閃石など)多く含む ②外面部暗褐色、内面部暗褐色 ③青赤	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は脛らのみ横に丸くおさめ、内面部窓部には焼成範文が施されている。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
132-5	土器群18	壺	口径 23.4 (口縁部 1/6存)	①微細粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くゆるやかな平坦面をもち、突出部は脛らまで斜め下に出る。口縁部には具鉄標識による約10条の回転文が施されている。外面部及び内面部縁部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
132-6	土器群18	瓶	部 (頭部破片)	①1~2mmの大砂粒子(石英、長石など)含む ②灰褐色 ③普通	断面窓部の跡部の貼付焼成文を有する頭部破片である。実折の上に点々のヘラキが施す。外面部突端はナデ調整、頭部及び内面部ハケ目調査	

序番番号	出土地点	器種	法量(cm)	①始土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
132-7	七輪群18	底 部	底径 7.2 (底部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む 若干の2~3mmの大砂粒子含む ②暗黄褐色 ③普通	しづらかに立派で、底面円溝を作り、そのまわりから祐土被を巻き上げているのが最も見易い 外表面及び内面脚部ナゲ調整、脚部ケズリ調整	底面に黒斑あり
132-8	土器群18	底 部	底径 7.9 (底部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む 外表面黄褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	底平で、底部から脚部へくびれを入れて立ち上がる 外表面くびれ及び底面ナゲ調整、脚部ミガキ調整、内面ケズリ調整	底面に黒斑あり
132-9	土器群18	底 部	底径 6.1 (底部 完)	①1~3mmの大砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む ②黄褐色 ③普通	厚手の上げ底である 内外面とも風化に著しく調査不明	
132-10	土器群18	底 部	底径 4.7 (底部 1/4存)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	底平として立派手で、平底である。底面には網代底模る 外表面ケズリ調整、内面ケズリ調整	
132-11	七輪群18	底 部	底径 4.2 (底部 完)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	底面から指押さえにより上げ底にしている 外表面ケズリ調整、内面は底面中央を中心としてヘラ押さえにより 取り除いている	
132-12	土器群18	底 部	底径 3.5 (底部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	小さいや上り底である 内外面とも丁寧なナゲ調整	
132-13	土器群18	底 部	底径 3.9 (底部 完)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	小さいや上り底である 外表面ケズリ調整、底面ナゲ調整、内面ケズリ調整	
132-14	土器群18	底 部	底径 2.5 (底部 完)	①1~3mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面黄褐色・擦褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	穂端のあまい小さな平底で、器底もやや薄手である 外表面に丁寧なナゲ調整、内面ケズリ調整、底面削落して調査不明	内外面に黒斑あり
132-15	土器群18	高 所	(坏壊破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面灰褐色・擦黃褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	体部から直立状で、口縁部が立ち上がる。口縁部は平坦面でもら、口縁面上には5枚の凹凸線を施す。 内外面ともナゲ調整、特に内面は丁寧なナゲ調整	外面上に黒斑あり
132-16	土器群18	脚 部	底径 10.5 (脚部 1/8存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②暗黄褐色 ③普通	高所に付合付脚など脚部がある。脚部は断面形で輪樋張り、底部は断面形で輪樋張り。 底部は4枚の回転線の脚筋が觀察される。その上に現状で2枚の透しがあり 内面ナゲ調整、外表面風化著しく調査不明	贈入品?
132-17	土器群18	高 所	底径 12.6 (脚部 1/3存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②暗黄褐色 ③普通	接合部に粘土被が詰めたり、また脚部も厚手のため全体にこくりとしたりしている。脚部は粗面で接合に隙状を呈す 外表面脚部ミガキ調整、脚部丁曲なナゲ調整、内面脚部ナゲ調整、脚部ケズリ調整	外外面塗り
132-18	土器群18	井 口	口径 17.2 (口縫部 1/2存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石など)含む ②外表面灰褐色・黄褐色、内面ケズリ ③普通	最大径が脚部であり、口縫部はわずかに上下に肥厚して面をもつて内外面とも頗る以上ナゲ調整、外表面以下ミガキ調整、内面以下ケズリ調整	外面上に黒斑あり
133-1	七輪群18	鼓形器台	底径 16.1 (脚部 1/5存)	①1~3mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	脚部は複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施され、下部は丁寧に削削しを行っている。端部は丸くおさめる。脚部はまだ長いものである 外表面脚部ミガキ調整、脚部丁曲なナゲ調整、内面脚部ナゲ調整、脚部ケズリ調整	
133-2	土器群18	鼓形器台	底径 15.0 (脚部～脚部 ほぼ完)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・擦色粒子など)多めに含む ②にぶい黄褐色 ③普通	脚部は複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施され、下部は丁寧に削削しを行っている。端部は丸くおさめる。脚部はまだ長いものである 内面脚部ミガキ調整、脚部丁曲なナゲ調整、外表面風化著しく調査不明	
133-3	土器群18	鼓形器台	底径 18.8 (1/2存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	脚部は複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施され、下部は丁寧に削削しを行っている。端部は丸くおさめる。脚部はまだ長いものである 内面脚部ミガキ調整、脚部丁曲なナゲ調整、内面脚部ナゲ調整	
133-4	土器群18	鼓形器台	口径 26.0 (受部 1/6存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・擦色粒子など)含む ②黄褐色 ③普通	受部と脚部とも複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施され、下部は丁寧に削削しを行っている。端部は丸くおさめる。脚部はまだ長いものである 外表面脚部ミガキ調整、脚部丁曲なナゲ調整、内面脚部ナゲ調整、脚部ケズリ調整	脚部内面に黒斑あり
133-5	土器群18	鼓形器台	口径 25.3 高径 24.6 底径 20.5 (4/5存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・擦色粒子など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	受部と脚部とも複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施され、下部は丁寧に削削しを行っている。端部は丸くおさめる。脚部はまだ長いものである 外表面脚部ミガキ調整、脚部丁曲なナゲ調整、内面脚部ナゲ調整、脚部ケズリ調整	脚部内面に黒斑あり
133-6	土器群18	鼓形器台	口径 24.5 (受部 1/4存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	受部と脚部とも複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施され、下部は丁寧に削削しを行っている。端部は丸くおさめる。脚部はまだ長いものである 外表面脚部ミガキ調整、脚部丁曲なナゲ調整、内面脚部ナゲ調整	133-7と同一 個体の可能性あり
133-7	土器群18	鼓形器台	底径 20.6 (脚部 ほぼ完)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	脚部は複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施され、下部は丁寧に削削しを行っている。端部は丸くおさめる。脚部はまだ長いものである 内面脚部ナゲ調整、内面ミガキ調整、脚部ケズリ調整	外面上に朱塗りあり 133-6と同一 個体の可能性あり
133-8	土器群18	鼓形器台	底径 20.6 (脚部 1/9存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②暗黄褐色 ③普通	脚部は複合口縫状で、面には貝殻模様による横回線文が施されたもの、下部を削削している 内面脚部ケズリのちミガキ調整、内面風化著しく調査不明	
134-1	I 区 A5 Gr 平明 B5 Gr 11層	食	口径 25.3 (口縫部 1/5存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石など)含む ②根褐色 ③普通	広い蓋で、底面する脚部から口縫部が外反し、底面のあらぬ端部は平垣面をなし、1ヶ所貼り付け浮文がされた痕跡あり、脚部にへら状工具により鋸角的な三角形を描いていた。43-1 (SD10 出土) の魚鱗と脚部で似ている 風化著しいが内外面ともナゲ調査、脚部ナゲ調査	43-1と直接接合するとのと考したが、脚部はなく、同 個体にはまちがいないと 思うので43-1 のナゲとは別 のナゲと思われる

標本番号	出土地点	器種	出 墓 (m)	①輪上・②色調・③焼成	形態・手法の特徴	備考
134-2	I区 A3 Gr 8番	蓋	口徑 26.9 (口縫部 1/8存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰黃褐色 ③普通	広口型で、口縫部端部が鉛の手状に水平に肥厚して平坦面をつくり、3本脚による斜面文を、口部には斜目文を施す。また口縫部には現状で6条の斜目點狀突起文をめぐらし、2本1対の斜状文を貼り付けている 外面ナゲ調整、内面ナゲ調整	
134-3	I区 B3 Gr 1番	蓋	(口縫部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黃褐色 ③普通	広口型で、口縫部端部が鉛の手状に水平に肥厚して平坦面をつくり、3本脚による斜面文を、口部には斜目文を施す。また口縫部には現状で6条の斜目點狀突起文をめぐらし、2本1対の斜状文を貼り付けている 外面ナゲ調整、内面ナゲ調整	
134-4	I区 B3 Gr 8番	蓋	(口縫部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黃褐色 ③普通	広口型で、口縫部先端附近の破片である。底面に広がった口縫部から縫隙は垂下するようである。口部には目文を施し、口縫部にはハベラ状工具により2本で1本筋を表現し、錐のある羽状文を施している 内外面ともナゲ調整	
134-5	I区 A4 Gr 8番	蓋	(口縫部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黃褐色 ③普通	広口型で、縫隙が垂下するものである。口縫部には2段の波状文が、縫隙には斜格子文が施してある 内外面ともナゲ調整	
134-6	I区 A1 Gr 4番	蓋	口徑 18.0 (口縫部 1/9存)	①粗砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の2~3mmの大砂粒子含み、やや緻密 ②外面暗灰黃褐色 ③普通	広口型で、振りの縫隙から直立外反した口縫部へと移行する縫隙は垂下する。縫隙には貼付突起文が施できる。おそらく縫隙底は垂下するであろう。目前に列点文を施す。外縫部には指圧底えさりによる外反せている 外面ナゲ底部ナゲ調整、縫隙以下ハケ日調整、内面縫部ハケ目調整、底化風景著しく調整不規	D部と縫隙を接点なく想定でつなぎ合わせたもの
134-7	I区 A3 Gr 8番	蓋	口徑 16.0 (口縫部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黃褐色 ③普通	口縫部が上に肥厚して面をもち、3本筋による斜格子文を施し、内縫部文を貼り付ける。縫隙には指圧底突起文をめぐらす 内外面ともナゲ調整	
134-8	I区 A2 Gr 4番	蓋	口徑 31.7 (口縫部 1/16存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②暗灰黃褐色 ③普通	広口型で、口縫部端部が鉛の手状に水平に肥厚して平面をつくり、斜面文及び口部に斜目文を施し、内縫部文を貼り付ける。縫隙には現状で6条の斜目點狀突起文をめぐらす。 内外面ともナゲ調整	
134-9	I区 B3 Gr 8番	蓋	口徑 21.0 (口縫部 1/13存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黃褐色 ③普通	広口型で、口縫部端部が上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を、縫隙には2条の凹線文を施す 内外面とも口縫部ナゲ調整、縫隙にはハケ日の後縫あり	
134-10	I区 A4 Gr 8番	蓋	口徑 34.1 (口縫部 1/6存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗褐色・断面黒灰色 ③普通	広口型で、口縫部端部は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を、縫隙には2条の凹線文を施す 内外面とも口縫部ナゲ調整、縫隙にはハケ日の後縫あり	
135-1	I区 B7 Gr 16番	蓋	口徑 15.4 (口縫部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黃褐色 ③普通	外反した縫隙部から口縫部へと移行し、口縫は上に肥厚して面をもち、2~3条の凹線文を施す。外縫部には3条の凹線文があり、内縫部とともに基本的にナゲ調整であるが、外縫部にはナゲ調整前のハベラ底が認められる	
135-2	I区 B1 Gr 16番	蓋	頭部底 15.3 (頭部破片)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②にぶい黃褐色 ③普通	頭部から外反して口縫部に至り、縫隙は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 内外面ともハケ目調整できるが他の底化風景著しく調整不規	
135-3	I区 A7 Gr 16番	蓋	口徑 31.0 (口縫部 1/5存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②暗灰黃褐色 ③普通	縫隙から外反して口縫部に至り、縫隙は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 内外面ともナゲ調整、内面縫部以上ハケ目調整、以下ケメリ調整	
135-4	I区 A6 Gr 16番	蓋	口徑 20.0 (口縫部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②灰褐色～にぶい黃褐色 ③普通	縫隙から外反して口縫部に至り、縫隙は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 内面縫部以下ナゲ調整、他内外面ともナゲ調整	内外面に黒斑あり
135-5	I区 A8 Gr 16番	蓋	口徑 23.0 (口縫部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②断面黄褐色 ③普通	縫隙部のやや低い處で、口縫部は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 内面縫部以下ナゲ調整、他内外面ともナゲ調整	
135-6	I区 A4 Gr 8番	蓋	口徑 23.0 (口縫部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び2~3mmの大砂粒子含む ②にぶい黃褐色 ③普通	縫隙部から両側に口縫部が立ち上がり、中空よりるく内湾していく。立ち上がった口縫部には3条の凹線文を施す 内外面とも底化風景著しく調整不規	
135-7	I区 A4 Gr 8番 B5 Gr 3番	蓋	口徑 15.4 (口縫部 1/4存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい 黄褐色 ③普通	縫隙部から上に拡張して窓口縫となったもの。口縫部には4条の凹線文を施す。内面縫部に指圧底を施す 外縫部ハケ目調整、内面縫部とも横縫以上ナゲ調整、内面縫部以下ケメリ調整	
135-8	I区 A1 Gr 不明	蓋	口徑 18.8 (口縫部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石など)及び1~2mmの大砂粒子含む ②にぶい 黄褐色 ③普通	複合口縫で、縫隙は丸くおさま、突出部は下に強く出る。口縫部には4条の凹線文を施す 内外面ともナゲ調整	外縫部付着、復の可能性あり
135-9	I区 B3 Gr 8番	蓋	口徑 16.0 (口縫部 1/5存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰色 ③普通	分厚い縫隙の短い複合口縫で、口縫部は丸くおさま。突出部は下に出る。丸くした口縫部は底化風景である。縫隙には4条の凹線文の外に底化風景も施している 内面縫部以下ナゲ調整、他内外面ともナゲ調整	
135-10	I区 A1 Gr 4番	蓋	口徑 17.9 (口縫部 1/6存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の1~2mmの大砂粒子含む ②にぶい 黄褐色 ③普通	上にいたる複合口縫で、縫隙は丸くおさま。突出部は膨らませるので、口縫部には貝殻縫線による6条の凹線文が施され、の間に平行的に指圧底されたところあり。縫隙には貝殻縫線による底化風景も施す 内面縫部以下ナゲ調整、他内外面ともナゲ調整	頭部に煤?付着

桜留番号	出土地点	器種	法量(cm)	①粒土 ②色調 ③底成	形態・手法の特徴	備考
135-11	I 区 B8 Gr 13層	壺	口径 19.6 (口縁部 1/10存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②に赤い黄褐色 ③普通	壺合口部で、口縁部ほどより急に外反し壺部は丸くおさまる。突出部はなく、口縁部には横筋線による3条の横筋線文を施したから彫削工を行っている。	
135-12	I 区 B7 Gr 16層	壺	口径 30.2 (口縁部 1/10存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②表面に赤い黄褐色、内面暗赤褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、壺部は膨らませて平底に丸くおさまる。突出部は横く出る。口縁部には1条の横筋文が施されたのちに上位のみ削除している。	
136-1	I 区 B6 Gr 12層	壺	口径 16.0 (口縁部 1/5存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の1~3mmの大砂粒子含む ②に赤い黄褐色 ③普通	複合口縁で、壺部は膨らませて丸くおさまる。突出部はない。口縁部には横筋線による10条の横筋文を施したのちに上位のみ削除している。	外面部に焼付着
136-2	I 区 A6 Gr 12層	壺	口径 13.0 (口縁部 1/5存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②に赤い黄褐色 ③普通	複合口縁で、壺部は丸くおさまる。突出部はわずかに下に出る。口縁部から削除してかけた多条の壳・底筋文を施す。それを利用して有輪の跡を残す。	口縁部焼付着
136-3	I 区 B7 Gr 16層	壺	口径 18.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②に赤い黄褐色、深赤褐色 ③普通	複合口縁で、壺部は平底面をもち、少々太めの対耳を施す突出部に出る。壺部には3条の横筋文を施す。それを利用して有輪の跡を残す。	内面部とも焼付部にナゲ調整、能内面ともナゲ調整
136-4	I 区 B6 Gr 9層	壺	口径 18.0 (口縁部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②に赤い黄褐色 ③普通	厚手口縁で、壺部は平底面をもち、突出部は横筋線文に出る。口縁部には横筋線による10条の横筋文を施す。	
136-5	I 区 B6 Gr 12層	壺	口径 14.0 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②に赤い黄褐色 ③普通	複合口縁で、壺部は丸くおさまる。突出部はわずかに下に出る。口縁部に外輪をもつて、窓部は張り出すようである。	
136-6	I 区 B7 Gr 16層	壺	口径 15.1 (口縁部 1/4存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②赤褐色 ③普通	窓部をもつする壺部で、窓部は張り上がり、窓部と2條の横筋文のようである。壺部は平底に丸くおさまる。	
136-7	I 区 B6 Gr 11層	壺	底径 13.9 (窓部 1/4存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・角閃石など)含む ②赤褐色 ③普通	窓部に斜削文を施した貼付突痕文をめぐらせるものがある。外面部窓部にナゲ調整、窓部丁寧なナゲ調整、内面部窓部ケイズ調整不規則。	同様に斜削子文を施した貼付突痕文は79-1にも記されている。窓入品?
136-8	I 区 B5 Gr 16層	短 瓶 壺	口径 9.4 最大径 13.5 底径 12.2 高さ 9.4 (2/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②に赤い黄褐色 ③普通	台形の短瓶蓋で、壺部は蝶状を呈する。壺部には1ヶ所穿孔されているが、残存状況から判断すると削削部にもう1ヶ所あったと想われる。	
136-9	I 区 A7 Gr 16層	直口壺	口径 9.9 (口縁部 完)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②赤褐色 ③普通	直立した口縁で、壺部は平底面をなし、口縁部には2孔2対の穿孔があり、胴部には横筋線文が施すようである。	朱塗り直りあり
136-10	I 区 A6 Gr 16層	短 瓶 壺	口径 11.7 (口縁部 1/2存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石など)多く含む ②外面赤褐色、内面暗赤褐色 ③普通	長い壺部が直して立ち上がり、口縁部は外に突出させて外張る。壺部は丸くおさまる。	
136-11	I 区 A8 Gr 不明	短 瓶 壺 (窓部破片)		①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②赤褐色 ③普通	異形状を呈するもので、窓部2条の削り落し突痕部は異なる。窓面上には圓心円文のスラッシュ文、4条の平行沈線文を、窓下には数条の平行沈線文を施す。	
136-12	I 区 B1 Gr 4層	短 瓶 壺	口径 18.4 (口縁部 1/10存)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②赤褐色 ③普通	口縁部はわざかに埋削して平底面をもつ。その下に2条の対耳付突痕文を施す。	
136-13	I 区 B2 Gr 4層	短 瓶 壺	口径 22.1 (口縁部 1/10存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②赤褐色 ③普通	口縁部が内側し、肥厚して平底面をつくる。肥厚部分は粘土組合せで充てているため、内面接觸面にその痕跡があり外面部窓部にナゲ調整。他は内外面ともナゲ調整と思われる	
137-1	I 区 B3 Gr 8層	短 瓶 壺	口径 10.0 (口縁部 1/4存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②に赤い黄褐色 ③普通	口縫部は丸く平に埋削して平底面をつくり、急傾斜で窓部へ移行する。	
137-2	I 区 A3 Gr 8層	短 瓶 壺	口径 10.0 最大径 14.0 (口縁部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②に赤い黄褐色 ③普通	薄手のカップ状を呈するものである。あるいは欠損している外輪に押さえられたりしない。	外間に黒斑あり
137-3	I 区 A3 Gr 8層	壺	口径 15.6 最大径 17.6 (口縁部 1/2存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石など)含む ②赤褐色 ③普通	頭部上半に最大径があり、全体に細長くなりである。外輪部ナゲ調整、外面部窓部・ケイズ調整、内面風化帯して調整不規則	
137-4	I 区 B4 Gr 4層	壺	口径 15.8 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②暗赤褐色 ③普通	なだらかな胸窓から窓部「L」字状に屈曲し口縁部に至る。口縁部はむろんに埋削する。	外面部窓付着
137-5	I 区 B6 Gr 4層	壺	口径 15.9 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②暗赤褐色 ③普通	なだらかな胸窓の上での、なだらかな窓部から窓部「K」の字状に屈曲し、口縁部に至る。	黒い付着物あり

神田番号	出土地点	都 横	寸 量(cm)	①地土 ②色調 ③構成	形 異・手 法 の 特 徴	備 考
137-6	I 区 B4 G r 16層	變	口徑 23.4 (口縫部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面暗褐色、内面墨灰色 ③普通	ならかなな鋼部から頸部「く」の字状に屈曲し口縫部に至る。口縫はほんのわずかに肥厚する。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。以下ハケ目調査	
137-7	I 区 B3 G r 8層	變	口徑 15.8 (口縫部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	ならかなな鋼部から頸部「く」の字状に屈曲し口縫部に至る。口縫は上にわずかに肥厚して小ぶりな凹面をもつ。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。以下ハケ目調査	外面部付帯
137-8	I 区 B1 G r 4層	變	口徑 16.2 (口縫部 1/8存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)及 び1mm大の砂粒子少しある ②墨灰地へ増 赤褐色 ③普通	ならかなな鋼部から頸部「く」の字状に屈曲してあり、口縫部ははくなくしていく。このためめらかになつきなくなっている。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。以下ハケ目調査	外面部付帯
137-9	I 区 B5 G r 16層	變	口徑 18.2 最大径 21.2 (口縫部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②墨灰地へにい 黄褐色 ③普通	開口部近くに最大径あり、ならかなな鋼部から頸部ゆるい「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上にわずかに肥厚して面をもち、わざわざながら縫みをつける。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。以下ハケ目調査	外面部付帯
137-10	I 区 B5 G r 16層	變	口徑 16.9 最大径 18.6 (口縫部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	開口がほとんど狭らず圓筒状を呈する。頸部は「L」字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上にわずかに肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。以下ハケ目調査	
138-1	I 区 B5 G r 12層	變	口徑 17.8 (口縫部 1/6存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	ほとんど張りのない鋼部から頸部「く」の字状に屈曲し口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みをつける。内外面及び外面部付帯以上ナゲ調整。外面部付帯ハケ目調査	
138-2	I 区 A4 G r 16層	變	口徑 19.5 (口縫部 1/8存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	やや張りやや干ばつがでる頸部も強い「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は全体に肥厚して面をもつ。内外面ともナゲ調整	
138-3	I 区 A3 G r 16層	變	口徑 24.4 (口縫部 1/9存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	張りのある鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組み脱臼による彎りの深い斜面をす。斜面には沿鎖正直文脈をめぐらす。肩部には沿鎖正直文脈があり内外面とも鋼部以上ナゲ調整。以下ハケ目調査	
138-4	I 区 B2 G r 4層	變	口徑 29.9 (口縫部 1/11存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	張りのある鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組み脱臼による彎りの深い斜面をす。斜面には沿鎖正直文脈をめぐらす。肩部には沿鎖正直文脈を貼り付ける。内外面ともナゲ調整	
138-5	I 区 A2 G r 4層	變	口徑 14.0 (口縫部 1/9存)	①細砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	ゆるやかな鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫はほんのわずかに肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも鋼部以上ヨコナゲ調整。内面タガネ調整	
138-6	I 区 B2 G r 4層	變	口徑 20.0 (口縫部 1/10存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	ゆるやかな鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫はほんのわずかに肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも鋼部以上ヨコナゲ調整。内面タガネ調整	
138-7	I 区 A3 G r 8層	變	口徑 19.4 (口縫部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)少しある ②にい 黄褐色 ③普通	やや張りのあら鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。外面部付帯ハケ目調査	外面部付帯
138-8	I 区 B4 G r 8層	變	口徑 14.3 (口縫部 1/4存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面部褐色、内面にい 黄褐色 ③普通	ほとんど張りのない鋼部から頸部「く」の字状に屈曲し、口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。2条の浅い沈文を有する。内外面及び外面部付帯以上ナゲ調整。以下ハケ目調査	外面部付帯
138-9	I 区 A3 G r 16層	變	口徑 19.6 (口縫部 1/8存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)少しある ②緑褐色へ黄褐色 ③普通	張りのない鋼部から頸部「く」の字状に屈曲し口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。外面部付帯ハケ目調査	外面部付帯
138-10	I 区 A3 G r 16層	變	口徑 19.2 (口縫部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	ほとんど張りのない鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至り、口縫は上に肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも口縫部ナゲ調整。他風化著しく調査不明	
138-11	I 区 A4 G r 4層	變	口徑 22.8 (口縫部 1/10存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	やや張った鋼部から頸部「く」の字状に屈曲し、口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みをつける。内外面とも鋼部以上ナゲ調整。外面部付帯ハケ目調査。他は風化著しく調査不明	外面部付帯
139-1	I 区 B4 G r 8層	變	口徑 26.5 (口縫部 1/12存)	①1~2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	張りのない鋼部から頸部の角度を開いて口縫部へと移行する。口縫は上に肥厚して面をもち組みの回線文を有す。頸部には沿鎖正直文脈が貼り付けである。内外面とも口縫部ナゲ調整。他は風化著しく調査不明	
139-2	I 区 B3 G r 8層	變	口徑 23.9 (口縫部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・褐褐色粒子など)含む ②黄褐色 ③普通	張りのない鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みの回線文を有す。頸部には沿鎖正直文脈が貼り付けである。内外面とも口縫部ナゲ調整。他は風化著しく調査不明	
139-3	I 区 B2 G r 4層	變	口徑 26.1 (口縫部 1/5存)	①細砂粒子(石英・長石など)含む ②褐褐色 ③普通	やや張りのあら鋼部から頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みの回線文を有す。頸部には沿鎖正直文脈が貼り付けである。内外面とも口縫部ナゲ調整。半粒が飛散する	
139-4	I 区 A4 G r 6層	變	口徑 17.4 最大径 23.7 (口縫部 1/6存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	頸部の外に巣立がるが、頸部は「L」字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上に肥厚して面をもち組みの回線文を有す。頸部には沿鎖正直文脈が貼り付けである。内外面とも口縫部ナゲ調整。外面部付帯ハケ目調査。下ホケ目調査。内面部付帯ハケ目調査	外面部付帯

標図番号	出土地点	器種	法長(cm)	①粘土 ②色調 ③構成	形態・手法の特徴	備考
139-5	I区 B4 Gr 8層	甕	口径 25.8 (口縁部 1/10倍)	①微妙粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にいぶい黄褐色 ③普通	重なる2箇所から頸部部に「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。頸部には横張圧痕が貼り付けける内外面とも頸部以上ナダ調整、以下ハケ目調整	
140-1	I区 B4 Gr 3層	甕	口径 28.0 最大径 29.9 (口縁部 1/6倍)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にいぶい黄褐色 ③普通	丸く膨らむ頸部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。内外面とも頸部以上ナダ調整、以下外面部ハケ目調整、内面部化粧し調査不明	
140-2	I区 B3 Gr 3層	甕	口径 16.1 (口縁部 1/5倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色 ③普通	なだらかな頸部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。外面部は上下ナダ調整、内外面とも頸部以下ハケ目調整、内面部口縁部化粧し調査不明	
140-3	I区 B2 Gr 4層	甕	口径 18.0 (口縁部 1/5倍)	①微妙粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②明黄褐色 ③普通	なだらかな頸部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。外面部は上下ナダ調整、内外面とも頸部以下ハケ目調整、内面部口縁部化粧し調査不明	
140-4	I区 B2 Gr 4層	甕	口径 24.0 (口縁部 1/6倍)	①微妙粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②外面部にいぶい黄褐色 ③普通	なだらかな頸部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。外面部は上下ナダ調整、内外面とも頸部以下ハケ目調整、内面部口縁部化粧し調査不明	外面部に風化あり
140-5	I区 B4 Gr 8層	甕	口径 24.0 (口縁部 1/9倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいぶい黄褐色 ③普通	なだらかな頸部から頸部は「く」の字状により食い込んだようになっている。そのため口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。外面部は上下ナダ調整、内外面は以下ハケ目調整、内面部口縫化粧し調査不明	
141-1	I区 B5 Gr 16層	甕	口径 23.9 (口縁部 1/6倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいぶい黄褐色 ③普通	なだらかな頸部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。内外面及び外面部頸部以上ナダ調整、以下ハケ目調整	
141-2	I区 B2 Gr 4層	甕	口径 20.5 (口縁部 1/5倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む ②黒褐色～暗灰褐色 ③普通	最大径が頸部中央よりやや下位にあり、頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。頸部は上下に横張圧痕が5点ずつ(10点合計)で施す。内外面とも頸部以上ナダ調整、外面部は以下ハケ目調整、内面部頸部上半押さえ、ナダ調整、下ハケ目調整	内面におこなった付着全般的に剥落している
141-3	I区 B2 Gr 4層	甕	口径 16.8 (口縁部 1/4倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色 ③普通	なだらかな頸部から頸部は「く」の字状により食い込んだようになっている。そのため口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。内面部と頸部以上ナダ調整、外面部は以下ハケ目調整、以下外面部多様な凹縫文のハケ目調整、内面部付着えナダ調整	
141-4	I区 B4 Gr 16層	甕	口径 24.0 (口縁部 1/12倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色 ③普通	頸部「く」の字状に屈曲して口縫部に至り、口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文及び外面部「く」の字状に屈曲して口縫部に至る。頸部には工具でついたと思われる仕込み文が貼り付けてある。内外面ともナダ調整	
141-5	I区 A2 Gr 4層	甕	口径 11.3 最大径 14.4 底高 15.1 底径 5.6 (2/3倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色～暗灰褐色 ③普通	平底の底部から最大径が頸部中央より上位にあり、頂部は直面で外縫口縫部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもじら条件の凹縫文及び外縫部に10点ずつ(20点合計)で施す。頸部最大径に側突文が貼り付けてある。外面部はナダ調整、頸部上半ハケ目調整、下半ハケ目調整、底面はナダ調整、内面部口縫部ナダ調整、頸部上半ナダ調整、下ハケ目調整、底面はナダ調整、底面ケリ調整、底面ナダ調整	
141-6	I区 A1 Gr 4層	甕	口径 20.2 (口縁部 1/11倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色 ③普通	複合口縫状で、口縫部は上3条は浅い枕縫文、下1条は圓縫文を施す。内外面ともナダ調整、内面部頸部凸部は丁寧なナダであるが凹部は不明	
141-7	I区 A2 Gr 8層	甕	口径 21.9 (口縁部 1/9倍)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色 ③普通	口縫部が上下に拡張されて面をもじら条件の凹縫文を施す。内外面ともナダ調整、頸部には横張圧痕を貼り付ける	
141-8	I区 B5 Gr 3層	(口縫部破片)		①微妙粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいぶい黄褐色 ③普通	小さな複数口縫で、頸部は丸くおさまる、突出部は斜め下に出る。口縫部には4条の浅い枕縫文を施す。外面部及び内面部頸部以上ナダ調整、以下ケリ目調整	
141-9	I区 B4 Gr 8層	甕	(口縫部破片)	①微妙粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②根褐色 ③普通	内傾した複合口縫で、頸部は反りぎみ、突出部は出ない。口縫部に浅いナダによる開込み1条の凹縫文を施す。外面部及び内面部頸部以上ナダ調整、以下ケリ目調整	外面部付着
141-10	I区 A4 Gr 8層	甕	(口縫部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色 ③普通	厚手で重りのある頸部から頸部「L」字状に屈曲して口縫部に至る。口縫はわざわざに肥厚して面をもじら条件の凹縫文を施す。外面部及び内面部頸部以上ナダ調整、以下ケリ目調整	
141-11	I区 A5 Gr 12層	甕	口径 17.7 (口縁部 1/8倍)	①微妙粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の1~2mmの大砂粒子含む ②暗灰褐色 ③普通	短い頸部からぐらぐらに口縫部に移行する。口縫は上下に拡張して面をもじら条件の凹縫文を施す。外面部及び内面部頸部以上ナダ調整、以下ケリ目調整	
141-12	I区 B3 Gr 1層	甕	口径 20.6 (口縁部 1/11倍)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいぶい黄褐色 ③普通	短い頸部からぐらぐらに口縫部に移行する。口縫は上下に拡張して面をもじら条件の凹縫文を施す。外面部及び内面部頸部以上ナダ調整、以下ケリ目調整	
141-13	I区 A4 Gr 8層	甕	口径 21.0 (口縁部 1/6倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰褐色 ③普通	厚手で重りのある複合口縫で、頸部は丸くおさまる、突出部は下に出る。口縫部には4条の凹縫文を施す。外面部及び内面部頸部以上ナダ調整、以下ケリ目調整	

標本番号	出土地點	器種	出 墓 (m)	①輪上 ②色調 ③洗成	形 番 号	手 法 の 特 徴	備 考
142-1	I 区 A2 G r 4層	甕	口径 24.8 (口縁部 1/5倍)	①~2mmの大砂粒子 (石英、長石、角閃石 ・褐色斑など) 含む ②淡黄褐色 ③普通	丸く削った輪郭から腰部「く」の字型に組曲して口縁部に至 るやや内傾した台面の縁で、端部は斜めに平底部をもつて おり、突出部は部分で斜めに下に出る。口縁部には3条の凹 溝文を施す	丸く削った輪郭から腰部「く」の字型に組曲して口縁部に至 るやや内傾した台面の縁で、端部は斜めに平底部をもつて おり、突出部は部分で斜めに下に出る。口縁部には3条の凹 溝文を施す	
142-2	I 区 B5 G r 13層	甕	口径 15.9 (口縁部 1/5倍)	①鐵砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	腰部から口縫にかけて広口状を呈し、複合口縁で、腰部は丸くお さめ、突出部は丸い。口縁部には3条の凹溝文を施す	腰部から口縫にかけて広口状を呈し、複合口縁で、腰部は丸くお さめ、突出部は丸い。口縁部には3条の凹溝文を施す	
142-3	I 区 B5 G r 13層	甕	口径 14.5 (口縁部 1/4倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 多く含む ②黄褐色 ③普通	厚手で短い複合口縁で、腰部は腰らまで丸くおさめ、突出部 はわざと斜めに下に出る。端部は強く組曲して腰部は張るよう である	厚手で短い複合口縁で、腰部は腰らまで丸くおさめ、突出部 はわざと斜めに下に出る。端部は強く組曲して腰部は張るよう である	
142-4	I 区 B4 G r 不明	甕	口径 20.3 (口縁部 1/7倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、褐色粒子 ・角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口 縁部には3条の凹溝文を施す	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口 縁部には3条の凹溝文を施す	
142-5	I 区 A5 G r 13層	甕	口径 16.4 (口縁部 1/7倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口 縁部には3条の凹溝文を施す	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口 縁部には3条の凹溝文を施す	外面縁?付着
142-6	I 区 A7 G r 不明	甕	口径 24.0 (口縁部 1/7倍)	①~2mmの大砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縁で、内面は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり り、外縁部をもって厚手としている。腰部は平坦面をつく り突出部を斜めに下に出している。口縁部には貝殻模様による約10 条の凹溝文を施す	複合口縁で、内面は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり り、外縁部をもって厚手としている。腰部は平坦面をつく り突出部を斜めに下に出している。口縁部には貝殻模様による約10 条の凹溝文を施す	外面縁?付着
142-7	I 区 B3 G r 4層	甕	口径 21.0 (口縁部 1/7倍)	①lm以下の砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縁で、腰部以外に曲げて平面をみに丸くおさめ、突出部 は下に出る。口縁部には5~6条の凹溝文を施す	複合口縁で、腰部以外に曲げて平面をみに丸くおさめ、突出部 は下に出る。口縁部には5~6条の凹溝文を施す	外面に若干の 横付帯風靡
142-8	I 区 A1 G r 9層	甕	口径 14.0 (口縁部 1/2倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	短い複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は下に出る。口 縁部には貝殻模様による凹溝文を施す。肩部に3条の貝殻模様 の沈れ跡+3条の沈れ跡を施す	短い複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は下に出る。口 縁部には貝殻模様による凹溝文を施す。肩部に3条の貝殻模様 の沈れ跡+3条の沈れ跡を施す	
142-9	I 区 B4 G r 8層	甕	口径 15.8 島田産 17.2 (口縁部 1/3倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②暗褐色~灰褐色 ③普通	丸く削んだ輪郭からなだらかに腰部に移行し、口縁部へと至 る。口縁部で、端部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による7条の凹溝文を施す。肩部 には貝殻模様による4条の凹溝文を施す。それに対して底角方向 へと引き寄せたのが窓である	丸く削んだ輪郭からなだらかに腰部に移行し、口縁部へと至 る。口縁部で、端部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による7条の凹溝文を施す。肩部 には貝殻模様による4条の凹溝文を施す。それに対して底角方向 へと引き寄せたのが窓である	
142-10	I 区 B4 G r 6層	甕	口径 19.6 (口縁部 1/6倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②暗褐色~にい 黄褐色 ③普通	中央から折れたように外反する複合口縁で、腰部は丸くおさ め、突出部は下に出る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を 13条以上にし、その上位に横消ししている	中央から折れたように外反する複合口縁で、腰部は丸くおさ め、突出部は下に出る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を 13条以上にし、その上位に横消ししている	外蓋採用者
142-11	I 区 B5 G r 16層	甕	口径 20.4 (口縁部 1/8倍)	①lm以下の大砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	
142-12	I 区 A3 G r 8層	甕	口径 20.2 (口縁部 1/6倍)	①lm以下の大砂粒子 (石英、長石、角閃石など) 含む ②暗褐色~にい 黄褐色 ③普通	複合口縁で、内面は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上 り、外縁は貝殻をもって厚手としている。腰部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	複合口縁で、内面は腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上 り、外縁は貝殻をもって厚手としている。腰部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	外蓋採用者
142-13	I 区 A7 G r 不明	甕	口径 22.9 (口縁部 1/6倍)	①lm大の砂粒子 (石英、褐色粒子、長石 ・角閃石など) 含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は出ない。口縁部には 貝殻模様による凹溝文を施す	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は出ない。口縁部には 貝殻模様による凹溝文を施す	
142-14	I 区 B5 G r 12層	甕	口径 15.8 (口縁部 1/6倍)	①~2mmの大砂粒子 (石英、長石、角閃石 など) 含む ②暗褐色~黃褐色 ③普通	だらりとした複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は出 ない。口縁部には貝殻模様による10条以上の凹溝文が所々破 壊され、部分的に擦剥を行なう	だらりとした複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は出 ない。口縁部には貝殻模様による10条以上の凹溝文が所々破 壊され、部分的に擦剥を行なう	
143-1	I 区 A1 G r 9層	甕	口径 37.6 (口縁部 1/5倍)	①~2mmの大砂粒子 (石英、長石、角閃石 など) 含む ②暗褐色~黃褐色 ③普通	大型で分厚い複合口縁で、腰部は丸くおさめり、突出部は斜 めに下に引き寄せます。口縁部には貝殻模様による凹溝文が約 19条~20条に分けて施されています	大型で分厚い複合口縁で、腰部は丸くおさめり、突出部は斜 めに下に引き寄せます。口縁部には貝殻模様による凹溝文が約 19条~20条に分けて施されています	
143-2	I 区 B2 G r 4層	甕	口径 27.8 (口縁部 1/6倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、褐色粒子 ・角閃石など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	厚手の複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出 る。口縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	内面におこ げ?付着
143-3	I 区 A7 G r 不明	甕	口径 25.8 (口縁部 1/5倍)	①~2mmの大砂粒子 (石英、長石、褐色粒子 ・角閃石など) 含む ②淡黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は出ない。口 縁部には11条の凹溝文を施す	厚手の複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は出ない。口 縁部には11条の凹溝文を施す	内面におこ げ?付着
143-4	I 区 B5 G r 13層	甕	口径 16.0 (口縁部 1/4倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、角閃石 ・金雲母など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出る。口 縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	複合口縁で、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出る。口 縁部には貝殻模様による凹溝文を施す	内面?付着
143-5	I 区 B5 G r 16層	甕	口径 14.9 (口縁部 1/4倍)	①lm大の砂粒子 (石英、長石、角閃石 ・金雲母など) 含む ②にい 黄褐色 ③普通	丸く削った輪郭からやわらかに中央から斜めに外反する複合口 縁へと至り、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出る。口縁部 には多くの平行稜溝を施すと同時に擦剥を行なう	丸く削った輪郭からやわらかに中央から斜めに外反する複合口 縁へと至り、腰部は丸くおさめ、突出部は斜めに下に出る。口縁部 には多くの平行稜溝を施すと同時に擦剥を行なう	外面に小黒斑 あり

押出番号	出土地点	器種	法 直 (cm)	①土台 ②色調 ③地成	形 築・手 法 の 特 徴	考
143-6	I 区 B5 G r 3層	甕	口径 19.5 (口縁部 1/7倍)	①lm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口縁部には2条の縫隙文を施したのち縫隙を行う。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
143-7	I 区 B5 G r 3層	甕	口径 18.0 (口縁部 1/7倍)	①lm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外縁にぶい黄褐色、内面反黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。縫部には現状で2条の縫隙文を施したのち縫隙を行う。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
143-8	I 区 A6 G r 12層	甕	口径 9.2 最大径 13.2 底径 14.4 高さ 2.6 (1/2倍)	①lm以下の砂粒子(石英など)含む ②黒灰色 ③良好	小型のもので、複合口縁であるが、口縁部に関しては不規則な作りである。縫部は丸く張り、底部はわずかに縮筋を確認することができるほどとんでもない底状である。外縁及び内縁部以上は丁寧なナデにより精緻に仕上げている。以下ケズリ調整	
143-9	I 区 B6 G r 12層	甕	口径 14.9 (口縁部 1/4倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	やや厚みのある縫部から立ぎみの複合口縁へと続く。縫部は外縁付帯として現れ、突出部は下に突出。口縁部には外縁の施された底筋がわずかに観察される。肩部には現状で4条の平行式縫隙を施す。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
143-10	I 区 A6 G r 16層	甕	口径 14.9 (口縁部 完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	やや張った縫部から立ぎみの複合口縁へと続く。縫部は外縁付帯として現れ、突出部は下に突出。口縁部には外縁の施された底筋がわずかに観察される。肩部には現状で4条の平行式縫隙を施す。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
143-11	I 区 B6 G r 13層	甕	口径 15.8 (口縁部 1/2倍)	①微砂粒子(石英・長石・樹褐色粒子・角閃石など)含む ②明黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
143-12	I 区 B6 G r 13層	甕	口径 17.8 (頂部 1/3倍)	①1~2mmの大の砂粒子(石英・長石・樹褐色粒子・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。縫部には現状で2条の平行式縫隙文を施す。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-1	I 区 A5 G r 13層	甕	口径 16.5 (口縁部 1/6倍)	①lm大の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。縫部には現状で2条の平行式縫隙文を施す。口縁部には現状で縫隙文を施したのち完全に擴張を行っているので規則性がある。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-2	I 区 A7 G r 16層	甕	口径 14.0 (口縁部 1/7倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	縫の張る複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は横に出る。外縁部も肩部以上ナデ調整。以下外削ヘタ目調整、内面ケズリ調整	
144-3	I 区 B6 G r 13層	甕	口径 17.7 (口縁部 1/9倍)	①微砂粒子(石英・長石・樹褐色粒子・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。外縁部も肩部以上ナデ調整。以下外削ヘタ目調整、内面ケズリ調整	外縫付帯
144-4	I 区 B7 G r 16層	甕	口径 14.2 (口縁部 1/2倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。肩部には現状で2条の平行式縫隙文を施す。「」の字の逆縫隙文が施される。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-5	I 区 B7 G r 16層	甕	口径 17.6 (口縁部 1/6倍)	①lm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は横に出る。縫部には現状で2条の平行式縫隙文を施す。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-6	I 区 A7 G r 16層	甕	口径 16.9 (口縁部 1/6倍)	①微砂粒子(石英・角閃石・長石・樹褐色粒子など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	外削する複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-7	I 区 B6 G r 13層	甕	口径 18.8 (口縁部 1/6倍)	①lm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	外縫付帯
144-8	I 区 B6 G r 13層	甕	口径 15.8 (口縁部 1/4倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・樹褐色粒子など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	縫の張りのない複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。内面部縫隙は狭いハサウエーによる凸凹があり、外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-9	I 区 A7 G r 16層	甕	口径 20.6 (口縁部 1/7倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は平らさみにねじまり、突出部は膨らみ横に突出。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-10	I 区 A2 G r 4層	甕	口径 15.0 (口縁部 1/5倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。内面部縫隙は狭いハサウエーによる凸凹があり、外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
144-11	I 区 A7 G r 16層	甕	口径 17.1 (口縁部 1/8倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は強く横に引き出す。肩部には現状で2条の平行式縫隙文を施す。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	外縫部に黒斑あり
144-12	I 区 B8 G r 16層	甕	口径 14.8 (口縁部 1/7倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。外縁及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	口縁部に黒斑あり
144-13	I 区 A7 G r 16層	甕	口径 19.7 (口縁部 1/6倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外縫部黒色→黄褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。外縫部とも現状で2条の平行式縫隙文を施す。以下外削ヘタ目(のち)のナデ調整、内面ケズリ調整	
144-14	I 区 B7 G r 16層	甕	口径 17.9 (口縁部 1/4倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。外縫部及び内縁部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	
145-1	I 区 B6 G r 15層	甕	口径 17.8 (口縁部 1/5倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、縫部は丸くおさめ、突出部は膨らみ斜め下に出る。外縫部及び内縫部以上ナデ調整。以下ケズリ調整	

碑固番号	出土地点	西 横	出 现 (m)	①物土 ②色調 ③焼成	形 状・手 仕 の 特 徴	備 考
145-2	I 区 A6 G r 12層	變	口徑 19.0 (口縫部 1/2存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石・橄欖石など) 含む ②に bei 黄褐色調 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	外面口縫に 黒斑あり
145-3	I 区 B5 G r 16層	變	口徑 17.9 (口縫部 1/7存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色調 ③普通	複合口縫で、端部はまっすぐに引きのばし、突出部は横に出る、口縫には平行沈文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
145-4	I 区 B7 G r 16層	變	口徑 18.5 最大径 21.2 (口縫部 1/2存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は引きのばして止め、突出部は斜め下に出る、肩部には平行沈文と、側位の斜文、斜文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
145-5	I 区 B6 G r 13層	變	口徑 16.7 (口縫部 1/9存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石・金雲母など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は引のばし、突出部は斜め下に出る、肩部には平行沈文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
145-6	I 区 B8 G r 16層	變	口徑 19.9 (口縫部 1/1存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石・金雲母など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る、肩部には平行沈文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
145-7	I 区 B6 G r 13層	變	口徑 21.7 (口縫部 1/9存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は横に引き出す、肩部には平行沈文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
145-8	I 区 A2 G r 4層	變	口徑 15.0 (口縫部 1/5存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る、肩部には平行沈文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
145-9	I 区 B7 G r 16層	變	口徑 15.0 (口縫部 1/2存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る、肩部には平行沈文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
145-10	I 区 A7 G r 16層	變	口徑 15.4 (口縫部 1/6存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は平坦面をもち、突出部は横に強く出す 外表面ともナダ調整	
145-11	I 区 B7 G r 16層	變	口徑 15.6 (口縫部 1/5存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部引きのばし、突出部はわずかに横に出す 外表面に風化がしいが、外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整と思われる	
145-12	I 区 B8 G r 16層	變	口徑 17.0 (口縫部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は外に曲げて平面面をつくり、突出部は斜め下に出る、肩部には平行沈文を施す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	外表面付着
145-13	I 区 A7 G r 16層	變	口徑 17.2 (口縫部 1/5存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る 外表面に風化がしいが、外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整と思われる	外表面付着
146-1	I 区 A7 G r 16層	變	口徑 14.6 (口縫部 1/4存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②外表面風化により bei 黄褐色調、内面に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出す 外表面に風化がしいが、外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	外表面斑あ
146-2	I 区 B5 G r 13層	變	口徑 20.4 (縫部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②淡黄褐色 ③普通	なららかな断面からムームーとした複合口縫に移行し、端部はわざわざに平坦化み、突出部は横に引き出す、肩部には平行沈文の跡があ	
146-3	I 区 A7 G r 16層	變	口徑 15.5 (口縫部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は強く横へ引き出す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
146-4	I 区 A7 G r 16層	變	口徑 17.6 (口縫部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 及び若干の1~2mmの大粒の砂粒子含む ②オリーブ褐色 ③普通	複合口縫で、端部は外に曲げて平面面をつくり、突出部は斜め下に引き出す 外表面とも内面頸部以上ナダ調整、以下外表面ハゲ目のナダ調整、内面ケズリ調整	
146-5	I 区 A8 G r 16層	變	口徑 14.4 (口縫部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は外に曲げて平面面をつくり、突出部は横に引け出す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
146-6	I 区 B8 G r 16層	變	口徑 18.0 (口縫部 1/4存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は外に曲げて平面面をつくり、突出部は横に引け出す、肩部に平行沈文の痕跡あり 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
146-7	I 区 A7 G r 不明	變	口徑 20.6 (口縫部 1/6存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 及び1~2mmの大粒の砂粒子不含む ②に bei 黄褐色 ③普通	なららかな断面から平行の複合口縫に移行して複合口縫に至る、 外表面に外に曲げて平面面をつくり、突出部は横に強く引き出す 外表面及び内面頸部以上ナダ調整、以下ケズリ調整	
146-8	I 区 A1 G r 4層	變	口徑 25.0 (口縫部 1/7存)	②暗黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は幅広い平面面をもち、突出部は横に引き出す 外表面とも内面頸部以上ナダ調整	
146-9	I 区 B7 G r 16層	變	口徑 21.0 (口縫部 1/6存)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石・金雲母など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は幅広い平面面をもち、突出部は横に引き出す 外表面とも内面頸部以上ナダ調整	
146-10	I 区 A7 G r 不明	變	口徑 35.0 (口縫部 1/12存)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石・金雲母など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は幅広い平面面をもち、突出部は横に引き出す 外表面とも内面頸部以上ナダ調整	
146-11	I 区 B5 G r 12層	變	口徑 35.8 (口縫部 1/9存)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石・金雲母など) 含む ②に bei 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る 外表面とも内面頸部以上ナダ調整	

辨別番号	出土地点	部 位	寸 法(cm)	①地土 ②色調 ③構成	形 態・手 法 の 特 徴	備 考
147-1	I 区 A7 G r 16層	胸 部	(胴部破片)	①2mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②灰黄褐色 ③普通	胴部上位から平行比叢文、羽状文、平行比叢文、羽状文、平行比叢文とくびれしている 内面にズレ調節、外面風化を著しく調節不規	
147-2	I 区 B3 G r 8層	胸 部	(胴部破片)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面にぶい黄褐色、内面灰黄褐色 ③普通	窓のハケ目調節のうちに側面にヨコナゲを入れ、その上に円形浮文を取り付け、ヘラ彫を施す 外面に黒斑あり	外面上に黒斑あり
147-3	I 区 B3 G r 不明	胸 部	(胴部破片)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②灰褐色～にぶい黄褐色 ③普通	上位は35条の圓頭文を施し、凸唇部に「ノ」の字状の刺突文を幅狭く連続する。下位はヘラ彫により幅狭く長いめの刺突文を2段目に返す 外面ハケ目調節、内面ケズリ調節	外面上に黒斑
147-4	I 区 B4 G r 16層	胸 部	輪郭径 13.9 (底部 1/9件)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面にぶい黄褐色、内面暗灰黄褐色 ③やや不良	輪郭に穿孔あり、器形は想定不可能 内外面ともナダ調節	内面焼成受けたように出でる事
147-5	I 区 A1 G r 9層	胴部～ 基部	最大径 24.5 底径 6.9 (底部 完)	①1～3mmの大砂粒子(石英・長石など)含む ②外面灰黄褐色、内面暗灰黄褐色 ③普通	しつらひした平底で、胴中央より上位には最大径のある脚牌型に立ち上がる。輪郭に3段の刃立文を施す。 外面上にハケ目調節、下位ミガキ調節、内面ナダ調節、底面風化等著しく調節不規	外面部ハケ目風化あり
147-6	I 区 A7 G r 16層	胸 部	輪郭径 22.4 (底部 1/7件)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・粗粒粒子・角閃石・金雲母など)含む ②灰黄褐色 ③普通	複合の縁を有する胴部である。上位より平行沈縁文、逆「ノ」の字状の刺突文を施す 外面上に内面輪郭線によるナダ調節、以下ケズリ調節	
148-1	I 区 B4 G r 8層	底 部	直徑 10.4 (底部 1/3件)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	しっかりした平底 外面部ミガキ調節、他内外面ともナダ調節	
148-2	I 区 B1 G r 4層	底 部	直径 9.7 (底部 1/3件)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)少し含む ②外面暗灰褐色、内面暗灰褐色 ③普通	しっかりした平底 外面上にミガキ調節、底面及び内面ナダ調節	底面に斑？付着
148-3	I 区 A8 G r 16層	底 部	直径 9.0 (底部 1/5件)	①微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	くびれをもつ平底である 底面中央にはハケ目状の跡あり、内外面ともナダ調節	内面に黒斑あり
148-4	I 区 B3 G r 8層	底 部	直徑 7.6 (底部 2/3件)	①1mmの大砂粒子(石英・長石など)含む ②外面黑灰色～にぶい黄褐色、内面墨黒色 ③普通	どっしりとした平底 外面部ナダ調節、内面底縁に指ナダによる凹みがあり、輪郭ハケ目調節	内外面黒斑
148-5	I 区 H4 G r 16層	底 部	直徑 7.7 (底部 完)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②外面にぶい黄褐色、内面暗灰褐色 ③やや不良	どっしりとした平底 外面上にミガキ調節、内面ナダ調節、外面風化を著しく調節不規	外面部付着、内面黒斑？
148-6	I 区 B5 G r 16層	底 部	直徑 7.4 (底部 ほぼ完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)多く含む ②暗黄茶褐色 ③普通	しっかりした平底 内外面ともナダ調節、内面には指痕压痕観察できる	底面に黒斑あり
148-7	I 区 B3 G r 8層	底 部	直徑 6.9 (底部 2/3件)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面暗灰褐色、内面暗灰黄褐色 ③普通	上げ底で、脚部はくびれて脚状に立ち上がる 外面部ミガキ調節、底面及び底面まわりナダ調節、また内面には指痕压痕観察	内面におこげ？付着
148-8	I 区 A4 G r 16層	底 部	直徑 6.4 (底部 2/3件)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黒灰色～にぶい黄褐色 ③普通	しっかりした平底、底面を凹盤状に作ったのち縁から粘土絆を積み上げている 外面上にミガキ調節、底面及び内面ナダ調節、指痕压痕あり	内面におこげ？付着
148-9	I 区 A3 G r 8層	底 部	直徑 6.3 (底部 4/5件)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②暗黄茶褐色 ③普通	平底 外面部ミガキ調節、底面及び底面まわり、内面ナダ調節、指痕压痕あり	
148-10	I 区 B3 G r 16層	底 部	直徑 5.4 (底部 ほぼ完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面暗灰褐色、内面墨黒色 ③普通	上げ底で、脚部はくびれて脚状に立ち上がる 内外面ともナダ調節、内面底部指痕さえ底あり	内面黒斑
148-11	I 区 B2 G r 15層	底 部	直徑 4.6 (底部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面暗灰褐色、内面暗灰褐色 ③普通	底面、内面指痕さによる凹み部をつくる 外面部ミガキ調節、底面及び底面まわりナダ調節、内面ハケ目調節	外面上に黒斑あり
148-12	I 区 A4 G r 8層	胴部 ～底部	底径 7.7 (底部 2/3件)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の2～5mmの大砂粒子含む ②にぶい黄褐色 ③普通	底面で、最大径が脚部中央以上にあるように立ち上がっていく 外面上にミガキ調節、底面及び底面まわりナダ調節、内面ハケ目調節	底面～脚部黒斑あり
148-13	I 区 A4 G r 8層	底 部	直徑 6.6 (底部 1/2件)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②少數にぶい黄褐色、内面暗灰褐色 ③普通	上げ底で、脚部はくびれて脚状に立ち上がる 外面部ミガキ調節、底面及び底面まわりナダ調節、内面底部指痕さえ、脚部ケズリ調節	
148-14	I 区 A2 G r 4層	底 部	直徑 6.2 (底部 完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色、内面暗灰褐色 ③普通	上げ底で、脚部はくびれて脚状に立ち上がる、くびれ部から上に脚部が塊状で剥離されている、底面は内外面よりナダにより平行に仕上げてある 外面部ナダ調節、内面ケズリ調節	
148-15	I 区 A5 G r 16層	底 部	直徑 5.8 (底部 完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	手平の底 外面上にミガキ調節、底面ナダ調節、内面底部指痕さえ、ナダ調節、脚部ケズリ調節	
148-16	I 区 B7 G r 16層	底 部	直徑 5.6 (底部 完)	①～3mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②黒灰色～にぶい黄褐色 ③普通	台状の底面は、粘土塊なので重し感あり 外面部ハケ目調節、底面ナダ調節、内面ケズリ調節、指痕压痕あり	外面部？付着
148-17	I 区 A2 G r 4層	底 部	直徑 5.2 (底部 完)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	やや薄手の底 外面上にナダ調節、内面ケズリ調節	

所用番号	所在地	部	種	寸	材	形	手	法	の	特	徴	備
149-2	I 区 A3 G r 8層	底	部	底径 5.0 (底部 1/3存)	①細砂粒子(石英・長石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	厚手のどっしりした平底で、脚の開きが少なく幅立ち上がる外表面ナゲ調整、内面指押さえにより底面をくくり、ケズリ調整	内外面に黒斑あり				
149-3	I 区 B5 G r 16層	底	部	底径 4.8 (底部 1/2存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	薄手の平底 底面ナゲ調整、内面ケズリ調整、外表面風化して調整不明					
149-4	I 区 A4 G r 8層	底	部	底径 4.5 (底部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面黄褐色、内面にない	黄褐色	底面に厚みのある平底で、安定感あり 外表面部ミガキ調整、底面まわりナゲ調整、正面指押さえのため凹合あり、ナゲ調整、内面底面に指押圧痕あり、削痕ケズリ調整			外表面黒斑あり		
149-5	I 区 B5 G r 12層	底	部	底径 5.0 (底部 1/2存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面黄褐色、内面暗緑茶褐色	③普通	やや広げ直立ぎみの平底 外表面ミガキ調整、内面ケズリ調整、底面風化して調整不明					
149-6	I 区 A4 G r 16層	底	部	底径 3.8 (底部 完)	①細砂粒子(石英・長石など)少し含む ②底面にいくつも黄褐色	③普通	厚手である小さい平底 外表面ミガキ調整、底面及び内面ナゲ調整			外表面黒斑あり		
149-7	I 区 B8 G r 16層	底	部	底径 2.8 (底部 完)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面灰褐色、内面暗緑茶褐色	③普通	小さな半底で、指押さえによりや上げ底となる 外表面ナゲ調整、内面ケズリ調整					
149-8	I 区 B6 G r 12層	底	部	底径 3.2 (底部 5/6存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び 若手の2~3mmの大砂粒子含む ②にいくつも黄褐色	③普通	壁面のあまり小さな平底 外表面ミガキ調整、内面ケズリ調整			外表面付帯		
149-9	I 区 B7 G r 16層	底	部	底径 3.0 (底部 完)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいくつも黄褐色	③普通	壁面のあまり小さな平底 外表面ナゲ調整、内面ケズリ調整					
149-10	I 区 B7 G r 16層	底	部	底径 3.0 (底部 完)	①1mmの大砂粒子(石英・長石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	壁面のまだ明確な小さな底面で、焼成後に掌丸してあり。中央よりやや斜めに下っている。底面は指押テグにより出凸あり 外表面ナゲ調整、内面ケズリ調整					
149-11	I 区 A4 G r 8層	底	部	底径 2.2 (底部 完)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にいくつも黄褐色	③普通	壁面のあまり小さな平底 底面まわりに指押圧痕ができる 内面底面とも指押さによる凹凸あり 外表面ナゲ調整、内面ケズリ調整			内面の黒灰色は 底面と思われる		
149-12	I 区 B6 G r 13層	底	部	底径 1.8 (底部 完)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいくつも黄褐色	③普通	壁面のあまり小さな平底 外表面ナゲ調整、内面ケズリ調整					
149-13	I 区 B2 G r 4層	高	坏	口径 27.7 (口縫部 1/10存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいくつも黄褐色	③普通	口縫部が外水平に拡張して平坦な面をもち、口縫部もわずかに内側に肥厚して面をもつ凹面を呈す 内面とともにガタのよう丁寧なナゲ調整					
149-14	I 区 A7 G r 16層	高	坏	口径 22.3 (口縫部 1/10存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	口縫部が外水平に拡張して平坦な面をもち、口縫部は丸くおさめる 内面とともにガタ調整					
149-15	I 区 A3 G r 1層	高	坏	(口縫部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	口縫部が水平に内外に肥厚して面をもち、3条の回線文を施す。窓部から押する体部には現状で5条の回線文を施し、凸部2列に刻目を施す 風化して内外面とも調整不規					
149-16	I 区 A8 G r 16層	高	坏	(口縫部破片)	①細砂粒子(石英・角閃石・長石など)含む ②決済茶褐色	③普通	体部から脚部にかけてゆるく「く」の字状に屈曲し、脚部は肥厚して面をもち、口縫部に刻目を施す。口縫部には3条の回線文が施され、凸部2列に刻目を施す 外表面部ミガキ調整、内面丁寧なナゲ調整、地風化して調整不規					
149-17	I 区 B6 G r 13層	高	坏	口径 17.3 (底部 1/10存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	やや曲曲して立ち上る脚部から直立ぎみの口縫部へと移行し、脚部は底面の主面をもち、2条の回線文を施す。口縫部には4条の回線文が施す 外表面とともに丁寧なナゲ調整					
149-18	I 区 A4 G r 8層	高	坏	口径 19.0 (底部 1/7存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	直角した体部から口縫部が内傾して立ち上がり、脚部はやや外側に肥厚して面をもち、口縫部には4条の回線文を施す 外表面とともに丁寧なナゲ調整			外表面に黒斑あり		
149-19	I 区 B5 G r 16層	高	坏	接合部径 6.9 (接合部 完)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	やや厚手の量感感のあるもので、脚部には多くの回線文を施す。脚部にはヘラ掃きによる斜格子文、円筒充填法と思われるが、剥落がひらくように指押圧痕あり 外表面ケズリのちにガタまたは丁寧なナゲ調整、内面丁寧なナゲ調整、部分的にヘラ目調査					
149-20	I 区 A4 G r 8層	高	坏	底径 15.2 (脚部 1/6存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	脚部が外反して肥厚し面をもち、3条の回線文を施す。脚部にはヘラ掃きによる斜格子文、3条の回線文を施す 内外面とも風化して調整不明					
149-21	I 区 A4 G r 8層	高	坏	底径 12.6 (脚部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	脚部が外反して肥厚し面をもち、3条の回線文を施す 脚部ナゲ調整、内面ケズリ調整					
149-22	I 区 B5 G r 13層	高	坏	接合部径 7.1 (接合部 1/2存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	脚部が外反して肥厚し面をもち、3条の回線文を施す 脚部ナゲ調整、内面ケズリ調整					
149-23	I 区 B5 G r 13層	高	坏	底径 7.9 (脚部 5/6存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗緑茶褐色	③普通	脚部上位に4条の回線文を施す。脚部は直立した複合口縫状面をもち、回みを施す。脚部は器壁の立ち上がり具合から漆みのあるタイプと思われる 外表面部ミガキ調整、他内外面とも風化して調整不明			外表面側面に 黒斑あり		

検査番号	出土地点	器種	法量(cm)	①歯土 ②色調 ③構成	形態・手法の特徴	備考
150-1	I区 B5 G r 16層	高 坪	突出部径 34.2 (突出部 1/6倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にいが黄褐色 ③普通	大型品で、直錐部に立ち上がりってきた脚部から、削り出しによる突起部をつくり、ここから直錐部を立ち上げていく。直錐部に小さな斜文を施す。	
150-2	I区 B7 G r 16層	高 坪	口筋 18.2 (外部 1/6倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②微黄褐色～にいが黃褐色 ③普通	今や直錐部にして立ち上がりの体部に、直錐部の突出部を有し、複合口錐部に立ち上がりっていく。口錐部には平底面をもつ。外面部は脚部及び外筋突出部をもわりナゲ調整、以下ハケ日調整、内面ミガキ調整	
150-3	I区 A3 G r 16層	高 坪	口筋 19.5 (外部 1/5倍)	①1mm以上の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面黄褐色、内面暗灰色～黄褐色 ③普通	薄手のもので、体部は丸く直錐して立ち上がり、段をもじら縁部を再現させる。内面にははなくムームーに移行する。接合方法不明	
150-4	I区 B5 G r 16層	高 坪	口筋 21.9 (外部 1/3倍)	①1mm以上の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②黄褐色 ③普通	直錐部の脚部で、脚部を外に曲げて丸くおさめる 内外面とも丁寧なナゲ調整	
150-5	I区 B5 G r 16層	高 坪	口筋 25.0 (外部 1/2倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②黄褐色 ③普通	直錐した立ち上がりを見せるが、口錐部は外反して広がっていく 内外面ともナゲ調整、特に内面は丁寧	
150-6	I区 B8 G r 16層	高 坪	口筋 25.5 (外部 1/4倍)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②暗茶褐色～にいが黃褐色 ③普通	直錐した立ち上がり、口錐部は外反する。接合方法は円盤光坂法である 内外面とも風化者しく調査不明	内面に傷が付着しているため、蓋として使用されたものと思われる
150-7	I区 A7 G r 不明	高 坪	接合部径 4.2 (接合部 ほぼ完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②灰黄褐色 ③普通	接合方法は、ドーナツ状の断部に下から脚部を差し込み、上から円盤を充填している 内外面ともミガキ調整	
150-8	I区 A7 G r 16層	高 坪	接合部径 4.1 (接合部及び 脚柱部 ほぼ完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②黄褐色 ③普通	脚柱部の断部にのみ、基部は開こうとしているところ。接合方法は円盤光坂法 脚部内面ケズリ調整、内面と外面とも風化者しく調査不明	
150-9	I区 B6 G r 13層	高 坪	接合部径 5.2 (接合部及び 脚柱部 ほぼ完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	やや幅の広い接合部から筒状にひらく。断間に印1センチの円形の凹溝が刻まれている。円形底面を中央にひく十字状の印あり 内面内外面及び脚部外ミガキ調整、内面ケズリ調整	脚部に朱塗り痕あり
150-10	I区 A3 G r 8層	高 坪	口筋 12.0 (外部 1/5倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にいが黄褐色 ③普通	小型で深い脚部である 外面部、ハケ日調整、内面丁寧なナゲ調整	
150-11	I区 A7 G r 不明	高 坪	接合部径 2.8 (接合部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいが黄褐色 ③普通	小型品 内外面とも風化者しく調査不明	
150-12	I区 B6 G r 12層	低 脚 坪	底径 5.1 (脚部 1/2倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にいが黄褐色 ③普通	小さな脚部 外面部ナゲ調整、断部内面指合さえ、ナゲ調整、脚部内面風化者しく調査不明	
150-13	I区 A5 G r 16層	低 脚 坪	底径 5.5 (脚部 1/3倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②暗灰黄褐色 ③普通	細いハサワをもつ脚部で、底面は平坦面をもつ。脚部中央に2ヶ所前にて小丸孔が穿ってある 外面部及び脚部内面ナゲ調整、断部内面ミガキ調整	蓋としても利用した可能性あり
150-14	I区 H7 G r 16層	低 脚 坪	底径 5.4 (脚部 完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にいが黄褐色 ③普通	小さく作られた脚部を有する 外面部ナゲ調整、脚部内面ケズリ調整、断部内面風化者しく調査不明	
150-15	I区 A7 G r 16層	低 脚 坪	底径 6.5 (脚部 完)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②灰黄褐色 ③普通	粗面につくられた脚部である 外面部ナゲ調整、脚部内面ケズリ調整、断部内面風化者しく調査不明	内外面に墨色の付着物あり、筆?
150-16	I区 A5 C r 13層	低 脚 坪	底径 6.6 (脚部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰黄褐色 ③普通	粗面につくられたものである 脚部外断面をナラの木のへだ目調査、内面ミガキ調整、脚部外ミガキ調整、内面ケズリ調整	
150-17	I区 B2 G r 4層	低 脚 坪	脚柱部径 4.7 (脚柱部 完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②灰黄褐色 ③普通	150-14に比べて粗面に欠けるようである。脚部内面にナゲ調整を行なうのができている 外面部ナゲ調整、断部内面風化者しく調査不明	
151-1	I区 A4 G r 8層	脚 部	底径 6.5 (脚部 完)	①微砂粒子(石英・長石など)含む ②灰黄褐色 ③普通	器の脚台部と思われる。脚部には5条の回文が施される 外面部ナゲ調整、脚部内面ケズリ調整、他風化者しく調査不明	
151-2	I区 A3 G r 8層	脚 部	接合部径 5.4 (接合部 完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)多く含む ②にいが黄褐色 ③普通	接合部から幅広い脚部がのび、すぐに削れがちとなる。内面に工具キズあり 外面部ナゲ調整、内面断部ケズリ調整、脚部ナゲ調整	
151-3	I区 B5 G r 13層	脚 部	底径 11.0 (脚部 1/4倍)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰黄褐色 ③普通	深い脚部があるが、約1.2cmの円形の透かし模様で2孔。本来は3孔らしい 外面部ミガキのちナゲ調整、内面上半ナゲ調整、下半ケズリ調整	
151-4	I区 A5 G r 13層	脚部断面	底径 13.6 (脚部 1/3倍)	①1～2mmの砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にいが黄褐色～褐色 ③普通	厚手のもので、接合部の脚部を有し、面上には6条の回文が施される 外面部ナゲ調整、内面脚部ケズリ調整、脚部風化者しく調査不明	外面上半ナゲ調整、内面脚部ケズリ調整、脚部ケズリ調整
151-5	I区 B7 G r 16層	脚部断面	(脚部破片)	①1mmの大砂粒子(石英・長石など)少し含み、やや崩壊 ②にいが黄褐色 ③普通	脚部外断面に只数種類による多条の脚部脚部が施される 外面部及び内面部ナゲ調整、脚部ケズリ調整	

辨別番号	出土地点	器種	法 量(cm)	①出土 ②色調 ③焼成	形 態・手 法の特 徴	備 考
151-6	I区 B6 Gz 12層	鼓形器台	突出部径 (突出部 1/5分)	①1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	鋸部外側に圓錐文を施したのちに無削しを行っている 内面ケズリ調整	
151-7	I区 B6 Gz 12層	鼓形器台	(脚部断片)	①微砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)含む ②暗灰褐色 ③普通	突出部下に約4mmの鉛点文が複数で4点施されている。片側に は施していない。グループ単位の施文方法と思われる 外面ナダ調整、内面ケズリ調整	
151-8	I区 A6 Gz 16層	鼓形器台	底径 (脚部 1/6分)	①1mm以上の砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	鋸部外側に小さな具象模様による多条の脚部施文を施し、のち 中央に抜ぬしている 内面基部ナダ調整、鋸部ケズリ調整	
151-9	I区 B8 Gz 16層	鼓形器台	底径 (脚部 1/4分)	①1mm以上の砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)含む ②淡黄褐色 ③普通	大型のもので、鋸部が幅広である。 脚部の内面ケズリ調整、他風化帯し難削不規	
151-10	I区 B7 Gz 16層	鼓形器台	突出部径 (突出部 1/6分)	①微砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)及び若干の1~2mmの砂粒子含む ②オリーブ褐色 ③普通	少々厚手である 突出部下等にナダナダ調整、内面受部下等ナダナダ調整、鋸部・脚部ケズリ調整	
151-11	I区 A2 Gz 4層	鼓形器台	底径 (脚部 1/6分)	①微砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)含む ②黄褐色 ③普通	シャープなつくりである 外表面及び内面基部ナダ調整、鋸部ケズリ調整	
151-12	I区 A7 Gz 16層	鉢	口径 (口縁部 1/12分)	①微砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②オリーブ褐色 ③普通	口縁部内外に水平に肥厚して面をもち、4条の凸線文を、 口縁部には現状で4条の凹線文を施す 内面ともナダ調整	
151-13	I区 B5 Gz 13層 16層	鉢	口径 高さ 底径 (口縁部 1/2分)	①1mm以上の砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	こね跡形をしている、やや分厚く粗鈍なつくりである 外表面ハケ目の中ナダ調整、内面ナダ調整	外表面に黒斑あり。 運行者、生産に関わる 器?
151-14	I区 B6 Gz 13層	鉢	口径 高さ 底径 (1/4分)	①1mm以上の砂粒子(石英、長石、角閃石、金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	分厚くつくりで、コップ状を呈する。底盤は丸底である。断面 に粘土被覆が確認できる 外表面ハケ目の中ナダ調整、内面ケズリ調整	外表面研磨、 生産に関わる 器?
151-15	I区 B3 Gz 31層	小型 鉢	口径 最大径 (口縁部 1/6分)	①1mm以下の砂粒子(石英、長石など)含む ②暗褐色 ③普通	複合口縁で、端部を膨らませて丸くおさめ、突出部は横に出来る。 鋸部最大径にヘラ切による研究文を施す。 外表面及び内面基部以上ナダ調整、以下ケズリ調整、横位に指ナ ギをしている	
151-16	I区 A7 Gz 16層	小型 無 簋	口径 最大径 高さ 底径 (1/2分)	①1mm以上の砂粒子(石英、長石など)含む ②灰褐色 ③普通	口縁部が外反し、肩部を盛る 外表面のミガキが顕著される。底面及び内面風化帯し 難削不規	外表面付着、 生産に関わる 器?
151-17	I区 B4 Gz 4層	小型 鉢	口径 (口縁部 1/8分)	①微砂粒子(石英、長石、角閃石、緑色 など)含み、鐵器 ②明褐色 ③普通	こね鉢状に外傾した鋸部から絞りして内傾する口縁部へと移行 する 内面とも風化帯し難削不規	外表面よりの 痕跡がわずかに 残骸される
152-1	I区 A4 Gz 8層	皿	つまり径 (つまり部分 ほぼ完)	①1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石 など)含む ②暗黄褐色 ③普通	丸くべったいつまみのついたもので、体部は欠損していない み詰れは不明 つまみと体部のくびれ部分にはナタハケ目のような網織感さ れ、のちナダ調整、体部内面に指印压痕あり。他風化帯し難 削不規	
152-2	I区 A8 Gz 16層	皿	底径 (先端)	①1mm以下の砂粒子(石英、長石、角閃石 など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	ヘルメット状で、天井に2孔1対の孔が穿たれている 外表面ミガキ調整、内面風化帯し難削不規	
152-3	I区 B2 Gz 4層	注口土器	注口径 先端口径 (注口部)	①微砂粒子(石英、長石、角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	やや厚手で短い注口部分である 外表面ミガキ調整と思われる、内面調整は不明	
152-4	I区 A3 Gz 4層	注口土器	注口径 先端口径 (注口部)	①微砂粒子(石英、長石、角閃石、緑色粒子、長 石など)含む ②灰褐色 ③普通	シールドなつくりの注口部分である。注口周囲の鋸部部分に平行 沈入文の痕跡あり 内面とも風化帯し難削不規	
152-5	I区 A1 Gz 1層	把 手	把手径 (把手部分)	①1~2mmの砂粒子(石英、長石など)多く 含む ②にぶい黄褐色 ③普通	扇筋方向で凹化したが、生存する接合部分をまっすぐに立て直すと、 横筋が曲がるので、鋸部部分とは横方向に接合していた可能性あり 風化帯し難削不規	
152-6	I区 試験復元 不規	脚 部 ?	(小断片)	①微砂粒子(石英、長石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	四隅がと思われる透孔あり、その下には2条の回線文が施して ある。地部は絞りして口をもつ 輪郭面研磨痕あり、内面ナダ調整、外表面風化帯し難削不規	
152-7	I区 A6 Gz 3層	實 意 器 身	口径 跡高 底径 (先端)	①1mm以上の砂粒子(長石、石英など)少し 含む ②青灰色 ③良好	体部丸みをおびて直立する口縁部に移行する。口縁部は細く なる 外表面コナダ調整、底面へラ切りの切りばなしで、ヘラキズ が多方向に入る。内面体部コナダ。底部ナダ調整	
152-8	I区 A1 Gz 1層	須 意 器 身	(つまり部分)	①微砂粒子(長石など)若干含む ②青灰色 ③良好	宝形型のつまり部分 内面ともナダ調整	
152-9	I区 B2 Gz 7層	最大径 (最大径部 1/13分)	口径 15.0	①微砂粒子(長石など)若干含む ②暗灰色 ③良好	かえりの付く皿で、天井が低い低平なもの 外表面ヨコナダ調整、天井部の軸ケズリ調整、内面ナダ調整	
155-1	土器群20 (A3 Gz) 11層	皿	口径 (口縁部 1/3分)	①1mm以上の砂粒子(石英、長石、角閃石、緑色 など)多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	真直した口縁部で、底盤は丸くおさめ。突出部は下に引き出 す。口縁面上には貝殻模様による2角以上の菱形文を施したの う上位焼成を行う。底部下段には焼成文を施す 内面底部よりケズリ調整、他内外面ともナダ調整	

個体番号	出土地点	器種	法 値(cm)	①歯土 ②色調 ③模様	形 態・手 法の特 徴	備 考
155-2	土器群20 (A5 Gr 11層)	史	口径 (口縁部 1/6分)	①微砂粒子(石英・長石・褐色粒子・角閃石など)多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	やや張った唇部から頸部「く」の字状に傾曲して口縁部に至り、口縁は上下に肥厚して面をもたらす。表面には刷毛文を施す。頸部は最大幅近くに削尖文の痕跡あり。外側は化粧仕上げ、内面は削下後ケズリ調整。他内外面ともナデ調整と思われる。	
155-3	土器群20 (A5 Gr 11層)	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、頸部は外に曲げて平面面をつくり、突出部は斜めに張り出す。内面頸部以下ケズリ調整。他内外面ともナデ調整	
155-4	土器群20 (A5 Gr 11層)	台	接合部径 (接合部 1/6分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・褐色粒子など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	半らな体形に台が付いたものの、形態は想定できない。台部を全体的に丸めた點と引き締めて指揮文を施す。内面指揮文・ナデ調整、外側及び台部の口面ケズリ調整	
156-1	土器群20 (A5 Gr 11層)	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①微砂粒子(石英・角閃石・長石・褐色粒子など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	青森した跡があるからに限らずやや内面をして立ち上がり、頸部は削平して面をもたらす。表面には刷毛文を施す。口縫には5条の回絞文を施し、1条の凸部で割り目をする。外側及び内面口縁部ナデ調整、体部ミガキ調査と思われる	
156-2	土器群20 (B5 Gr 11層)	高 杯	脚柱部径 (脚柱部 1/6分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の金雲母の砂粒子含む ②にぶい黄褐色 ③普通	脚柱部くびれで円錐透視現状「2孔あり、実際は3孔と思われる。外から内への穿孔で、内に向て円錐形の孔となる。脚柱部の内側面部は脚柱部の剥離孔などの孔からそのまま自然に露出する箇所を除いてケズリ調査。外側は化粧仕上げ、内面はしづら感ある。他は風化調査して調査不明	
156-3	土器群20 (A5 Gr 11層)	鉢形器台	底径 (脚部 1/6分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	小型で縮約された形のもの。円形透孔が1孔穿たれてい、実際は2孔か不明。外側から内への穿孔で、内に向て円錐形の孔となる。脚柱部の内側面部は脚柱部の剥離孔などの孔からそのまま自然に露出する箇所を除いてケズリ調査。外側は化粧仕上げ、内面はしづら感ある。他は風化調査して調査不明	
156-4	土器群21 (B6 Gr 11層)	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	口縫「く」の字状に傾曲して口縁部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもたらす。表面には刷毛文を施す。内面とともナデ調査	
156-5	土器群21 (B6 Gr 11層)	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、頸部は外反して丸く先尖りにおさめ、突出部は斜めに張り出す。口縫はヨコヨコの強い入った部分が化粧仕上げでいる。内面頸部以下ケズリ調査。他内外面ともナデ調査	外側焼付着
156-6	土器群21 (A5 Gr 11層)	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、頸部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。肩部に成状文を施す。内面ととも頸部以上ナデ調査。以下外面壳壳ハケ目調査、内面ケズリ調査	
156-7	土器群21 (A5 Gr 11層)	甕	口径 (口縁部 1/3分)	①微砂粒子(石英・褐色粒子・角閃石・長石・角閃石など)多く含む ②黄褐色 ③普通	複合口縁で、頸部は外側をくびらせ小さく丸くおさま、突出部は斜め下に出る。肩部に成状文を施す。内面頸部以下ケズリ調査。他内外面ともナデ調査と思われる	
156-8	土器群21 (B6 Gr 11層)	底 郭	直徑 (底部 1/3分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・長石など)含む ②外側は褐色へ焼褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	W形の底部穿孔土器である。底部は直線の不明瞭な小さな平底である。外側は化粧仕上げ、内面はナデ調査	
156-9	土器群21 (B6 Gr 11層)	脚 部	底径 (脚部 1/2分)	①1mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	短く粗大がくの脚部である。内面ヨコナデ調査、外側風化著しく調査不明	
157-1	II区 A4 Gr 焼付着	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・金雲母など)多く含む ②にぶい黄褐色 ③普通	広口型で、口縫端部は肥厚して面をもち、横状で1条の回絞文が施せる。口縫部に1/3の削尖部をもつてす。内面ケズリ調査、外側化粧仕上げして調査不明	
157-2	II区 B17 Gr 2層	甕	口径 (口縁部 1/3分)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	厚手で小型のものである。複合口縫状を呈し、丸みのある脚部である。脚部に不揃いの立柱文あり。外側は焼付上半以上ナデ調査。下ハケ部のちミガキ調整、内面頸部以上ナデ調査、以下ケズリ調査	外側焼付下半 に黒斑あり
157-3	II区 AT 7 Gr 3層	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	などらかな脚部から腹部までゆるく外反して口縫部に至る。口縫は上下に肥厚して面をもち、2条の回絞文を施す。新臼を設す。内面とともナデ調査	
157-4	II区 A7 Gr 5層	甕	口径 (口縁部 1/13分)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	脚部「く」の字状に傾曲して口縫部に至り、口縫は上下に肥厚して面をもち、2条の回絞文を施す。新臼を設す。内面とともナデ調査	
157-5	II区 B8 Gr 5層	甕	口径 (口縁部 1/7分)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外側は黄褐色へにぶい黄褐色 ③普通	脚部「く」の字状に傾曲して口縫部に至り、口縫は上下に肥厚して面をもち、3条の回絞文を施す。外側頸部以下ケズリ調査と思われる。他内外面ともナデ調査	外側頸部付着
157-6	II区 B15 Gr 19層	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外側は黄褐色へにぶい黄褐色 ③普通	ゆるくカーブする頸部から口縫部に至り、口縫は上下に肥厚して面をもち、3条の回絞文を施す。内面ととも化粧仕上げして調査不明	外側焼付着
157-7	II区 B6 Gr 小明	甕	口径 (口縁部 1/9分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色 ③普通	脚部「く」の字状に傾曲して口縫部に至り、口縫は上に肥厚して面をもち3条の回絞文を施す。南斜面には指揮印重文帯を貼り付けた	
157-8	II区 B5 Gr 9層	甕	口径 (口縁部 1/6分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗褐色 ③普通	などらかで最大径が脚部中央あたりにあり、脚部は丸みをおびて外反し、口縫部は上下に肥厚して面をもち3条の回絞文を施す。外側は化粧仕上げ、内面頸部以下ナデ調査。以下外側とともハケ目調査	外側焼付着
157-9	II区 B6 Gr 不明	甕	口径 (口縁部 1/7分)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	などらかで最大径が脚部中央あたりにあり、脚部は丸みをおびて外反し、口縫部は上下に肥厚して面をもち3条の回絞文を施す。外側は化粧仕上げ、内面頸部以下ナデ調査。以下外側とともハケ目調査	外側焼付着

構造番号	出土地点	部 位	出 土 (cm)	①砂土 ②色調 ③状況	形 状・手 法 の 特 徴	備 考
157-10	II 区 B9 Gr 5層	甌	口徑 15.5 (口縫部 1/4存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗褐色～黒褐色 ③普通	縫隙が長くのびているので底の部断面からしない。複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に引き出す。口縫面には4条の回縫文を施す。 外縫及び内縫口縫部ナゲ調整、縫隙細かいナゲ調整、端部以下ケツリ調整	
157-11	II 区 A7 Gr 5層	甌	口徑 14.0 (口縫部 1/7存)	①1mm以下の大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗褐色～黒褐色 ③普通	小さな複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出す。口縫面には4条の回縫文を施す。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	外縫口縫端付帯
157-12	II 区 B15 Gr 19層	甌	口徑 24.4 (口縫部 5/6存)	①1~3mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗褐色～黒褐色 ③普通	複合口縫で、端部膨らませて丸くおさめ、突出部は斜め下に出す。口縫面には4条の回縫文を施す。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	
157-13	II 区 B15 Gr 19層	甌	口徑 20.0 (口縫部 1/11存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は膨らませて平坦ぎみにおさめ、突出部は斜め下に出す。口縫面には4条の回縫文を施す。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	
157-14	II 区 A15 Gr 19層	甌	口徑 25.8 (口縫部 1/13存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出す。口縫面には4条の回縫文を施す。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	
158-1	II 区 A15 Gr 19層	甌	口徑 30.5 (口縫部 1/3存)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・褐色粒子・角閃石など)含む ②外表面黄褐色、内面底黄褐色～黒褐色 ③普通	複合の複合口縫で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口縫面には4条の回縫文が施す。 端部により浅く薄くなつたと思われる。端部に底面の病文が施される。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	内面おこげ付着、158-9と同一個体の可能性あり
158-2	II 区 B5 Gr 5層	甌	口徑 19.0 (口縫部 1/10存)	①1mmの大砂粒子(石英・褐色粒子・長石・角閃石など)含む ②底黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部は斜め下に出る。口縫面には4条の回縫文が施す。 端部により浅く薄くなつたと思われる。底部に底面の平行な病文が施される。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	
158-3	II 区 B5 Gr 9層	甌	口徑 16.8 (口縫部 1/6存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	縫隙が強く扭曲した複合口縫で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る。口縫面には4条の回縫文が施される。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	
158-4	II 区 B5 Gr 9層	甌	口徑 17.0 (口縫部 1/9存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	複合口縫で、端部は外に凸げ平坦ぎみな面を呈し、突出部は斜め下に出る。 内縫断面以下ケツリ調整、他内外面ともナゲ調整	
158-5	II 区 B5 Gr 9層	甌	(鋼鉄破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	ナゲ調整後、擦り落とした現状で4条の回縫文、回縫文以上はタブレット調整で、見いため文脈のようである。 内縫断面以下ケツリ調整で工具を止めた跡あり	
158-6	II 区 A2 Gr 2層	甌	(鋼鉄破片)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②底黄褐色 ③普通	底部全体に金雲母層による羽状文を解かく3段に施している。 最上位は他のミガキ調整によると分筋的に施されている。 内縫断面ナゲ調整、以下ケツリ調整	
158-7	II 区 A15 Gr 19層	底 部	底径 6.1 (底部 1/3存)	①2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面灰褐色～底黄褐色、内面にい 黄褐色 ③普通	平底 内面とも底化著しく調査不明	外面に底底あり
158-8	II 区 A6 Gr 5層	底 部	底径 10.6 (底部 1/5存)	①1~3mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外表面暗褐色、内面にい 黄褐色 ③普通	分厚くどっしりとした平底 外蓋へケドロ調整、内面ケツリ調整	
158-9	II 区 B15 Gr 19層	底 部	底径 7.0 (底部 完)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②底黄褐色～にい 黄褐色 ③普通	底部の開き具合からは薄くて平べったい平底 外蓋基本的なナゲ調整だが所々にハケ目が観察される。底面ナゲ調整、内面ケツリ調整	外面基底あり、158-1と同一個体の可能性あり
158-10	II 区 A7 Gr 5層	底 部	底径 7.4 (底部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②外表面暗褐色、内面にい 黄褐色 ③普通	平底 外蓋ミガキ調整、底蓋ナゲ調整、内面底部相痕底、ケツリ調整	
158-11	II 区 A7 Gr 5層	底 部	底径 3.8 (底部 完)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の2mmの大砂粒子含む ②にい 黄褐色 ③普通	小さく丸みのある底部で立ち上がりも急激があるので、ミニチャードではないかと思われる。 外蓋ナゲ調整、内面ケツリ調整	
159-1	II 区 A6 Gr 5層	底 部	底径 3.2 (底部 完)	①1~2mmの大砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む ②外表面黒褐色、内面暗褐色 ③普通	底部のあまく小さな平底で、中央に穿孔あり 黒化著しく内外面とも調査不明	
159-2	II 区 A16 Gr 3層	高 壁	口徑 26.0 (底部 1/4存)	①1mmの大砂粒子(石英・長石など)多く含む ②にい 黄褐色 ③普通	壳状で立ち上がる体部から口縫部に至り、口縫は外に木半に張り立てる。 外縫鉗口縫ナゲ調整、他内外面とも黒化著しく調査不明	
159-3	II 区 A7 Gr 5層	高 壁	口徑 15.1 (底部 1/7存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②底黄褐色 ③普通	ボルト状を呈し、口縫部は水平に肥厚して面をもち3条の回縫文を、体部にも3条の回縫文を施す。 内ナゲ調整、外蓋黒化著しく調査不明	
159-4	II 区 B15 Gr 3層	高 壁	口徑 13.2 (底部 1/6存)	①細砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	小のもので、両側する体部から直立気味に口縫部が立ち上がり、端部は厚くして面をもち、口縫部は4条の回縫文を施す。 内ナゲ調整、外蓋黒化著しく調査不明	
159-5	II 区 B5 Gr 9層	高 壁	口徑 16.0 (口縫部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	直立に立ち上がる口縫部に4条の回縫文を施す、端部は厚くして面をもち、外蓋部ミガキ調整、外丁寧なナゲ調整	
159-6	II 区 A7 Gr 5層	高 壁	底径 12.5 (底部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にい 黄褐色 ③普通	底部が肥厚して面をもち1条の回縫文を施す外反するもの 内面ケツリ調整、外蓋黒化著しく調査不明	

標図番号	出土地点	層 積	出 番 (cm)	①触土 ②色調 ③性成	形 塗・手 法 の 特 徴	備 考
159-7	II 区 A7 Gr 5層	高 斧	口経 13.7 (口縁部 1/3番)	①微砂粒子 (石英・長石など) 少し含む ②黄褐色 ③普通	コップ状を呈し、短い脚の付くものと思われる 内外面とも口縁部ナゲ調整、体部外面ミガキ調整、内面ハケ目調整	
159-8	II 区 A1 Gr 1層	器 台	口経 20.8 (受部 1/10番)	①1~2mm大の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁状の受台で、口縁面には15条の凹線文を施す 外面部ミガキ調整と思われる。内面ケズリのちミガキ調整	口縁部に朱塗り
159-9	II 区 B9 Gr 9層	缺 扇形踏台	底径 16.5 (脚部 1/3番)	①1mm大の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁状の受台で、面には貝殻模様による13条の凹線文を施す 外面部及び内面縁部ナゲ調整、脚部ケズリ調整	外面部朱塗り痕あり
159-10	II 区 AB-1 Gr 2層	斧	口経 17.4 (口縁部 1/7番)	①微砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②外面黒褐色～暗褐色、内面暗褐色～にぶい黄褐色 ③普通	底部をナゲにより内溝させ、口縁部は水平に肥厚して面をもち復数の凹線文を施す 内外面とも口縁部ナゲ調整、脚部ミガキ調整	外面部朱塗り痕
159-11	II 区 A-9-1 Gr 2層	小 型 盆	口経 7.3 (口縁部 1/3番)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石・角閃石など) 含む ②にぶい黄褐色 ③普通	脚部を脚部圧縮により団ませ、内面からは外反させる。丸みのあるミニチュア土器 内面脚部ケズリ調整、他内外面ともナゲ調整	
159-12	II 区 A16 Gr 10層	蓋	つまみ径 6.3 (つまみ部 完)	①1mm以下の砂粒子 (石英・長石など) 含む ②淡灰黄褐色 ③普通	中央に穿孔のある蓋 内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	
159-13	II 区 B5 Gr 3層	瓶 息 蓋 縁	底径 10.2 (底部 完)	①微砂粒子 (長石など) 含む ②青灰色 ③良好	台端部は外反する 内外面とも回転ナゲ調整	

平成5年度調査その他一覧表

標識番号	出土地点	器種	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
98-1	SK05	古銅 (文鏡)	光形	2.5	2.5	0.1	3	表:「寛永通寶」裏:「文」
121-2	SD02	古銅 (古寛永)	光形	2.5	2.5	0.1	3	表:「寛永通寶」裏:「無文」
153-1	I区 B2 Gr 1層	土玉	1/3存	3.4	4.3	孔径 0.9	26	手掘でつくられている。中央に穿孔
153-2	I区 B5 Gr 7層	土玉	光形	2.9	3.9	孔径 0.9	42	手掘だが丁寧に仕上げてある。中央に穿孔
153-3	II区 B16 Gr 3層	土玉	光形	4.0	4.5	孔径 1.1	84	手掘でつくられている。中央に穿孔 (誤ってII区の蓋物指摘してしまう)
153-4	I区 B6 Gr 8層	土玉	光形	2.9	3.8	孔径 0.9	41	手掘だが丁寧に仕上げてある。中央に穿孔
154-2	I区 A2 Gr 1層	土	鍍光形	4.1	1.1	1.1	5	
154-4	I区 A3 Gr 1層	古銅 (新寛永)	光形	2.2	2.2	0.05	1	表:「寛永通寶」裏:「無文」 「寛」と「寶」の足の後元が離れている
156-10	上器群21 (B6 Gr) 11層	土玉	光形	3.3	4.1	孔径 1.0	60	手掘でつくられている。中央よりややずれて穿孔
160-1	II区 B5 Gr 6層	土製燒成品	光形	4.6	5.0	0.4	13	土器を転用したものの、外側には列点文がある。まだ正円形ではないがほぼ中央に穿孔しようとしている 内面ハゲ目調整、外表面化粧しく調整不明
160-2	II区 A2 Gr 2層	土玉	光形	3.0	3.1	孔径 0.8	30	手掘でつくられている。中央に穿孔
160-3	II区 A15 Gr 19層	土玉	光形	3.7	4.5	孔径 1.2	79	手掘でつくられている。中央に穿孔。施成前のキズ痕あり
161-2	II区 A12 Gr 1層	古銅 (新寛永)	光形	2.2	2.2	0.07	2	表:「寛永通寶」裏:「無文」 「寛」と「寶」の足の後元が離れている

平成5年度調査石器一覧表

件名番号	出土地点	器種	遺存状態	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
11-6	SK10	砥 石	完	凝灰岩	6.5	4.6	1.8	60	14面の研磨面
13-13	SK18	砥 石	ほぼ完	凝灰岩	5.7	3.1	0.9	18	表面に刃跡が多段複数できる
13-14	SK18	砥 石	ほぼ完	凝灰岩	6.9	3.5	2.5	65	5面使用
41-1	SD10	石 砥	1/2欠	安山岩	1.2	1.7	0.4	0.9	薄手で縁辺部が鋭利
59-15	土器群6	管 玉	一部欠	凝灰岩	2.5	0.9	0.9	2	風化著しい
78-14	土器群12	砥 石 (磨紙石)	砂 岩	12.3	12.4	5.2	1,080	片面に玉頭を研ぐような溝が平行して3本ある もう1片は石皿状の形となり中央には敲打痕あり	
78-15	土器群12	砥 石	一部欠	緑色 凝灰岩	11.7	6.5	3.1	265	ほぼ全面使用
85-11	土器群14	砥 石	一部欠	安山岩	10.2	6.1	5.5	594	下面に敲打痕、表面わずかに研磨痕あり
89-1	土器群16	加工痕ある 片	ほぼ完	黒曜石	3.4	1.7	0.9	3	裏裏両面に細かい刻離痕あり
109-11	SK38	多 孔 石	泥 土	5.9	6.2	3.3	61	2つの溝状を中心に孔が数ヶ所開けている	
121-1	SD02	管 玉	1/2欠	碧 玉	1.2	0.5	0.5	1	
126-6	SD11	砥 石	完	凝灰岩	6.9	3.3	2.8	105	全面使用
126-10	SD14	磨製石器	完	安山岩	8.0	5.7	1.8	109	周縁磨製石斧か
153-5	I区 A4 Gr 8層	磨製石斧	刃部破片	泥 岩	4.6	5.0	1.8	22	鋭利な刃部
153-6	I区 B5 Gr 3層	塊状石斧	1/5存	砂 岩	6.5	4.6	1.3	52	裏裏面及び円孔部分研磨してある
153-7	I区 B4 Gr 不明	偏平片刃 石斧	基部欠	凝灰岩	3.6	4.1	0.5	13	小型品で、全面研磨された精製品
153-8	I区 B6 Gr 3層	削 片	完	黒曜石	9.2	5.5	1.7	46	裏面は自然面
153-9	I区 A8 Gr 不明	砥 石	完	砂 岩	10.6	8.8	1.2	164	表面、下側面は研磨、縁辺部は角度の鋭い剝離が施される
153-10	I区 A7 Gr 16層	砥 石	上下欠	凝灰岩	5.2	1.8	0.7	13	表面、両側面使用
153-11	I区 B5 Gr 16層	砥 石	一部欠	泥 岩	5.2	2.4	2.1	43	下側面欠損後にも使用、全面使用
153-12	I区 A1 Gr 1層	砥 石	上下欠	凝灰岩	6.1	3.5	1.3	39	全面使用
153-13	I区 B8 Gr 16層	砥 石	ほぼ完	凝灰岩	6.5	1.7~2.6	1.5~2.6	41	裏裏側面は研ぎ込み両曲している、下面荒研ぎ、上面に 切れ込みあり
153-14	I区 A4 Gr 8層	砥 石	完	安山岩	8.1	2.4~4.1	2.5	105	上下両面に敲打痕あり
154-1	I区 B3 Gr 8層	削 片	完	不明	2.2	1.8	1.1	3	上下両邊に平坦面をもち、頭がい剝離が施されている ので、標として使用されたものか
154-3	I区 B4 Gr 不明	管 玉	完	緑色 凝灰岩	1.9	0.6	0.5	1	
160-4	EK A30 Gr 1層	匂木 玉 成品	完	凝灰岩	2.9	1.9	1.2	7	匂玉の形に削り出しているが、まだ無穿孔
160-5	EK A16 Gr 19層	磨製石斧 未成品	完	安山岩	7.8	4.5	1.5	84	刃部のみ研磨
160-6	E区 A15 Gr 3層 A16 Gr 3層	石 砥	両端欠	凝灰岩	6.0	4.0	0.5	12	全面研磨

標因番号	出土地点	器種	遺存状態	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
160-7	II区 A16 Gr 3層	石 劍	基部、左側欠 縞状岩		5.0	4.8	0.8	32	全面研磨、刃部が横位方向に磨滅
160-8	II区 A20 Gr 1層	石 劍	基部、左側欠 縞状岩		6.2	4.2	0.8	31	刃部はあまり鋭利でない
160-9	II区 A14 Gr 19層	石 橫	光	玉 輔	4.5	4.1	4.0	78	
160-10	II区 A7 Gr 5層	船形石 劍	光	縞状岩	6.4	3.1	1.9	27	長楕円形に凹みをつけ船形を呈する。用途不明
160-11	II区 A10 Gr 1層	石 劍	光	縞状岩	3.7	1.8	1.5	17	全面使用だが、上面は荒削り
161-1	IIK A10 Gr カクラン層	石 劍	光	安山岩	2.3	1.6	0.4	2	無茎で三角形を呈する

## 6. 平成5年度調査のまとめ

### 白枝荒神遺跡編年案

白枝荒神遺跡では、弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が多く出土した。壺・甕を中心にその変遷を捉えることが可能なため1~9期に分類した。およそ既存の松本編年<sup>四</sup>、草田編年<sup>五</sup>と併行が可能なため、あえて併行関係で捉えておいた。白枝1期は松本Ⅲ様式をひとつにしている。新古相に分類も可能であるが、良資料に不足しているため分類しなかった。また他の時期も細分可能なものもあるが縦引きするには良資料にこれも不足しているため、新古相の注記のみに留めておいた。

#### 白枝1期

松本Ⅲ様式に併行する。

壺には広口壺(43-1)、ラッパ状口縁壺(134-2)、短頸壺(87-1)、無頸壺(136-12)などがある。口縁端部は肥厚し、口縁面は無文のもの、134-2のように斜格子文などの櫛描文を施すものがある。また134-2タイプのものは頸部に多条の断面三角形貼付突帯文をめぐらし棒状浮文などを貼り付ける。突帯文の突出部は鋭利なものから新相を呈すものは退化する。内面及び外面上位はナデ調整もみられるがタテハケ目調整を多用している。外面下位は縱方向のミガキ調整が主流を占めるようである。内面底部から下位にへラケズリ調整が観られるものもある。甕は頸部が「く」の字状に屈曲し口縁端部がわずかに肥厚して面をもち始める段階のものである。口縁面は平坦なものとわずかに凹みをつけるものがある。新相を呈するものには、口縁面に刺突文などを施したり、頸部に指壓痕痕文帯をめぐらすものが出現する。胴部の張りは弱く下半部はすぼまりしっかりした平底となる。壺と同じ調整方法である。

高坏は水平に拡張された鉗状の口縁部を有するもので、北部九州の系譜を引くものである。

#### 白枝2期

松本IV-1様式に併行する。この時期を特徴づけるものは、凹線文の導入である。壺・甕をはじめ高坏などにも用いられる。

壺には広口壺、ラッパ状口縁壺(134-8)などがあるが、1期の貼付突帯文、櫛描文が凹線文に凌駕され装飾的なものが減少する。内傾する壺の口縁端部は上・下または上下にわずかに肥厚して面をもち1~2条の凹線文を施す。口縁面長の平均値(48個体)は0.98cm、平均线条数は1.8条。胴部は張り出し、最大径付近に列点文、刺突文などが施される。1期同様の調整方法だが、内面ケズリ調整が徐々に上がり始める。

椀状の高坏(159-3)である。口縁端部が水平方向に肥厚して面をもち、その面及び体部に凹線文を施す。

#### 白枝3期

松本IV-2様式に併行する。

壺はにぎにぎしく飾るものはなくなり、広口壺(50-2、134-10)も最終段階となり、甕と同

型のものが始める。壺は2期と特徴を異にすることは、口縁端部が肥厚して3~4条の凹線文を施すようになり、内面ケズリ調整が胴部上位にまで施されるようになることである。口縁面長の平均値(34個体)は1.4cm、平均条数は3.1条。

高坏の形態が2期とは変化し、口縁部が屈折し内湾して立ち上がり、多条の凹線文を口縁部及び脚部に施すようになる。脚裾部は外反し肥厚して面をもちここにも凹線文を施す。112-3のみは内面ハケ目調整であるが、他はナデ調整、ミガキ調整を行う。

#### 白枝4期

草田1期に併行する。

壺・壺の口縁端部が拡張して複合口縁となり3~4条の凹線文を施し、頸部以下の内面調整は例外なくケズリ調整を行い器壁を薄くし始める。以降内面頸部以下の調整はケズリ調整となる。壺の口縁面長の平均値(23個体)は1.7cm、平均条数は2.9条。胴部最大径付近にあった文様は肩部へと移動する。壺のバラエティー、壺頸部の指頭圧痕文帯はなくなる。

高坏も口縁部が複合口縁となって面をもち凹線文を施す。

#### 白枝5期

草田2期に併行する。

壺・壺の口縁部は、上へ拡張して擬凹線文<sup>11</sup>を施し4期より多条化するようになる。また無文のものもかなりみられる。壺の口縁面長の平均値(51個体)は2.6cm、平均条数は7.4条。内傾していた口縁部は直立するものとなり、端部は膨らみ、突出部は下またはわざかに横に出る。完形品がなくプロポーションは不明確だが、土器群18出土の底部からすると底部径が小さくなりつつあるよう。内面口縁部はミガキ調整であるのか、ナデ調整であるのか判断しがたいくらい丁寧である。この時期にスタンプ文を施した胴部が張り算盤状、玉葱状を呈した装飾壺が供存する。

鼓形器台が登場する。壺・壺同様複合口縁様の受部・脚部を有し、同様の工具で擬凹線文を施す。外面ナデまたはミガキ調整、内面受部はミガキ調整、以下はケズリ調整である。高坏も鼓形器台と近似した器形変化をするはずだが、白枝荒神遺跡ではこのタイプの高坏は確認していない。

#### 白枝6期

草田3期に併行する。

壺・壺の口縁部は、5期より更に拡張して直立から外傾するようになる。口縁端部はまだ膨らみを残し、突出部は下または斜め横に出る。口縁面の擬凹線文は櫛状工具へと代わり浅い沈線状となる。同時に擬凹線文を撫で消すようになる。壺の口縁面長の平均値(30個体)は3.5cm、平均条数は10.8条。93-9のように器壁がかなり薄く底部は小さいものとなる。外面頸部に平行沈線状のヨコハケ目調整が施されようになる。内面調整は5期と同様である。

鼓形器台は全体に縮約して、受部、脚部の面は伸び筒部に文様を施すものもある。

#### 白枝7期

草田4期に併行する。

壺・壺の口縁端部はわずかに膨らみを残すが、引きのぼし始め、外傾する。口縁面には擬凹線文の名残りが観られるものもある。壺の口縁面長の平均値(36個体)は3.0cm。143-8、67-14の

ようく胴が張り球状のプロポーションを呈するもの、67-10、143-9のように肩の張るものもある。内面口縁部の調整は4・5期のような丁寧さはなくなる。

高坏は無文となり、口縁部に段をもって外反する。鼓形器台は全体に縮約が進み器壁も薄くなり、受部、脚部が長く、筒部の短いものとなり、各外面には平行沈線文が観られる。白枝荒神遺跡ではこの時期から低脚坏が出現する。

#### 白枝8期

草田5期に併行する。

壺・壺の口縁部は端部を引きのばし先細りとし、外傾する。突出部は斜め下または横へ引き出す。壺の口縁面長の平均値（148個体）は3.5cm。93-13のような球状、93-11、17-3のような倒卵形のプロポーションを呈する。肩部への平行沈線文からの波状文、刺突文、列点文などが施される。新相のものは口縁端部が再び丸味を帯びる。

高坏は坏口縁部が突出して外傾する複合口縁状のもの150-2、坏内面口縁部にわずかな段をもち外反するもの96-3~6、70-2とがあり、後者が主流を占める。新相を呈するに従い内面の段が不明瞭になる。鼓形器台は、古相のものには若干の文様が施されるが、文様はなくなり縮約も少しづつ進む。

#### 白枝9期

草田6期に併行する。

壺・壺の口縁端部を外に曲げて平坦面をつくるようになる。突出部は横へ引き出す。壺の口縁面長の平均値（26個体）は3.6cm。

高坏は内外面ともに段、稜線はもたないものとなる。

#### 平成5年度白枝荒神遺跡検出遺構時期設定

以上白枝荒神遺跡の編年案を試みたが、次に平成5年度白枝荒神遺跡I区・II区の検出遺構の時期設定を行う。弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてと土師器・須恵器破片を出土する古墳時代以降と中・近世にかけての遺構に大別される。

中・近世は、SK01~08、SD01~03が相当する。最も新しい耕作土を堆積土としており、寛永通宝が出土している。

土師器・須恵器破片を出土する古墳時代以降のものは、SK09・21、SD04・05・07・08・17が相当する。堆積土が黒褐色砂質土で方向がほぼ一致し並行関係にある。時期を確定するまでの根拠がなく中・近世まで下らないものとする。

またSK11・16・23・25・36・47・49、SD12・13・16は、前記した遺構に比べるとしっかりと落ち込みで、弥生土器の小破片が出土しているものもあるので、確実な時期は特定できないが弥生時代の遺構である。

	壺	甌	その他	攝入品
1 期				
2 期				
3 期				
4 期				

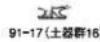
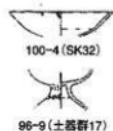
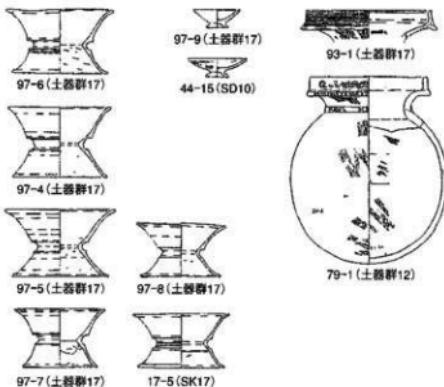
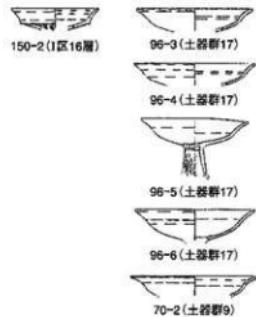
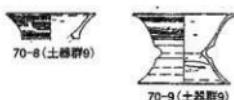
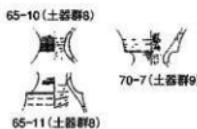
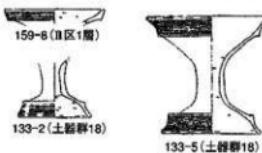
第162図 白枝荒神遺跡遺物変遷図1 (S=1/10)

壺									
5 期									
6 期									
7 期									
8 期									
9 期									

第163図 白枝荒神遺跡遺物変遷図2 (S=1/10)

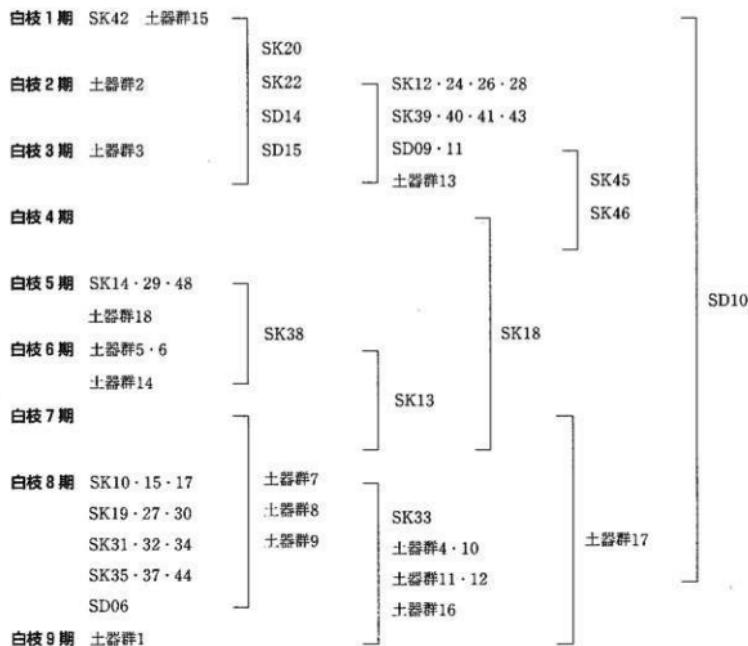
そ の 他

撤入品



第164図 白枝荒神遺跡遺物変遷図3 (S=1/10)

以下は白枝編年案の範疇の遺構を表化して表す。



註1 松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 1992

註2 赤澤秀則「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』5 1992 鹿島町教育委員会

註3 摱凹線文の定義であるが、凹線文はそれぞれを1本ずつ施しその断面が半円形であるのに対して、摱凹線文は1度に数条施す沈線文である。白枝荒神遺跡では、摱凹線文の断面が矩形であることから貝殻腹縁を利用したものと判断した

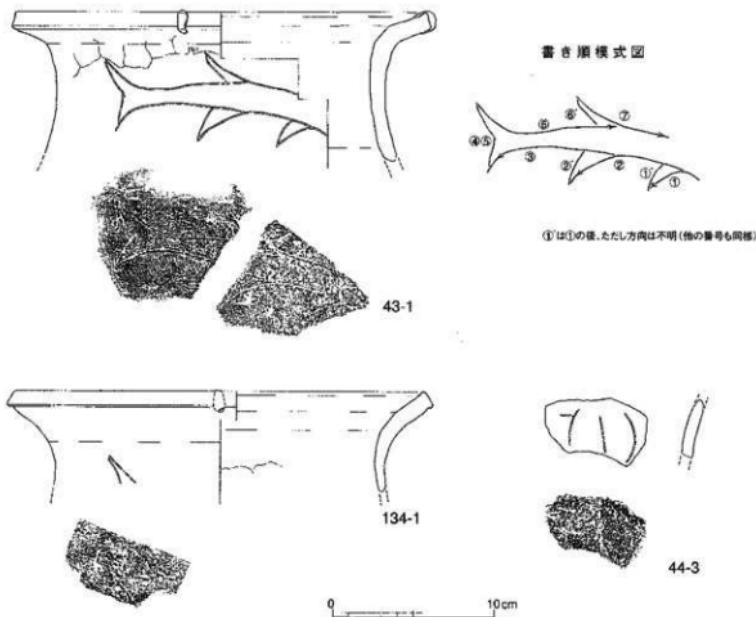
## 7. 一 考 察

白枝荒神遺跡からは、絵画土器・スタンプ文土器・特殊土器・西部瀬戸内系複合口縁壺が出土しており、当遺跡の性格を握る鍵として、それぞれ一考しておく。限られた期限・紙面などによりまた筆者の力量不足・怠惰のせいにより、狭量であることをお許し願いたい。

### 絵画土器

当遺跡から出土した明らかな絵画土器としては、SD 10 出土 43-1・44-3、B5 Gr11層出土 134-1 の3点である。すでにこの3点は資料紹介<sup>41</sup>をしているので重複することを断つておく。

43-1はA5 Gr11層出土の破片と接合したものである。口縁端部が肥厚して面をもち若干の凹みをつけただけのもので弥生中期中葉の広口壺である。その頭部は、まるでキャンバスでも表現して



第165図 白枝荒神遺跡出土絵画土器 (S=1/3)

いるようにまっすぐに立ち上がり平坦な面を呈している。

このキャンバス状の頭部に1匹の魚類が線刻によって描かれている。この魚類は頭部を欠いているが現存胴長に対して同幅の狭いこと、背鰭・腹鰭・Y字状の尾鰭にシャープさがありサメ（鯫）とみなされる。サメは、現存長15cm×幅5cm（鰭部分を含む）であり、今にも泳ぎだしそうな躍動感あふれるタッチで表現してある。

線の新旧関係、砂粒の動きなどから観察すると、この線刻画は、腹側頭部方向より前腹鰭にかけて1本の曲線を描きその後もう1本の鰭線を描いている。次にはこの腹鰭の前側の付け根から同じ方法で繰り返し尾鰭まで描いている。尾鰭の2本の線は腹側より背側方向に描かれているとも思われるが、不確定である。そして背側は、腹側とは逆に尾鰭線から後ろ背鰭の付け根にかけて1本の曲線を描いたのち、背鰭のもう1本の線を描き、次同じようにこの背鰭の頂点より前背鰭方向に1本の曲線を描いている。このように観察してみると、この絵画を描いた工人の右から左へと曲線を描く癖が認められる。また、土器を回転（移動）させつつ描いていたことがうかがわれる。

134-1はA5Gr層不明出土の破片と接合したものである。口縁端部が肥厚して面をもち若干の凹みをつけただけのもので弥生中期中葉の広口壺である。破片下隅の方をよく観察すると2本の線で左に傾いた細い山状のものが線刻してある。43-1のサメの画と比べてみるとわかるように、サメの背鰭であろう。土器自体が両者酷似しているので同一個体と思われ、43-1の欠けている背鰭とまずは考えたが、どうしてもうまく接合せず、あるいは貼付浮文が2コ1対のものと考えるとひとつの壺に2匹のサメが描かれていたと想定したい。

44-3は横6cm×幅5cmの弥生土器の破片である。表面に木の葉状の線刻が施されている。

以上当遺跡から出土した絵画土器の概要を示した。現在県内で確認されている絵画土器は、平田市美談神社遺跡出土の広口壺<sup>12</sup>で頭部に3頭以上の鹿が細いタッチで描かれている。口縁端部が肥厚して面をもち3条の凹線文を施すので、弥生中期後葉のものである。また鳥取県では淀江町稻吉角田遺跡出土の広口壺<sup>13</sup>があり、太陽状のもの、ゴンドラ状の船、高床の倉庫、切妻の家、円形のものをぶら下げている樹木状のもの、鹿が頭部に連続して描かれている。中期後葉のもの<sup>14</sup>である。

絵画土器は九州地方では弥生時代前期から描かれている例もある<sup>15</sup>が、弥生時代中期中葉頃から描かれ始め、徐々に類例が増加し中期後葉に盛行する。そして後期にはいると絵画よりもむしろ記号化した記号文が盛行するようになる<sup>16</sup>。また中心地域は大和の特に唐古・雞遺跡、清水風遺跡に集中しており出土総数の40パーセントを占めているという<sup>17</sup>。

全国的な絵画土器の出土地域・時期状況を橋本裕行氏の集成した図が『原始の造形 繩文・弥生・古墳時代の美術』に掲載されている<sup>18</sup>。それによると当遺跡で描かれているような魚類を題材にしている遺跡は、兵庫県川西市下加茂遺跡、大阪府大阪・八尾市龜井遺跡、茨木市東奈良遺跡、奈良県田原本町唐古・雞遺跡2例、天理市清水風遺跡2例の5遺跡であり、これに当遺跡のサメを加えると6遺跡8例目となる<sup>19</sup>。表現方法を求めるに、東奈良遺跡のそれと近いものを感じる。当遺跡は日本海沿岸までおよそ5km、神門水海は生活圏内であり、サメを見る機会は多かったはずである。神門水海を形成している砂丘上にある上長浜貝塚からはメジロザメ、アオザメの歯が出土している<sup>20</sup>。しかし当時の画材としては美談神社遺跡、稻吉角田遺跡でも描かれているように圧倒的に畫獸としての鹿<sup>21</sup>が

多く、類例の少ない魚類を描くということは当遺跡に住んだ人々の海に対する信仰心の篤さを感じることができる。また前記したように時期としては中期中葉（橋本Ⅲ）の範疇の壺であり、初期の絵画土器といえる。

### スタンプ文土器

当遺跡から、I区A8Gr出土 136-11、SK 48

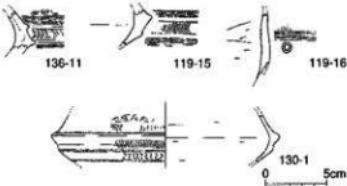
出土 119-15・16、土器群18出土 130-1 の計4点が出土した。119-16は竹管文であるが、山耕雅美・原田雅弘氏によると<sup>12</sup> 1重の同心円スタンプ文として分類してあるので併間に加えておく。

残り3点は、いわゆる算盤状、玉葱状とよばれてい

る壺の器形を呈するもので、文様にも共通するものがある。突蒂文と突蒂文の間、間蒂に「く」の字状文が、

突蒂文の上下には平行沈線文が施される点である。また136-11の上体部には山耕・原田分類の4である3重の同心円スタンプ文が施されている。130-1にはいわゆる吉備系の鋸齒状スタンプ文、逆「S」字状の、言い換え鳥形スタンプ文<sup>13</sup>を施している。

スタンプ文を有する土器の分布は、出雲・備後以東から越中・加賀・越前・大和以西の地域を示す<sup>14</sup>。名越勉・甲斐忠彦氏の分類<sup>15</sup>によると弥生時代のスタンプ文には、鳥形文、鋸齒文、同心円文、S字状渦文の4種類があるという。当遺跡では、S字状渦文は出土しなかった。また名越・甲斐



第166図 白枝荒神遺跡出土スタンプ文土器 (S=1-4)



第167図 スタンプ文土器出土分布図

氏が同一個体に異種のスタンプで施文する場合は、鳥形文と鋸歯文、同心円文と S 字状渦文が組合わると指摘された<sup>16</sup>ごとく、130-1は鳥形スタンプ文と鋸歯文の組合せである。同様な組合せの出土例には、鳥取県倉吉市中峯遺跡<sup>17</sup>、岡山県中央町大道丸遺跡<sup>18</sup>、同町三明寺遺跡<sup>19</sup>、倉敷市上東遺跡<sup>20</sup>がある。

また当遺跡以外の出雲平野からのスタンプ文施文の土器及び算盤状または玉葱状を呈する壺の出土は分布図に示したように、出雲市上長浜貝塚<sup>21</sup>、同正蓮寺周辺遺跡<sup>22</sup>、同小山遺跡<sup>23</sup>、湖陵町庭反Ⅱ遺跡<sup>24</sup>、松江市内越1号墓・内越遺跡<sup>25</sup>、安来市島田黒谷I遺跡<sup>26</sup>、西郷町大城遺跡<sup>27</sup>以上8遺跡である。そのうち鳥形スタンプ文を有するのは白枝荒神・大城、鋸歯状スタンプ文を有するのは白枝荒神・島田黒谷I、同心円スタンプ文を有するのは白枝荒神・上長浜・小山・内越・大城、S字状渦文を有するのは上長浜・島田黒谷Iである。同心円スタンプ文は普遍的にゆきわたり、鳥形スタンプ文・鋸歯状スタンプ文特に鳥形スタンプ文の出土は希有である。

### 特殊土器

土器群17より吉備地方から搬入したと思われる特殊土器93-1が出土した。口縁部破片のため詳細は不明であるが特殊壺または吉備系の器台である。土器群17は白枝7~8期(草田4~5、松本V-4併行)<sup>28</sup>を中心とした土器が集中したブロックである。出土状況よりこれらの土器とはほぼ同時期に廃棄されたものと考えられる。

出雲平野には、吉備の特殊器台・特殊壺を出土した四隅突出型埴丘墓の西谷墳墓群<sup>29</sup>がある。3号墓からは、分割型の文様を呈した特殊器台の破片、3条の突帯が施されている特殊壺などが出土しており、宇垣第1型式<sup>30</sup>である。供伴する在地の土器としては草田3(松本V-3)が出土しており吉備との併行関係と捉えうる。また矢野遺跡<sup>31</sup>からも特殊器台・特殊壺が出土しており、西谷3号墓出土土の特殊壺と類似しているためほぼ同時期のものであろう。

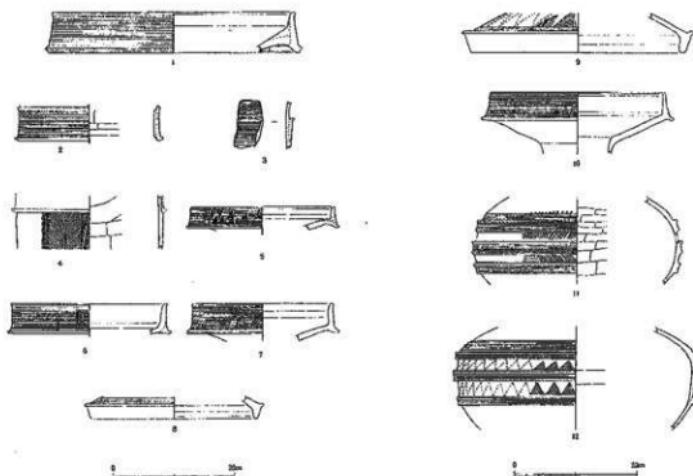
同じ出雲平野の当遺跡出土の特殊土器と西谷3号墓、矢野遺跡出土の特殊土器とは供伴する在地の土器に若干のずれを感じる。ただし『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』によると吉備では高畠V-5期<sup>32</sup>から特殊土器が「出現し始める時期」としてあり、松本V-4と併行関係にあるという。以上より西谷3号墓及び矢野遺跡にはかなり早く初期の特殊土器が搬入され、白枝荒神遺跡には盛時に搬入されたと解釈しておきたい。

### 西部瀬戸内系複合口縁壺

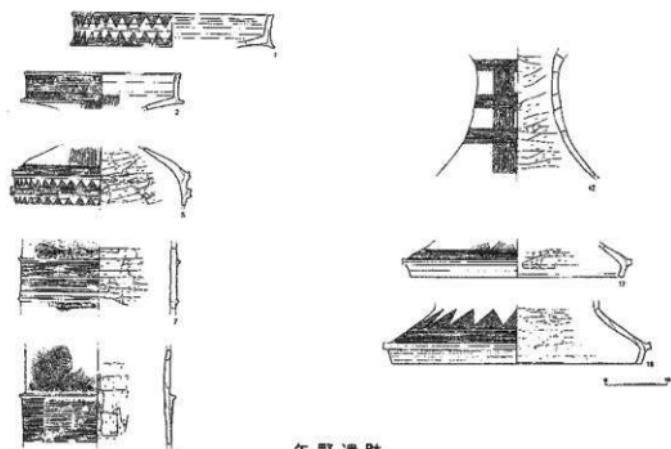
弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる西部瀬戸内系複合口縁壺79-1が1個体出土した。土器群12から在地の土器と重なり合って出土しているので、同時期に当地に持ち込まれたものであろう。白枝8~9期(草田5~6)の段階のものと考えられる。



白枝荒神遺跡



西谷3号墓



矢野遺跡

第168図 白枝荒神遺跡、西谷3号墓、矢野遺跡出土特殊土器

この壺の祖形は北部九州の袋状口縁壺、あるいはT字状口縁壺から独自に発達したもの<sup>33</sup>で、湾曲する口縁部に内傾する複合部を貼り付けた複合口縁をもち、口縁面には波状文を中心に平行沈線文・鋸歯文・列点文などを施すものもある。丸味のあるプロボーションで、頸部及び胴部下半にはクシ状工具による文様を施した突帯文を貼り付けている。その分布域は、周防・長門を中心に、豊後・伊予北部・安芸西部に集中しており、西部瀬戸内系と呼称する。

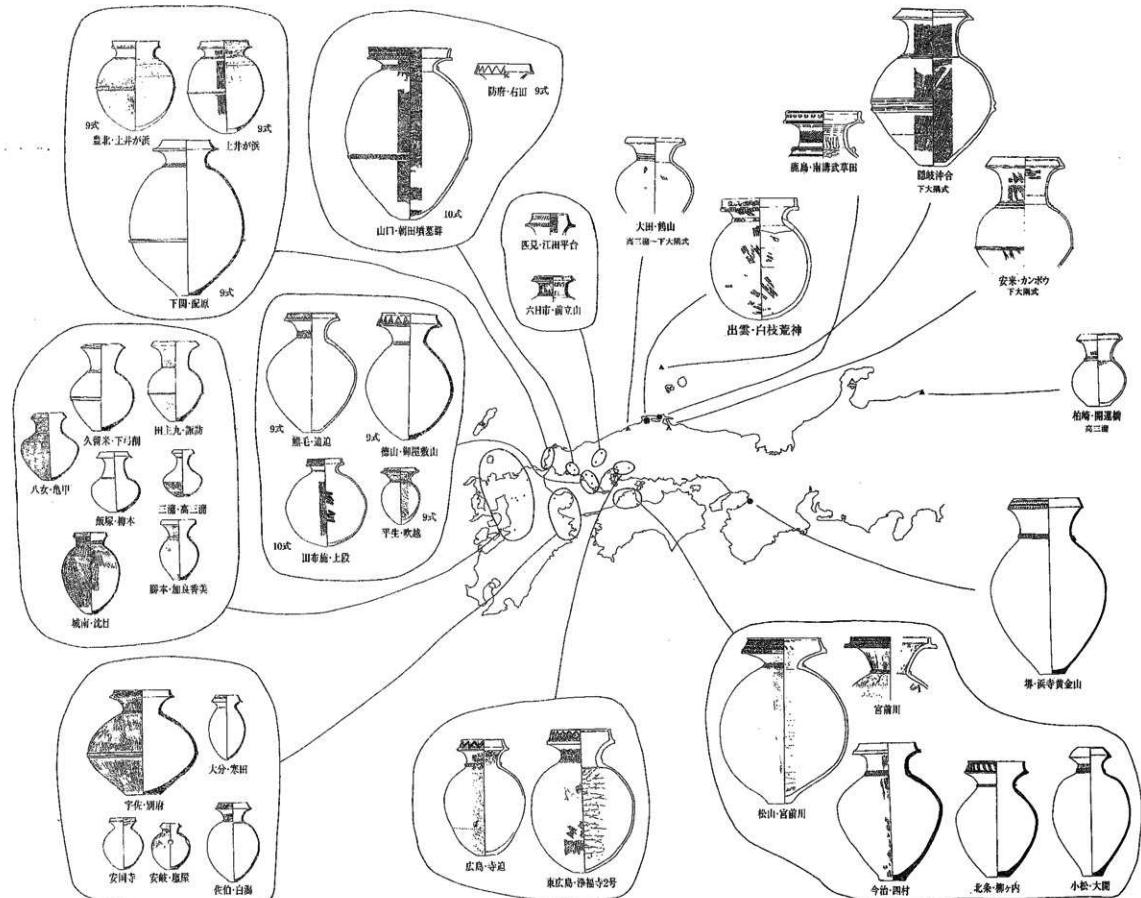
県内からの出土例は希で、石見西山間部地域の六日市町前立山遺跡<sup>34</sup>（白枝6期、草田3、松本V-3）、匹見町江田平台遺跡<sup>35</sup>（白枝5期、草田2、松本V-2）出土土器が類似した形態的特徴を有している。地理的に隣接している地域であるので河川を介しての搬入であろう。また鹿島町南講武草田遺跡<sup>36</sup>から形態的には類似する壺が出土しているが、口縁面に「U」字状のスタンプ文、頸部に貝殻原体による羽状文などを施すところが各地的である。時期は出土地であるSD 03 の在地系土器が草田I～7期のものであると記述してあり特定できない。

第169図は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての西部瀬戸内系壺と北部九州系の壺（いわゆる高三肅式・下大肅式）の分布をグルーピングしたものである。前者は、前記した5グループの他に長門・周防の中間域、石見西山間部を加えたものである。後者は、北部九州域をひとまとめにし、日本海沿岸域出土地をドット化したものである。

北部九州系複合口縁壺の日本海沿岸出土遺物の紹介・検討を常松幹雄氏が論述されている<sup>37</sup>ので、それを参考に県内出土品及び最北端出土地である越後から出土した壺を紹介する。大田市鶴山遺跡から出土した壺<sup>38</sup>は在地のもので北部九州系壺の模倣であろうと常松氏は指摘している。ただし模倣にはそのモデルがあったはずという。ここに北部九州系壺が他に存在していた可能性を示唆する。安来市カンボウ遺跡出土壺<sup>39</sup>・隱岐島沖合いから引き上げられた壺<sup>40</sup>は北部九州から搬出されたものである。ともに下大肅式のものである。松江市平所遺跡からは下大肅式の直口壺<sup>41</sup>が出土しているが、ここでは複合口縁壺を扱っているため煩雑になるので割愛した。最後に遠く越後開運橋遺跡から出土した壺<sup>42</sup>は高三肅式の搬入土器である。その他当遺跡でも山持川川岸遺跡<sup>43</sup>でも袋状口縁の破片が出土、

白枝	北部九州	山本1982	松本1992	草田1992
2 須			IV-1	
3 玖		6	IV-2	
4 高 三 肅	7	V-1	1	
5 下 大 肅	8	V-2	2	
6	9	V-3	3	
7			4	
8 西	10	V-4		5
9 新	11		6	
	12			
	13			7

表2 編年対応表



第169図 西部瀬戸内系複合口綠窯、北部九州系窯出土分布図

確認しているが、北部九州系とするにはいまいち確定するものがなく保留としておく。

弥生時代後期から古墳時代初頭に西部瀬戸内で分布する複合口縁壺及び北部九州系袋状口縁壺を紹介してきたが、かなり地域色豊かな、地域間意識の強い壺である。西部瀬戸内はむろん、日本海沿岸域への交流手段として、隱岐島沖合い出土の壺からわかるように海を媒介してのダイナミックな交流を行っていたのであろう。

最初に戻るが、サメの絵画土器もそれを物語っている。

- 
- 註1 米田美江子「白枝荒神遺跡出土の絵画土器」『動物考古学』第4号 1995 動物考古学研究会
- 註2 平田市教育委員会の原俊二氏のご厚意により実見させていただいた
- 註3 佐々木謙「鳥取県淀江町出土弥生土器の原始絵画」『考古学雑誌』67-1 1981
- 註4 清水真一「因幡・伯耆地域」「弥生土器の様式と編年」山陰・山陽編 1992
- 註5 橋本裕行「弥生絵画に内在する象徴性について」『原始の造形 繩文・弥生・古墳時代の美術』日本美術全集第1巻 1994
- 註6 佐原貢「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』66-1 1980
- 註7 橋本裕行「弥生土器絵画研究の展望」『東アジアの古代文化』85号 1995
- 註8 白枝荒神遺跡も掲載されているが、今回土器観察において前記したように中期中葉としたい
- 註9 註5で確認した他に、田原本町教育委員会「清水風遺跡第2次発掘調査および出土遺物について」1996より1点確認した。まだ未報告例が何例があるらしい
- 註10 松井章・宮路淳子「上長浜貝塚出土の脊椎動物遺存体」『上長浜貝塚』 1996 出雲市教育委員会
- 註11 「弥生人の鳥獸戲画」 1996 香芝市二上山博物館編
- 註12 山桥雅美・原田雅弘「弥生土器のスタンプ文について」『秋里遺跡(西皆竹)』 1990 (財)鳥取県教育文化財団
- 註13 土器群18註1に記したように鳥形文として扱う
- 註14 桑原隆博「広島県内出土のスタンプ施文法による連続渦文を有する土器について」『芸備』第11集 1981
- 註15 名越勉・甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』58-4 1973
- 註16 註15と同じ
- 註17 註15と同じ
- 註18 河本清「絵画土器、人形・鳥形スタンプ文土器」『古備の考古学的研究(上)』 1992 山陽新聞社
- 註19 註15・18と同じ
- 註20 註18と同じ
- 註21 川上稔「上長浜貝塚」 1996 出雲市教育委員会

- 註22 出雲市教育委員会により1995年度より調査開始され現在も調査中、広口壺の口縁内面に1重の同心円スタンプ文が縦に3ヶ2列が一組で二組まで確認できる。またいわゆる算盤状または玉葱状の胸部に直立する口縁部と脚をもち、スタンプ文ではないが緻密な装飾を施した装飾壺が出土している。
- 註23 出雲市教育委員会により1996年度調査、小破片に径1.3cmの4重の同心円スタンプ文が3点施されている。
- 註24 杉原清一「庭反Ⅱ遺跡」 1986 濑戸町教育委員会
- 註25 中尾秀信ほか「間内越1号墓・間内越遺跡」 1989 松江市教育委員会
- 註26 大庭俊次・丹羽野裕・池淵俊一「島田黒谷I遺跡」『一般国道(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』9 1995 島根県教育委員会
- 註27 「'79特別展 隠岐の国」 1997 八雲立つ風土記の丘資料館
- 註28 6.平成5年度調査のまとめ 註1・註2による
- 註29 渡辺貞幸ほか「西谷墳墓群の調査」「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」 1991  
『出雲・西谷墳墓群シンポジウム 四隅突出型墳丘墓の謎にせまる』 1995 出雲市教育委員会
- 註30 宇垣匡雅「特殊器台・特殊壺」「古備の考古学的研究(上)」
- 註31 出雲考古学研究会「出雲平野の集落遺跡II－矢野遺跡とその周辺－」「古代の出雲を考える』 5 1986  
出中義昭ほか「出雲市矢野遺跡の発掘調査」「古代出雲文化の展開に関する総合的研究－斐伊川下流域を中心として－」 1989 島根大学
- 註32 高畠知功「備中地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」
- 註33 山本一郎「防長の弥生式土器」「山口県の弥生式土器－集成と編年－」 1979 周陽考古学研究所
- 註34 ト部吉博・内田律雄ほか「前立山遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 1980 島根県教育委員会
- 註35 松本岩雄「石見地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」
- 註36 註28と同じ
- 註37 常松幹雄「本州島域における北部九州の壺型土器」「福岡考古」第16号 1994 福岡考古懇話会
- 註38 大国晴雄「鶴山遺跡」「大田市埋蔵文化財発掘調査報告書2 川南遺跡群」 1982 大田市教育委員会  
註37と同じ
- 註39 丹羽野裕ほか「右田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡」「一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ 1994 島根県教育委員会  
註37と同じ

- 註40 註37と同じ
- 註41 前島已基・松本岩雄ほか「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 1977 島根県教育委員会  
岩橋孝典「山陰地域内出土の外来系土器について」『一般県道米子伯太線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 石田遺跡』 1994 島根県教育委員会
- 註42 註37と同じ
- 註43 川上稔『山持川川岸遺跡』 1996 出雲市教育委員会

#### 参考文献

- \*『特別展弥生人のメッセージ 絵画と記号』 1986 檀原考古学研究所付属博物館
- \*資料「清水風遺跡第2次発掘調査および出土遺物について」 1996 田原本町教育委員会
- \*藤出憲司 「山陰「鎌尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64-4 1979
- \*小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』 1958・1964 日本考古学協会
- \*「朝印墳墓群Ⅲ-B、IV 糸米遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』第45集 1979
- \*「宮前川遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1986 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- \*「追迫遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』第107集 1988 山口県教育委員会
- \*谷口哲一『山口県埋蔵文化財センターニュース 陶壇』⑥ 1993 山口県埋蔵文化財センター
- \*常松幹雄「伊都國の土器、奴國の土器」『古代探叢』Ⅲ 1991 早稲田大学考古学会
- \*山本一郎・前島高雄『山口県の古代遺跡I 集落・墳墓編』 1995 古代遺跡教材化研究会

## 第4章 平成6年度調査の概要

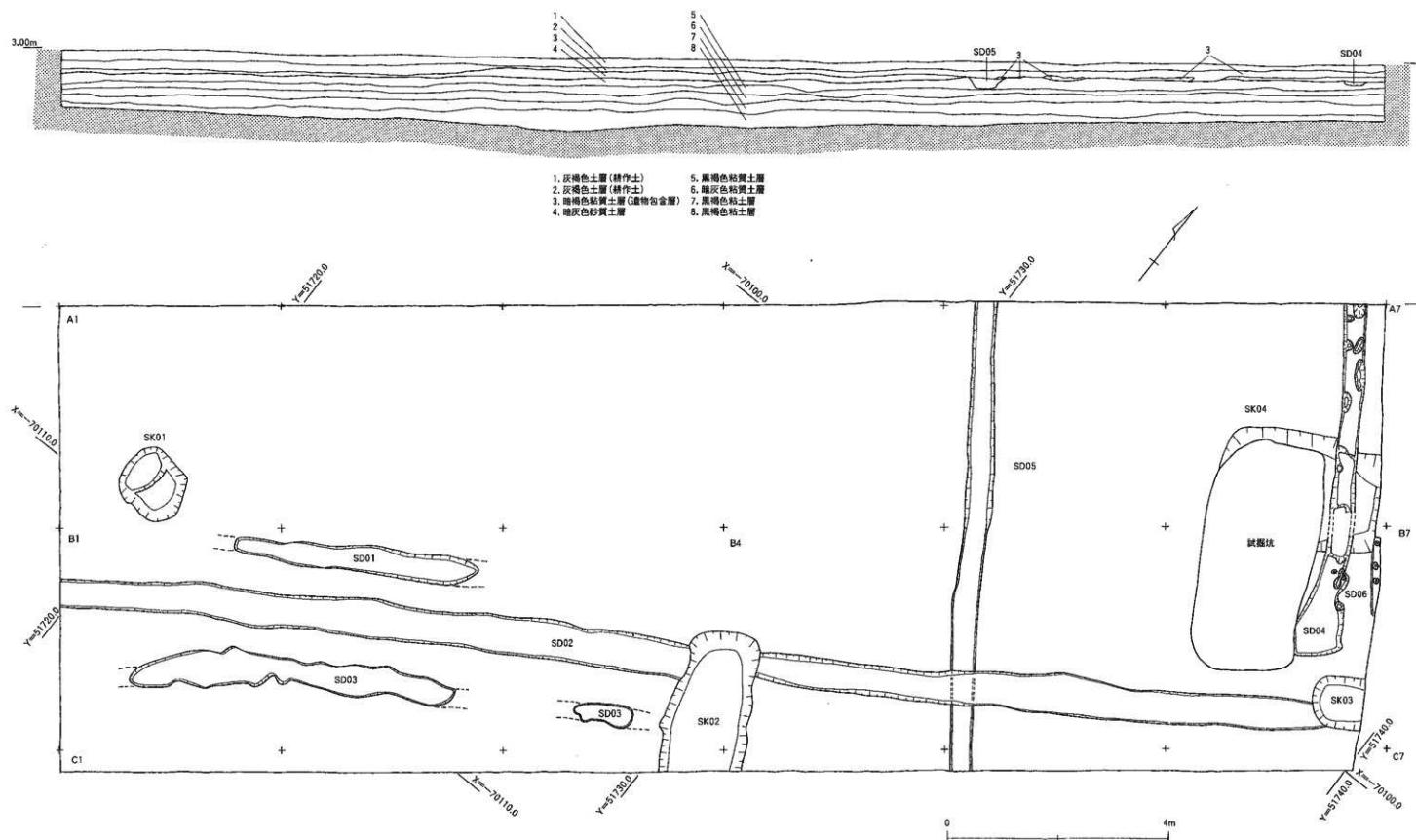
### 1. 平成6年度調査の概要

白枝荒神遺跡の西端にあたる東西25m×南北12mの300m<sup>2</sup>の調査を平成6年度に実施した。水田として利用されていたため表土から40cm程度の耕作土を重機により掘削し、その後、4m×4mのグリッドを12区画設定した。また、調査区の南壁沿いに幅50cmのサブトレンチを設け、層序を確認すると同時に排水溝として利用した。

調査地での層序は、上層から1灰褐色土層（耕作土）、2灰褐色土層、3暗褐色粘質土層、4暗灰色砂質土層、5黒褐色粘質土層、6暗灰色粘質土層、7・8黒褐色粘土層となっており、この内遺物包含層は3暗褐色粘質土層のみであった。この調査により土師器、須恵器などの小片を中心にコンテナ1箱分の遺物が出土しているが、そのほとんどはこの層から出土したものである。また、この層の下に堆積している4暗灰色砂質土層上面から遺構が検出された。遺構からの出土遺物はほとんどなく、覆土から弥生土器の小片が数点出土しているものもあるが、いずれも時期の確定には至らなかった。



第1図 平成6年度調査区位置図 (S=1/400)



第2図 平成6年度調査区遺構置図 (S=1/60)

## 2. 遺構と遺物

### 土坑

平成6年度調査では、4基の土坑を検出した。A1グリッドから検出したSK01以外のSK02・03・04は形態、規模に共通点がみられる。

#### SK01(第3図)

SK01は東西方向を長軸とした土坑で長さ130cm、幅106cm、深さ70cmを測る。底から20cmの高さの段が東半分を占める二段掘りの土坑である。覆土は灰褐色粘質土をブロック状に含んだ1黒褐色粘質土のみであることから、埋め戻して廃棄されたようである。出土遺物が全くなく、遺構の時期については不明である。

#### SK02・03・04(第4図)

SK02は調査区中央の南端部で確認した。隅丸長方形の平面プランであると考えられ、長さ220cm以上、幅140cm、深さ90cmの大型の土坑である。坑底は平坦であり、側壁は急な角度で立ち上がる。また、SD02を切っている。

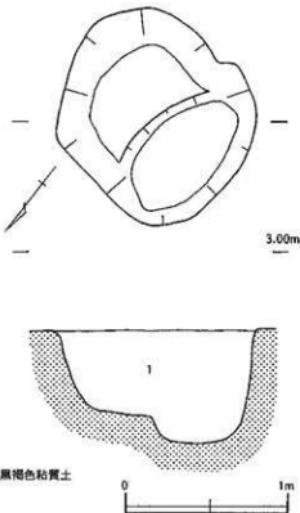
SK03はB6グリッドで検出した。調査区東壁以東にも遺構が続いているが、遺構の一部の検出にとどまつたが、平面プランは隅丸長方形であることが窺える。規模は長さ90cm以上、幅94cm、深さ90cmを測る。坑底は平坦であり側壁は急角度で立ち上がり、SD02を切っている。

SK04は調査区東壁際中央で検出した。長さ320cm程度、幅210cm、深さ80cmの大型の土坑である。平面プランの一部は調査区東壁の外に延びており、また、試掘坑により底まで大きな擾乱を受けているが、底の平面プランは全範囲確認できているため、隅丸長方形であることが窺える。坑底は平坦で、南の側壁は急な角度で立ち上がるが、北の側壁は急角度で立ち上がり中程で緩やかな傾斜に変化する。切り合ひ関係からSD04より古い遺構であることが確認されている。

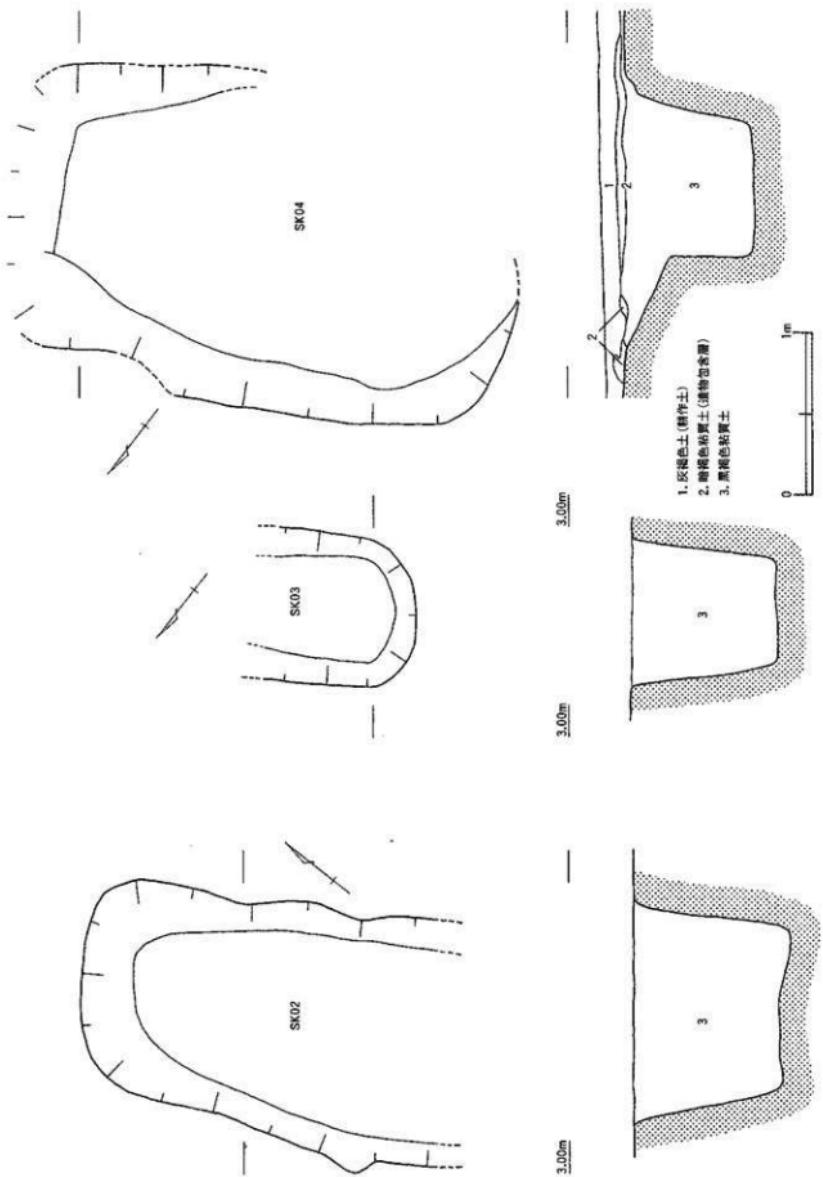
SK02・03・04のうち、SK03はやや規模が小さいが、平面プランが隅丸長方形である点、坑底の標高が1.7mから1.8mであり平坦である点、側壁が急角度で立ち上がる点、覆土が灰色砂、暗褐色粘質土、灰色粘質土ブロックを含んだ3黒褐色粘質土で一度に埋められている点などの共通点がある。いずれも出土遺物がなく時期は不明であるが、同じ使用目的を持って築かれたものではないかと考えられる。降水量の多い冬場の調査で地下水位が上昇していたと考えられるが、湧き水もあまりなく、井戸である可能性は低い。

### 溝状遺構

平成6年度調査では溝状遺構を6条検出している。いずれも深さが10cm未満と浅く、後世の削平



第3図 SK01実測図 (S=1/30)



第4図 SK02・03・04実測図 (S=1/30)

により底の一部のみの確認にとどまったものもある。これらの溝状遺構からは数点の弥生土器を出土するものもあるが、その数が少ない点、検出面の上に弥生土器片を包含するが、須恵器片、磁器片なども若干含む土層が堆積している点などから弥生時代の遺構ではないと考えられる。

#### SD 01・02・03 (第2図)

SD 01は溝状遺構の底の一部が確認されたものである。検出面から底までの深さは10cmと浅く、幅は40cm程度である。底面は平坦で、覆土は灰褐色土であり出土遺物はなかった。

SD 02は調査区の西壁からSK 03に切られるまでの約22m間にわたり検出した。幅50cmから70cm、深さは9cmで底は平坦である。覆土の灰褐色土中から、底からは浮いた状態で、弥生土器の壺の胴部の小片が2点出土している。

SD 03は溝状遺構の底の一部が確認されたものである。幅35cm~70cm、深さは6cmで底は平坦である。覆土は灰褐色土で出土遺物はない。

#### SD 04 (第5図)

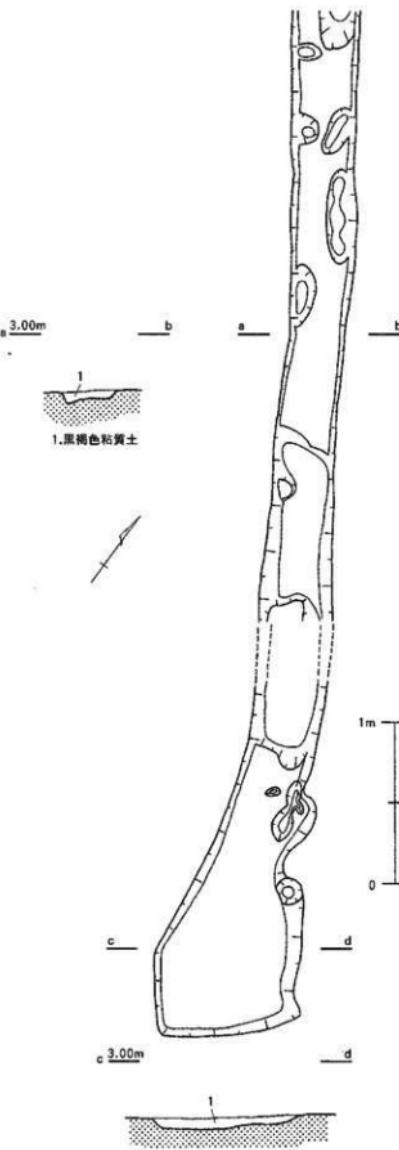
SD 04は調査区東壁沿いで確認した。検出面からの深さは6cmと浅く、底は小さな凹凸が多数あった。覆土の黒褐色粘質土からは弥生時代中期の壺の小片などが数点出土した。

#### SD 05 (第2図)

SD 05はA 5、B 5グリッドで検出した。検出面から平坦な底面までは10cmを測り、幅50cmのほぼまっすぐに伸びた溝状遺構である。切り合い関係からSD 02より古い時期の遺構であることを確認している。覆土から弥生土器と思われる壺の頭部小片1点が出土している。

#### SD 06 (第2図)

SD 06は調査区の東壁間際に確認された。深さは3cm程度と浅く、底面には小さな凹凸がある。平面プランのごく一部の検出にとどまり、出土遺物もないことから詳細は不明である。



第5図 SD 04実測図 (S=1/30)

### 3. 遺構外の出土遺物

平成6年度調査区は白枝荒神遺跡の西端にあたるため、出土遺物は少なくコンテナ1箱分にとどまつた。そのうち遺構内出土遺物を除くほとんどの出土遺物は遺構検出面を覆う3暗褐色粘質土層からの出土であり、この層を覆う現代の耕作土からは、近代の陶器片が数点出土している。3暗褐色粘質土層からの出土遺物はほとんどが弥生土器であるが須恵器や石器も数点混じっていた。4暗灰色砂質土層以下からの出土遺物は全くなかった。

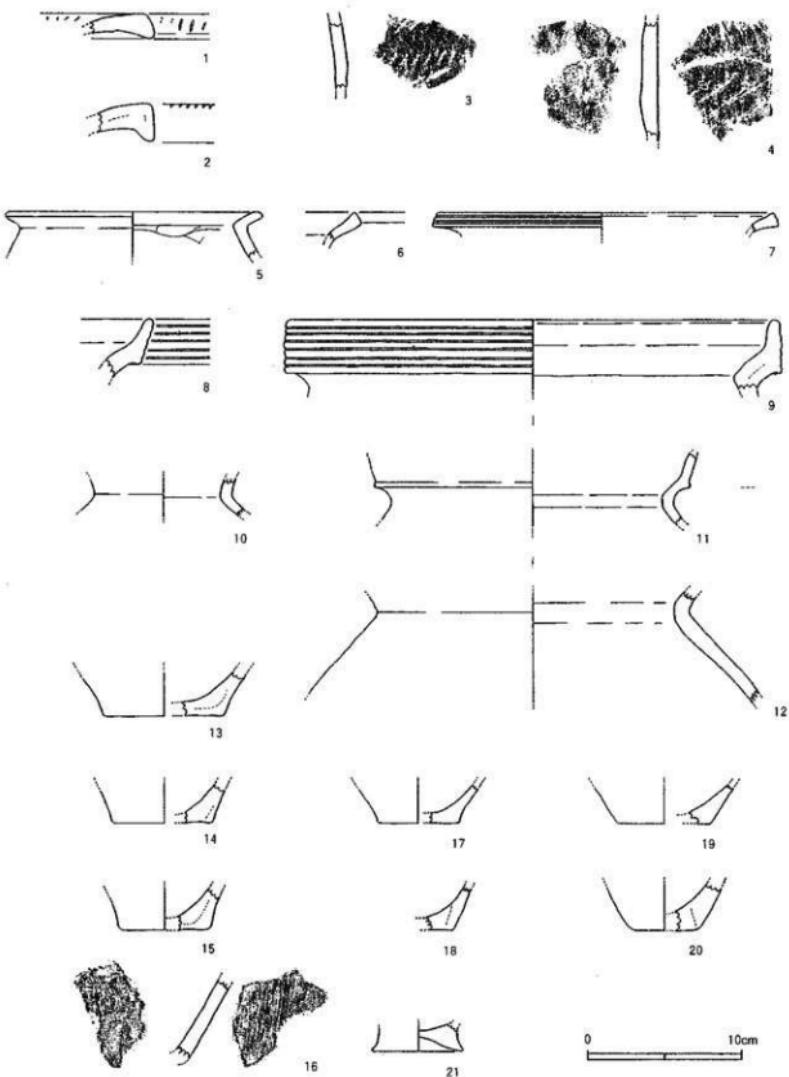
#### 弥生土器

3暗褐色粘質土層出土の弥生土器は松本編年の中第Ⅲ様式から草田4期のものが出土しているが、松本編年の第Ⅲ、第Ⅳ様式のものが中心である。いずれも小片で磨滅しているものが多いが、このうち圓化可能なものについて取り上げると次のようになる。

6-1・2は口縁部が大きく朝顔状に聞く広口壺の口縁部である。6-1は口縁端部が下方に拡張しており、口縁端部の平坦面及び口縁部内面に櫛状工具によると思われる列点文を施す。また、口縁部外側には突帯文をめぐらせている。6-2は大型で器肉は厚い。口縁端部が下方に拡張し端部の上方に刻目を施している。6-3は大型の壺の胴上部片と思われる。櫛状工具による列点文の上下に綾杉状に連続刻目文を施している。6-4は大型壺の頸部付近の破片と思われる。外面に羽状文がへら描きされている。

6-5~12は甕である。6-5は口縁部が比較的緩く「く」字状に屈折する。外面は風化のためはっきりしないがナデ調整のようである。頸部以下の内面はナデ調整がなされている。平成6年度調査区出土の弥生土器のなかでもっとも古いものであり、松本Ⅲ-2に該当するものと思われる。圓化不可能な小片の多くもこの時期から松本Ⅳ-2までのものが多いようである。6-6は口縁端部やや肥厚し平坦面をもつ。内外面ともナデ調整で、端部に施文はない。6-7は口縁端部はやや上方へ拡張し、2条の凹線が施されている。6-8は複合口縁部に5条の凹線文を施している。複合部の稜は下方に突出する。6-9は複合口縁部に6条の凹線が施されている。口縁端部は丸く、複合部の稜は下方に突出している。器肉は厚く、大型の甕である。頸部以下はケズリが施され、そのため頸部内面の屈折は鋭くなっている。6-10は頸部の破片で外面及び内面上部はヨコナデ、頸部以下の内面はケズリが施されている。6-11は複合口縁部が無文で、複合部の稜は斜め下方に突出している。草田4期に該当するものと思われ、平成6年度調査区出土の弥生土器のなかではもっとも新しいものであるが、この時期と確認できるものはこの1点のみである。6-12は頸部から肩部にかけての破片である。調整は頸部外面にヨコナデが施されていること以外は風化のため不明である。

6-13~21は底部である。6-13は平底の底面にナデが施されていること以外は風化のため不明である。6-14は外面と底面にナデが施されている。6-15は平底であるが風化が著しく調整不明である。6-16は底部付近の破片である。外面は荒いハケで調整された後ナデられたようである。内面も荒いハケ調整がなされている。6-17は平底であるが風化が著しく調整不明である。6-18は外面は風化しているが、内面と底面はナデ調整がなされている。6-19も風化のため調整不明である。6-20は低径の小さい平底で器肉は厚い。6-21は低脚壺の脚部と思われる。脚端部は薄く引き出されている。



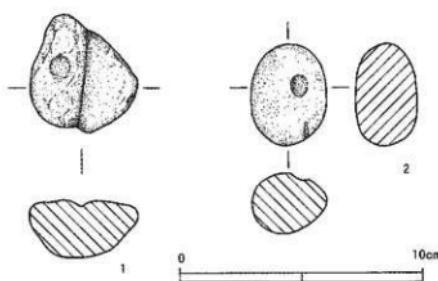
第6図 第3層出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第7図 第3層出土須恵器実測図 (S=1/3)

### 須恵器

3 暗褐色粘質土層からは須恵器片が數点出土している。そのうち固化可能なものは次の2点のみである。7-1は高台付きの壺の底部である。底面及び内面は回転ナデがなされている。底部の外縁よりやや内側に高台が付けられている。7-2は器種は不明であるが、口縁端部の破片である。端部は平坦で内外面は回転ナデで調整されている。



第8図 第2層、第3層出土石器実測図 (S=1/2)

### 石器

石器は2灰褐色土層（耕作土）及び3暗褐色粘質土層からそれぞれ1点ずつ出土している。8-1は軽石を加工した浮子と思われる。中央に掘り窪められた筋状の溝がある。実際に水に浮べてみた結果、浮力があることが確認されている。8-2は表面の若干の窪みが唯一人為的なものである。2灰褐色土層（耕作土）中の出土であるため時期など詳細は不明である。

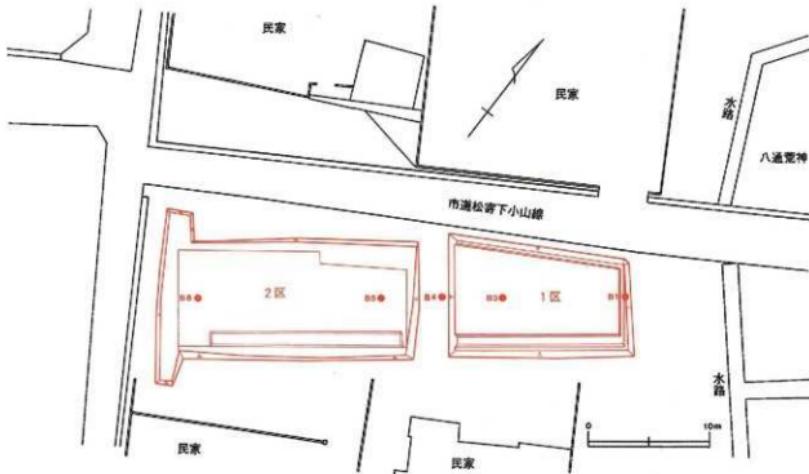
## 第5章 平成7年度調査

### 1. 平成7年度調査の概要

平成5年度調査地以西の東西50m×南北12mの600m<sup>2</sup>の発掘調査を平成7年度に実施した。調査地は宅地として利用されていたが、調査時には道路予定地の南側に民家は移築していた。このため、市道から民家への進入路などを確保する必要があったため、その箇所を除き調査を実施した。表土から約60cmの造成土を重機により掘削した後、調査区の東西軸に中心線Bラインを設定し、南北軸に平行に東から西へ1ラインから順次5m間隔で南北ラインを設定した。また、Bラインに平行に南へAライン、北にCラインを5m間隔で想定し5m×5mグリッドを設定したが、道路からのり面などを確保するため5mに満たない箇所では必要に応じ随時A'などの基準杭を設置した。当初は、平成8年度調査地も平成7年度実施予定であったため、南北ラインは15ライン設定した。便宜上1ラインから4ラインまでを1区、4ラインから9ラインまでを2区、10ラインから15ラインまでを平成8年度調査区とした。いずれも重機掘削後、調査区南壁沿いにサブレンチを設定し層序を確認しながら徐々に手掘により掘削し遺構の検出に努めた。

#### 1区(第9・10図)

1区の層序は上層から造成土、1暗灰褐色粘質土層(旧耕作土)、1'暗灰褐色粘質土層、2綠灰褐色粘質土層、3黒褐色粘質土層、4~7砂層、8~12粘土層となっている。粘土層の下では、標高60cmあたりで旧神戸川が三瓶山から運んできた石英安山岩の砂層の上面を確認している。また、1暗灰褐色粘質土層(旧耕作土)は昭和30年代の田の耕作土と考えられ、上面からはそれを裏付ける稻株の跡を確認している。



第9図 平成7年度調査区位置図 (S=1/400)

1区の遺物は、1暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）及びその下に堆積する1'暗灰褐色粘質土層から現代のガラス片、近世以降の陶磁器片などに混じり須恵器片、土師器片、弥生土器片などがコンテナ1箱分出土するが、そのほとんどは磨滅した弥生土器の小片である。それに対し2綠灰褐色粘質土層は弥生土器のみを包含する層である。

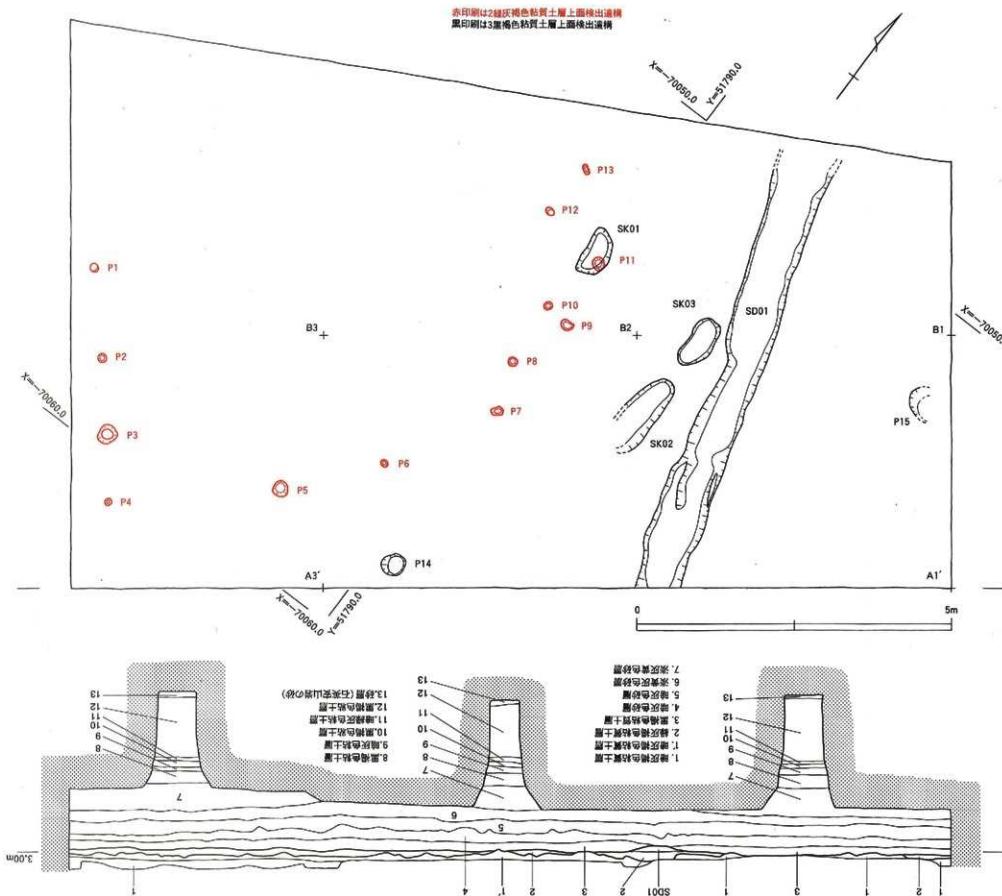
1区の遺構は、2綠灰褐色粘質土層上面及び3黑褐色粘質土層上面で検出した。2綠灰褐色粘質土層からはピットを13基を検出した。また、3黑褐色粘質土層上面からは土坑3基、溝状遺構1条、ピット2基を検出している。3黑褐色粘質土の下に堆積する砂層以下の層からは遺構、遺物ともに検出できなかった。

## 2区（第9・11図）

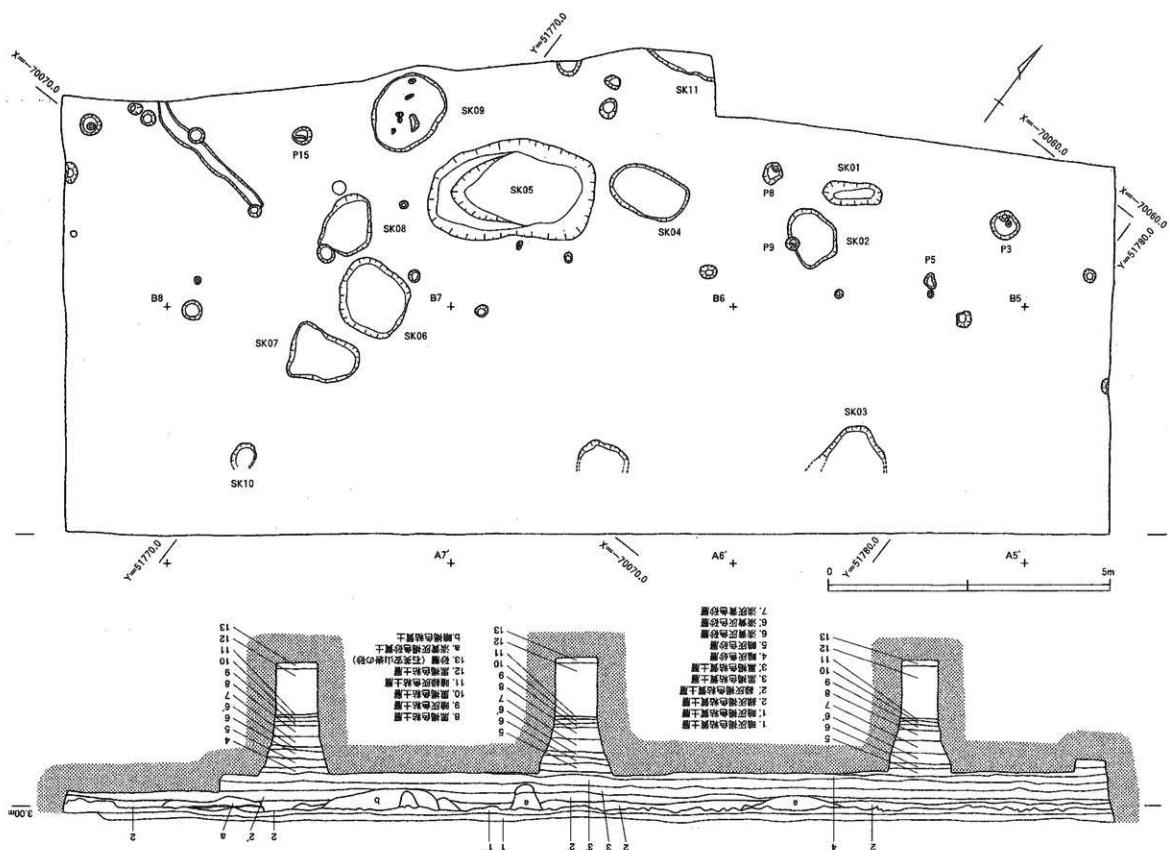
2区の層序は、おおむね1区のそれと同じであるが、若干層の数が増えている。この場合1区の層序と対応させるため1区で確認できなかった層に対しては、例えば「3'黒褐色粘質土層」という具合に記述している。2区は1区の西に、つまり「神門水海」寄りに位置しているため、旧神戸川の沖積作用により層が形成されるにあたり、若干層が厚みを増しながら堆積するためこのような結果になったと考えられる。

2区の遺物の出土状況も1区のそれと同じであるが、量は増える。1暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）及び1'暗灰褐色粘質土層から弥生土器片を中心とした遺物がコンテナ2箱分出土した。また、2綠灰褐色粘質土層からもコンテナ1箱分の弥生土器片が出土した。

2区の遺構は、2'綠灰褐色粘質土層上面から、土坑11基、溝状遺構1条、ピットを31基を検出した。1区で遺構を検出した2綠灰色粘質土層からは調査時に遺構が検出できなかったが、南壁セクションを観察すると、2綠灰色粘質土層上面から遺構が掘り込まれていることが確認できた。しかし、2綠灰色粘質土層が弥生土器を包含すること、また、2'綠灰色粘質土上面から落ち込んでいたと思われる遺構があることから、2区も1区同様に弥生土器のみを包含する2綠灰色粘質土層に覆われた遺構が存在する可能性を示している。



第10図 平成7年度調査1区地構配図 (S=1/60)



第11図 平成7年度調査2区遺構配置図 (S=1/60)

## 2. 1区の遺構と遺物

### 土坑

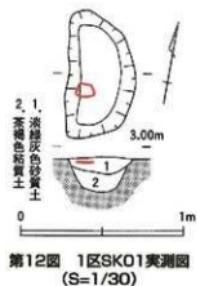
平成7年度調査1区からは3基褐色粘質土層上面から掘り込まれたSK01～03の3基の土坑を検出した。

#### SK01(第13・14図)

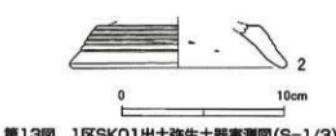
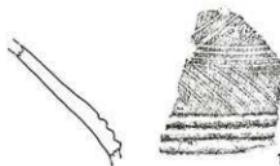
B2グリッドから検出したSK01の平面プランはいびつな楕円形を呈しており、ほぼ南北を長軸としている。長さ79cm、幅42cm、深さ22cmを測る。坑底は緩やかに丸い。覆土は1淡緑灰色砂質土とやや締まりのある2茶褐色粘質土の2層に分かれ、前者から弥生土器片が数点出土している。13-1は最大径が胴部中央やや下方で、口縁が朝顔状に開く大型長頸壺の胴上部片と思われる。断面が三角形の突帯を削り出してめぐらせ、その上に5条の平行沈線をめぐらせた後にそれを中心に羽状文を施している。13-2は高环あるいは器台の脚部である。外面は5条の凹線をめぐらせ、内面はケズリが施されている。

#### SK02・03(第14図)

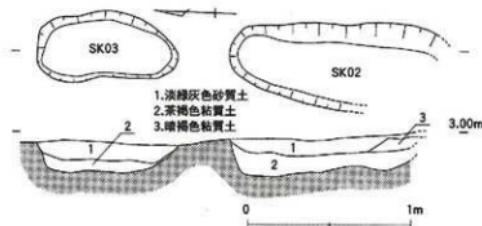
A1グリッドからSK02・03を検出した。SK01からの距離は約2mという近さである。SK02・03ともほぼ南北を長軸とし、それぞれの長軸が直線上に重なる配置となり、30cmという至近距離に築かれている。SK02は長さ140cm(推定)、幅55cm、深さ20cmを測り、楕円形の平面プランと思われる。SK03は長さ86cm、幅40cm、深さ18cmを測り、いびつな楕円形を呈している。規模は両者で異なるが、形態は両者とも南の側壁は坑底から緩やかに立ち上がるが、他の側壁は急に立ち上がっているという共通点がある。覆土はSK01と基本的に



第12図 1区SK01実測図  
(S=1/30)



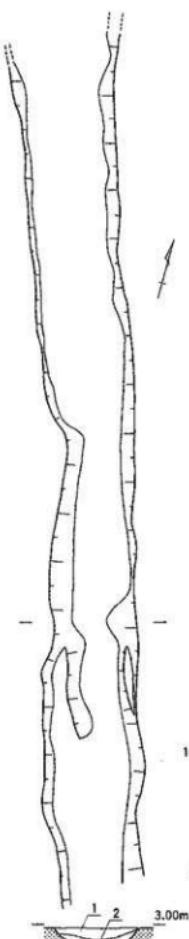
第13図 1区SK01出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第14図 1区SK02・03実測図 (S=1/30)

同じであるが、SK02は1淡緑灰色砂質土と2茶褐色粘質土の間に3暗褐色粘質土が入っていた。両者とも出土遺物は少なく弥生土器の小片を数点ずつ出土しているのにとどまる。

これらの3基の土坑は覆土、長軸の方向が同じであることなどから同時期に築かれ、埋まったものと考えられる。その用途についてはいずれも出土遺物が少なく即断はできないが、これら以西の平成7年度調査2区及び平成8年度調査区から土坑墓と思われる遺構が確認されている点から、土坑墓の



第15図 1区SD01実測図 (S=1/40)



第16図 1区SD01出土弥生土器  
実測図 (S=1/3)

可能性が指摘できる。時期についてはSK01の出土遺物である13-1が弥生時代中期のものであるのに対し、13-2が弥生時代後期前半のものであること、また、これらの土坑を弥生時代中期から後期後半の土器を包含する2層灰褐色粘質土層が覆っていることから考えると、弥生時代後期前半に築かれ、弥生時代後期後半に埋まったものと推測できる。

#### 溝状遺構

平成7年度1区からは3層灰褐色粘質土層上面から溝状遺構を1条検出した。

#### SD01(第15・16図)

A1、B1グリッドからは南北に伸びるSD01を約7m間にわたり検出した。幅は56cm~90cmで深さは約20cmを測り、断面は緩やかなU字状である。覆土は先述の土坑SK01などと同じであり、1淡緑灰色砂質土の下に2茶褐色粘質土が堆積している。この覆土を観察する限り水が流れていった形跡はないが、SD01の底のレベルは北と南では6cmの差があり、仮に水が流れていったとするなら南から北への水の流れが推測される。出土遺物は16-1に挙げる松本IV-2様式と思われる、甕の口縁の破片1点のみである。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施されている。頭部は「く」字状に屈折しており、口縁は内外面ともナデ調整されている。頭部以下の残存はわずかであるが、内面にケズリの痕跡は見あたらない。小片であるため口径の復元是不可能であるが、器肉の厚さから中型の甕と推定できる。これをもって時期を即断することは不可能であるが、覆土が先述の土坑SK01などと同じであることに着目すると、弥生時代後期前半に築かれ弥生時代後期後半に埋まったものと推測できる。

用途については不明だが、SD01以東の平成5年度調査区で弥生土器片の出土が飛躍的に多くなる点、また、以西の平成7年度調査2区及び平成8年度調査区から土坑墓と思われる遺構が十数基確認されると同時に出土する弥生土器片が増加し、平成6年度調査区では遺構、遺物とともに減少する点、水が流れていった形跡がない点などを勘案すると、SD01は以東の生活域と以西の墓域をわけ隔てる区画溝であった可能性も指摘できる。

## ピット

平成7年度調査1区からは2緑灰褐色粘質土層上面から13基、3黒褐色粘質土層上面から2基のピットを検出した。P1からP4が直線上に並ぶこと以外はいずれのピットも規格性が見受けられず、また、出土遺物も少ないため詳細は不明である。

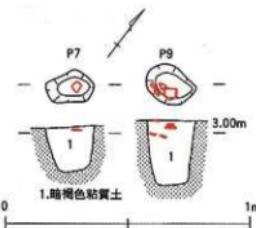
### P7・9(第17図)

2緑灰褐色粘質土層上面検出の13基のピットはいずれも覆土が1暗褐色粘質土であるが、このうち、遺物が出土したものはP7・9の2基である。A2グリッドで検出したP7の平面プランは長径20cm、短径12cmのいびつな楕円形で、深さは18cmである。出土遺物は弥生土器の壺の胴部片と思われるものが1点出土している。P9はB2グリッドで検出した。平面プランは長径20cm、短径15cmのいびつな楕円形で深さは26cmを測る。出土遺物は弥生土器の壺の胴部片が1点ある。外面は列点文が施され、内面は部分的にケズリが確認できる。その他数点の土器片が出土しているが、小片のため時期は不明である。

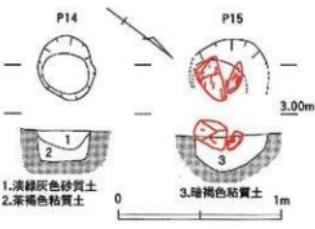
### P14・15(第18・19図)

3黒褐色粘質土層上面で次の2基のピットを検出した。P14はA2グリッドの調査区南壁付近で検出し、平面プランは直径30cmの円形を呈しており、深さは19cmを測る。覆土はSK01やSD01と同じものであり、1淡緑灰色砂質土の下に2茶褐色粘質土が堆積している。出土遺物は1淡緑灰色砂質土から19-1に挙げる弥生土器片が1点出土している。口縁端部は肥厚し上下に若干拡張する。口縁端面には3条の凹線文をめぐらせた後、それに直交するように刻目文を施している。頸部には張り付けによる指頭圧痕文帯をめぐらせており、内面は「く」字状に屈曲する。松本IV様式の壺の口縁部と考えられる。

A1グリッドの調査区東壁付近でP15を検出した。東壁に土層観察のために設定したサブトレンチで一部破壊してしまったが、その断面にP15の痕跡がなかったため規模は推定可能である。直径50cmの円形プランを呈していたと考えられ、深さ22cmを測る。底は丸く染かれており、覆土は他の3黒褐色粘質土層上面検出遺構とは異なり、1暗褐色粘質土であった。この覆土の上層に数点の磨滅した土器片が出土しているが、いずれも小片で詳細は不明である。また、20cmと25cm大の自然石も同時に出土している。P15は調査時、2緑灰褐色粘質土層上面の精査で確認できなかったが、覆土がこの層上面で検出した他のピットと類似しているため、それらと同時に埋まったもの可能性もある。



第17図 1区P7・9実測図(S=1/20)



第18図 1区P14・15実測図(S=1/30)

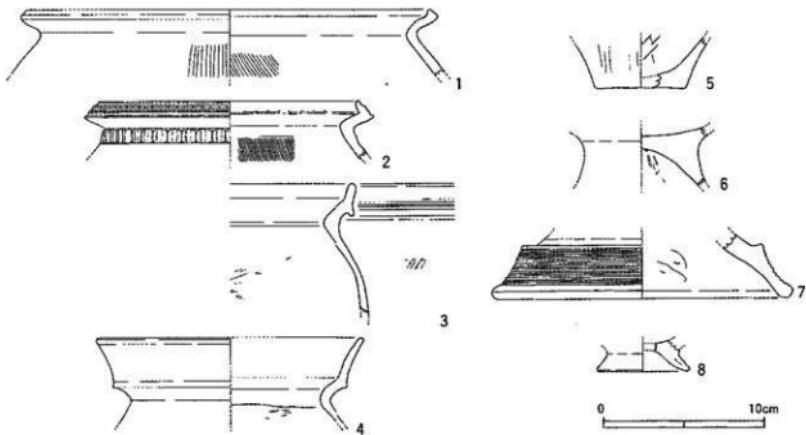


第19図 1区P14出土弥生土器実測図(S=1/3)

### 3. 1区遺構外の出土遺物

平成7年度調査1区では、1暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）、1'暗灰褐色粘質土層及び2綠灰褐色粘質土層から出土遺物があり、3黒褐色粘質土層以下の土層から遺物はまったく出土しなかった。1・1'暗灰褐色粘質土層からは、近世以降の陶磁器片などに混じり須恵器片、土師器片、弥生土器片が出土している。また、2綠灰褐色粘質土層からは弥生土器片のみが出土している。全体でコンテナ1箱分の土器が出土しているが、そのほとんどは弥生土器片であり、陶磁器片や須恵器片はビニール袋半分にも満たない。1区の東に隣接する平成5年度調査区の出土遺物量と比較すると、格段に減少するが、西の2区ではまた増加の傾向をみせている。

20-1は壺の口縁部である。口縁端部は上方にのみ拡張し、口縁部内外面ともヨコナデで整えられている。肩部外面には綫方向、内面には斜め方向のハケメが認められる。20-2の端部は上方に拡張し逆「く」字状に屈折する。拡張部外面に3条の凹線文を施した後に刻目を直交するように刻んでいる。また、拡張部内面には刺突文が施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられており、施文は工具によるものと思われる。頸部以下の内面はハケメ調整である。20-3は口縁部外面に2条以上の凹線をめぐらせて、肩部外面には列点文に類する施文がなされているが、風化によりはっきりしない。頸部以下の内面はケズリが施されている。20-4の複合口縁の壺である。口縁端部は引き出されたままで平坦面をもたず、複合部の稜はやや斜め下方に突出する。口縁外面の施文はなく、頸部以下の内面はケズリが認められる。草田4期に該当すると考えられる。20-5の底部外面には、綫方向のミガキが認められる。内面は斜め上方に向かうケズリが確認できる。20-6は高坏の坏底部から脚部にかけての破片である。脚部内面には上から下のケズリが確認できる。20-7は器台あるいは高坏の脚の裾部片と思われる。外面に10条の平行沈線をめぐらせており、内面にはケズリが認められる。脚端部の接地面は平坦面を有している。20-8は低脚坏と思われる。脚端部は先細りの断面を呈している。



第20図 1区遺構外出土弥生土器実測図 (S=1/3)

## 4. 2区の遺構と遺物

1区の調査では暗褐色粘質土を覆土にもつ遺構は2層灰色粘質土層から、淡い色調の砂質土を覆土にもつ遺構は3層黒褐色粘質土層からそれぞれ落ち込んでいることを確認しているが、2区では2層上面では遺構が検出できず、2'層上面ですべての遺構を検出した。しかし、南壁セクションを観察すると淡い色調の砂質土を覆土にもつ遺構でも2層灰褐色粘質土層上面から落ち込むものがあることが確認された。上面で遺構を検出した2'層は1区には存在しない層であるが、上面のレベルは標高300cmから280cmであり、これは1区での3層上面のレベルに近い。また、2区での3層上面のレベルは290cmから270cmであり、西に若干下がりながら土層が堆積している様子がみてとれる。さらに1区の3層上面検出遺構及び2区の2'層上面検出遺構がいずれも標高290cm前後で検出されていることなどから次のように考えられる。3層、2'層の順に西下がりに土が堆積した後に、2'層上位から遺構が掘り込まれる。その後、標高290cm前後で削平され2層が堆積した後に、2層上位から遺構が掘り込まれる。このように、1区、2区の遺構が形成されたと思われるが詳細は後述する。

### 土坑

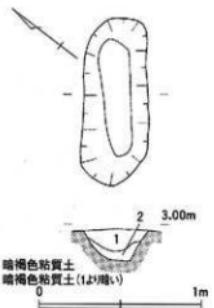
平成7年度調査2区からは2'層灰褐色粘質土層上面で10基余りの土坑を検出した。調査時には検出できなかったが、調査区南壁のセクションを観察すると、2層灰褐色粘質土層上面から掘り込まれた遺構があったことが認められる。

#### SK01(第21図)

B5グリッドから検出したSK01の平面プランは整った形を呈しており、坑底には平坦面を有す。北東を主軸とし長さ104cm、幅40cm、深さ29cmを測る。微量の炭化物を含む暗褐色粘質土の覆土からの出土遺物のなかには、弥生時代中期の壺の口縁部の破片と確認できるもの1点あるが、その他は磨滅した小片である。2層上面精査時にプランが確認できなかつたため2'層上面から落ち込む遺構と考えられる。

#### SK02(第22・23図)

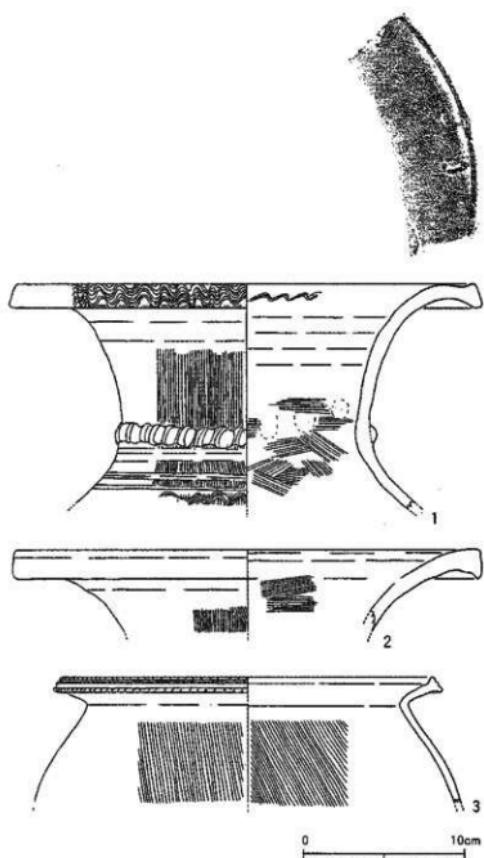
B5グリッドのSK01の30cm南でSK02を検出した。長さ104cm、幅70~80cm、深さ7cmを測り、いびつな平面プランを呈する。坑底は平坦で側壁は緩やかに立ち上がる。覆土は1層淡黄灰褐色砂質土で1区の3層黒褐色粘質土層上面検出遺構の覆土に類似するが、検出面の上位から比較的大きな弥生土器片がまとまって出土しており、これらがSK02に伴う遺物と判断できること、また、2層上面精査時に若干土質の違いを確認していたことなどから、この遺構は2層上面から落ち込んでいたと考えられる。検出面より下位から出土した遺物はいずれも小片であり、弥生時代中期の壺



第21図 2区SK01実測図 (S=1/30)



第22図 2区SK02実測図 (S=1/30)



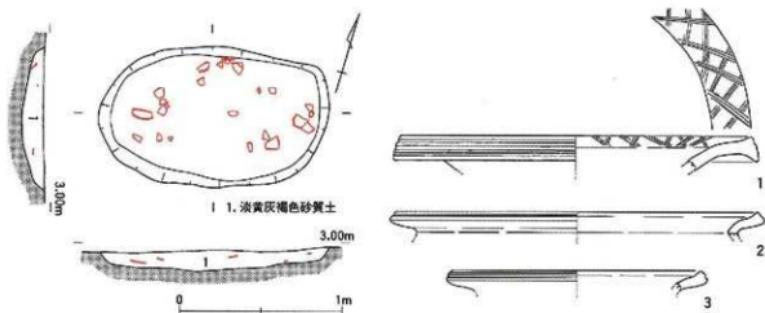
第23図 2区SK02出土弥生土器実測図 (S=1/3)

面に2条の凹線文をめぐらせた後に連続して刻目を施している。頸部は「く」字状に屈曲しているため稜をもつ。肩部外面は斜め方向に荒いハケメで調整されている。全体の大きさと比較し、器肉は薄手である。

#### SK 04 (第24・25図)

B 6グリッドからSK 04を検出した。ほぼ東西方向を主軸とした楕円形の平面プランであり、長さ142cm、幅88cm、深さ13cmを測る。坑底は緩やかに丸く側壁も緩やかに立ち上がる。覆土は1淡黄灰褐色土で2層上面から落ち込んでいたと考えられる遺構である。遺物は他の遺構に比べ若干多く、中期の弥生土器片と思われる破片がビニール袋1袋分出土している。このうち固化可能なものは次に挙げるとおりである。25-1は口径24cmを測る。口縁部が朝顔状に大きく開く大型の広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、平坦面に3条の凹線をめぐらす。口縁部内面には複線斜格子文が施文されている。25-2は口径24.8cmを測る壺である。口縁部は肥厚し、端面に1条の凹線文を施している。

の口縁と確認できるものが1点あるのにとどまる。検出面より上位のこの遺構の出土遺物と判断できるものは次に挙げるとおりである。23-1は口径28.5cmを測る大型の広口壺である。口縁端部は肥厚し、平坦面、口縁部内面、肩部外面には波状文を施している。特に口縁部内面には2列施されている。頸部外面には器面を縱方向にハケで調整後、指頭圧痕突帯を張り付けている。頸部内面は横方向にハケで調整されており、指頭圧痕も認められる。肩部外面は縱方向にハケ調整で、内面は斜め方向のハケ調整が認められる。23-2も口径29cmを測る大型の広口壺である。口縁端部は下方へ拡張するが上方への拡張は認められない。端部の平坦面はヨコナデで調整されている。口縁外面はヨコナデで調整されており、肩部以下は縱方向のハケメが認められる。口縁内面は横方向にハケで調整後ナデされている。23-3は口径が23cmの壺である。口縁端部は上下に拡張し、端



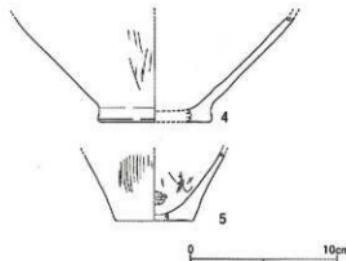
第24図 2区SK04実測図 (S=1/30)

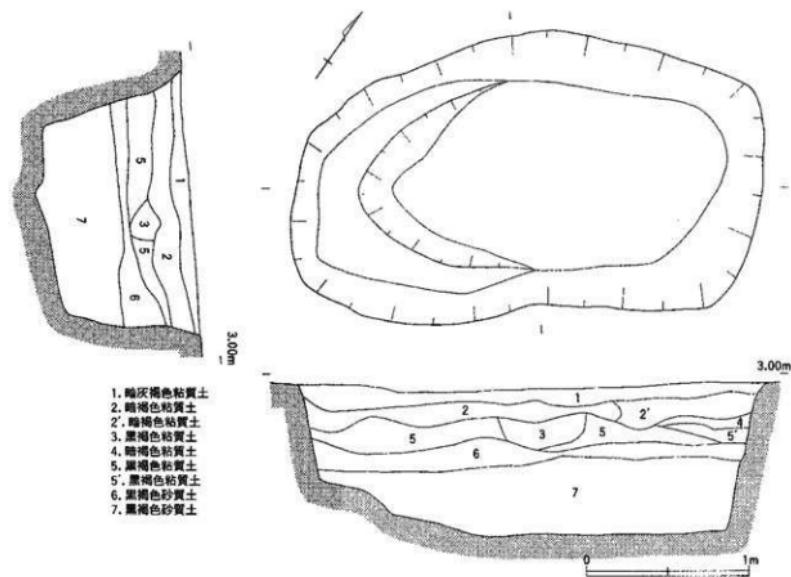
内外面ともヨコナデで調整されており、頸部内面は「く」字状に屈曲するため後をもつ。25-3は口径17cmを測る壺である。口縁部は肥厚しやや内傾気味に上部にのみ拡張し端面に2条の凹線文をめぐらせている。25-4は底径7.8cmを測る底部である。器壁がやや内弯して立ち上がった後に、胸部にかけて大きく開く。外面は底面付近まで縱方向にミガキが認められる。25-5は底径5.2cmの底部である。器壁は底面から胸部にかけて単調に立ち上がる。外面はミガキ、内面はケズリで調整されている。

#### SK 05 (第26・27・28図)

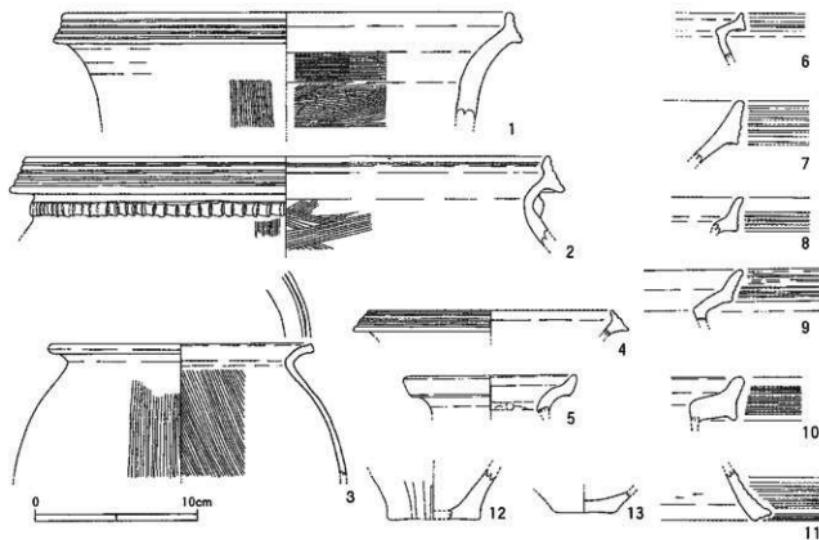
B6、B7グリッドからSK 05を検出した。長さ288cm、幅170cm、深さ90cmを測る大型の遺構であり、ほぼ北東を主軸とする。平面プランの規模のみならず、削平を受け底の一部がかろうじて浅く残っている他の遺構に比べ、格段に深く掘り込まれているのがこの遺構の特徴である。2層上面から掘り込まれ、南北の半分は2段壠になり坑底から約30cmの高さに段を有し、その段からは坑底に向かい緩やかな傾斜で落ち込み、北東半分のはば平坦な坑底に達する。その他の側壁はすべて坑底から急な角度で立ち上がる。形態、規模は平成6年度調査区で検出したSK 02、SK 03と類似するが、弥生土器片を中心とした出土遺物が多いこと、また、一度に埋められた形跡がないなどから性格を異にしている部分が多い。覆土は9層に分層でき、各層から遺物が出土しているが、弥生土器片がその大半を占めている。いずれも小片で詳細は不明であるが土器片も若干混じっているようである。27-1は大型の壺と思われる。口縁端部は上下に拡張し、端面に4条の凹線文をめぐらせている。頸部外面は縱方向にハケ調整が認められる。口縁内面はヨコナデで整えられ、残存する頸部上半は横方向にハケメが認められる。下半も同じ原体を使用しているようであるが、かなり荒いハケメでケズリ調整の意図が感じられる。27-2の口縁端部は上下に内傾して拡張する。頸部外面に指頭圧痕状の突起を張り付けており、それ以下に縱方向のハケメが認められる。内面は斜め方向にハケメが確認でき

第25図 2区SK04出土弥生土器実測図 (S=1/3)





第26図 2区SK05実測図 (S=1/30)



第27図 2区SK05出土弥生土器実測図 (S=1/3)

る。27-3は単純口縁の壺である。口縁部は強く外反し端部は曲面を有する。端部付近の内面には1条の浅い凹線が施されている。頸部以下は内外面ともハケメが認められるが、頸部付近ではナデ消されている。器肉は全体的に薄い。27-4は壺の口縁部と思われる。口縁端部は上方に拡張され、平坦面及び内面はナデで整えられている。頸部以下の内面の残存は少ないが、ケズリが施されているようである。27-11は高壺の脚の裾部である。外面に6条、脚端部に2条の平行沈線を施している。内面は横方向のケズリが認められるが、端部付近ではナデされている。28-1は土師器の壺の口縁部である。SK05の遺物で唯一土師器と確認できるものである。

#### SK06 (第29・30図)

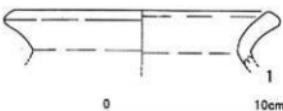
A7グリッドからB7グリッドにかけてSK06を検出した。長径145cm、短径123cmのいびつな楕円形プランを呈している。削平を受けたものと考えられ、検出面から坑底までの深さは10cm程度である。側壁は小さな凹凸のある坑底から緩やかに立ち上がる。

2層上面精査時に確認できなかったため、2'層上面から落ち込む構造と考えられる。覆土

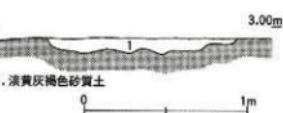
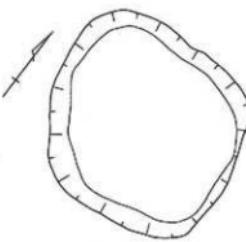
は1淡黄灰褐色砂質土のみである。出土遺物は少なく、弥生土器片の数点の出土にとどまる。

30-1は広口壺の口縁部の破片である。端部は肥厚し、平坦面に3条の凹線文をめぐらせた後に、中央の凹線を境に上下2段に分けて連続刻目文を施している。内外面ともヨコナデで整えられ、内面には調整後波状文が施されている。

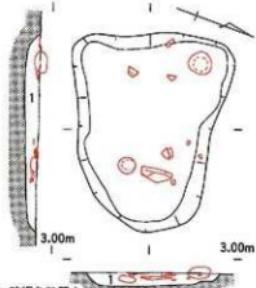
#### SK07 (第31・32・33図)



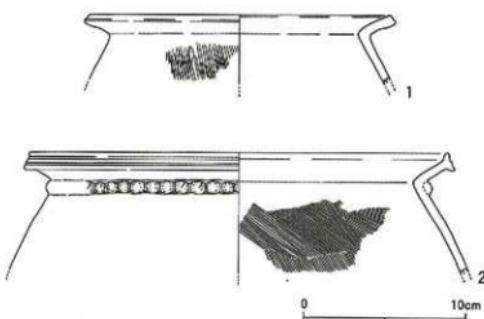
第28図 2区SK05出土土師器実測図 (S=1/3)



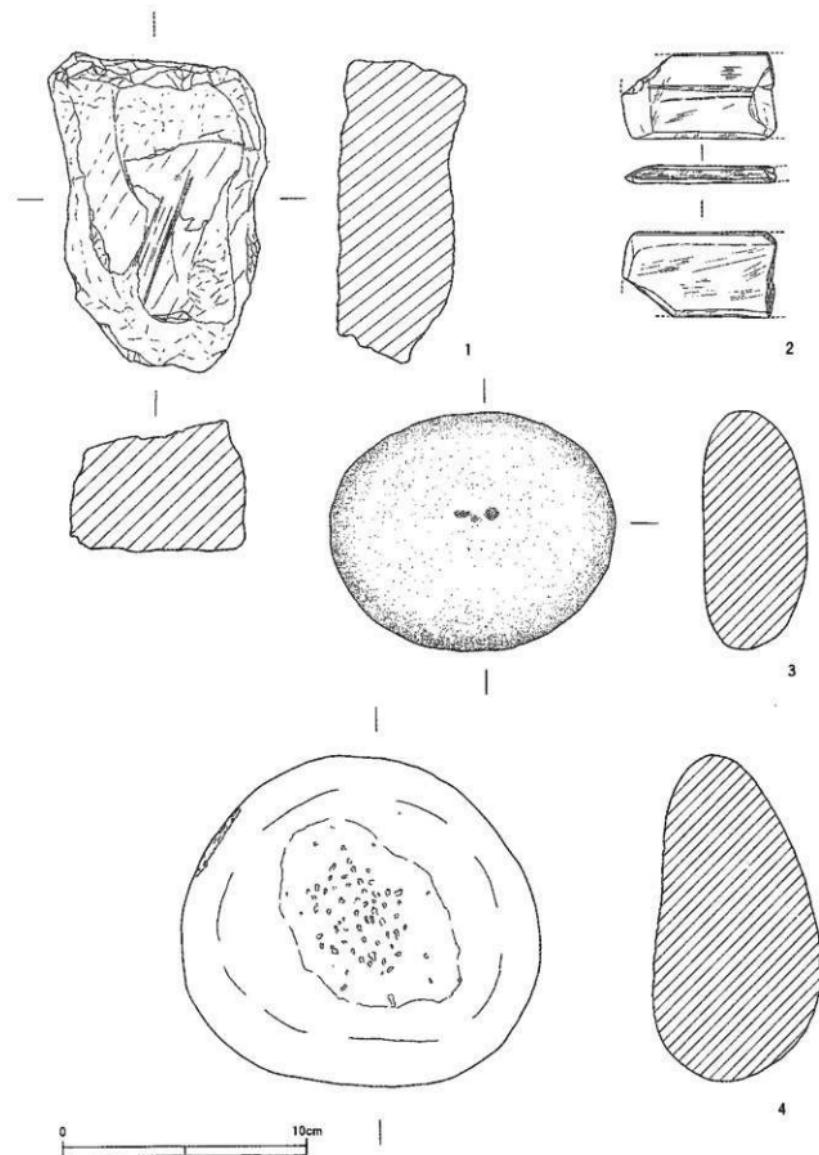
第30図 2区SK06出土弥生土器実測図 (S=1/30)



第31図 2区SK07実測図 (S=1/30)



第32図 2区SK07出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第33図 2SK07出土石器実測図 (S=1/2)

A 7 グリッドから SK 07 を検出した。北東を主軸とし二等辺三角形の角を丸くしたような平面プランを呈する。長さ 122 cm、幅 80 cm から 100 cm、深さ 9 cm を測る。覆土の 1 暗褐色粘質土から弥生土器片や石器が出土している。32-1 の口縁端部は上方に若干拡張する。頭部以下の外面にはハケメが認められる。32-2 は口縁端部が上下に拡張し、頭部内面は「く」字状に屈曲し稜をもつ。頭部外面に張り付けられた突帯の凹部に右手の親指の爪の跡が確認できることから、凸部は指でつまみ上げて形成されたようである。33-1 は凝灰岩の大型砥石の破片である。磨面には 3 条の磨き筋が残る。33-2 は磨製で小型の扁平片刃石斧である。33-3 は敲石もしくは磨石と思われる。扁平な円盤の片面及び縁に使い込んで磨耗した痕跡が残る。33-4 は台石と思われる。片面の中心付近に集中して使用した跡が残る。

#### SK 08 (第34・35図)

B 7 グリッドから SK 08 を検出した。一部は後世のビットにより切られて

いる。ほぼ南北を主

軸とし、長さ 107

cm、幅 85 cm、深さ

10 cm を測る。覆土

は炭化物を含む 1 淡

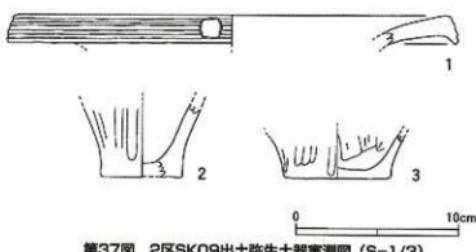
灰褐色砂質土、2 淡

黄灰褐色砂質土、3

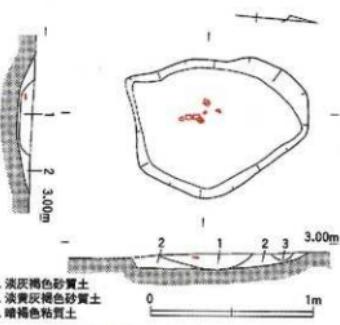
暗褐色粘質土であり、1 淡灰褐色砂質土から弥生土器片が数点出土した。35-1 は鉢状の口縁を持つ高壇と思われる。水平に引き出された鉢部の上面には斜め方向に沈線が連続して施されている。

#### SK 09 (第36・37図)

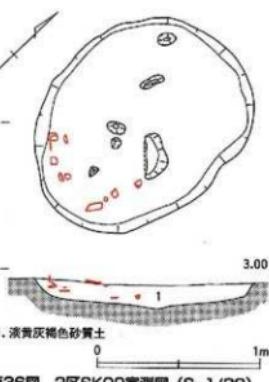
B 7 グリッドから SK 09 を検出した。ほぼ南北を主軸とし長さ 144 cm、幅 115 cm、深さ 12 cm を測る。側壁の傾斜は緩やかで、坑底は中央に向かい若干レベルが下がっていく。覆土は 1 淡黄褐色砂質土のみで、弥生土器片数点が出土した。37-1 は口径 26.5 cm を測る広口壺の口縁部である。口縁端部は下方にのみ拡張し、端面には 3 条の凹線文が施され、円形浮文が貼り付けられている。器表は内外面ともナデで整えられている。37-2・3



第37図 2区SK09出土弥生土器実測図 (S=1/3)



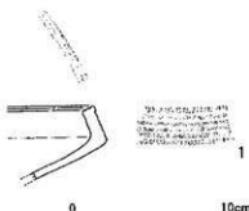
第34図 2区SK08実測図 (S=1/30)



第36図 2区SK09実測図 (S=1/30)

は底部の破片である。両者とも外面はミガキで調整され、37-3は内面にケズリが認められる。

#### SK 10 (第11・38図)

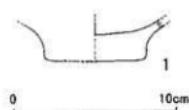


第38図 2区SK10出土弥生土器  
実測図 (S=1/3)

A 7グリッドからSK 10を検出した。精査時に確認できず、調査区の南壁沿いに設けたサブトレーンチで大部分壊してしまった。南壁に2層上面から落ち込み調査区外に続く遺構が確認できるが、この遺構とは違う遺構と思われる。遺物は弥生土器片が数点出土している。38-1は高坏の口縁部である。やや内傾気味に立ち上がり、端部に2条、側面に5条の凹線文をめぐらせた後に上下端に刻目を施している。内面はナデ、外面はミガキで調整されている。

#### ピット

#### P 3 (第11・39図)



第39図 2区P3出土弥生  
土器実測図 (S=1/3)

B 5グリッドの2'層上面でP 3を検出した。直径50cmの円形の平面プランである。深さは5cmを測り、覆土は暗褐色粘質土である。坑底でさらに小さな直径15cmと10cmのピットを有する。遺物は弥生土器片の小片が2点出土した。39-1の器壁は底面からほぼ垂直に立ち上がった後に胴部にかけて大きく開いている。器壁に比べ底部の器肉は厚い。

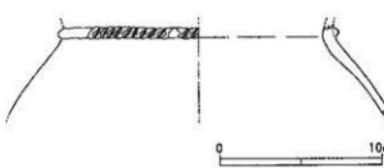
#### P 5 (第11・40図)

2'層上面から落ち込むP 5をB 5グリッドから検出した。半月状の平面プランで長径が27cmのピットである。深さは4cmと浅く、暗褐色土を覆土にもつ。磨滅した土器のごく小片とともに40-1が出土した。口縁端部は肥厚し上方へ若干拡張している。端面に2状の凹線文を施している。

#### P 8 (第11・41図)

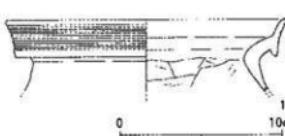
B 5グリッドのP 8は長径40cm、深さ8cmの暗褐色粘質土を覆土に持つピットであり、2'層上面から掘り込まれている。弥生土器の小片が10数点出土した。41-1は甕の頸部である。貼り付けた突帯には、ヘラ状工具あるいは貝殻により連続して刻目が施されている。

#### P15 (第11・42図)



第40図 2区P5出土弥生土器実測図 (S=1/3)

B 7グリッドでP 15を検出した。直径33cm、深さ20cmのピットである。暗褐色粘質土を覆土にもち土器片が数点出土した。42-1の口縁部外面には6条の沈線がめぐらされている。複合部の後は下方に突出している。



第41図 2区P8出土弥生土器実測図 (S=1/3)

## 5. 2区遺構外の出土遺物

平成7年度調査2区の遺構外の遺物の出土状況は1区と同様であるが、出土量は増加しコンテナ4箱分に上る。堆積層ごとに遺物をみると、1暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）及び1'暗灰褐色粘質土層は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器などを包含し、2縁灰褐色粘質土層は松本Ⅲ-2を上限とする弥生土器のみを包含している。この2層の出土遺物の大半が中期のものであること、また、弥生中期の遺物を出土する遺構が多いことなどから、2区の2'縁灰褐色粘質土層上面で検出した遺構は、弥生時代中期から後期にかけての遺構である可能性が高い。おそらく、2層で覆われた遺構は弥生時代中期のもので、2層上面から落ち込み弥生土器のみを出土する遺構は弥生時代後期の遺構と考えられる。このことは、1区の3黑色粘質土層上面検出遺構でも同様であると思われる。しかし、2区のSK05のように大半弥生土器を出土しながら、土師器片が1点出土するという事例があるため、2層上面から落ち込む遺構は、弥生土器のみを出土していても、他の時期の遺物の絶対数が少ないため、偶然に弥生土器しか入り込まなかった可能性が指摘でき、全体的に時代が下がることも考えられる。

### 弥生土器（第43・44・45図）

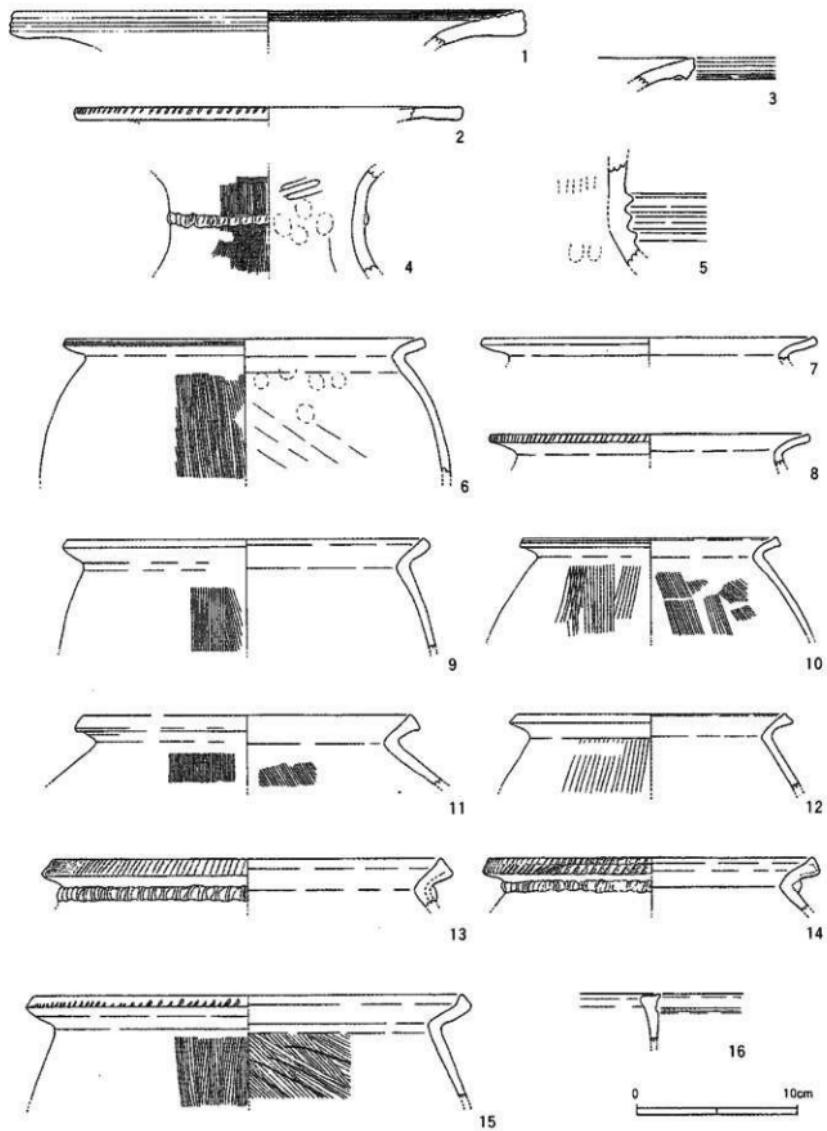
43-1は口縁端面に2条の凹線文をめぐらせており、口縁内面に同心円の6条の沈線を施している。43-4は外面をハケメ調整後、突帯を貼り付け指でつまみ上げながら凸部を形成したものと考えられ、凹部には爪の跡のような痕跡が残っている。43-5は頸部外面に断面が三角形の突帯を3本めぐらせている。突帯間には強いナデが認められる。

壺は中期から後期のものが出土するが、中期のものが量的に多い。実測図で示せば43-6などが最も古く、44-23などが最も新しい。つまり、松本Ⅲ-2様式から草田4期のものが出土するが、松本Ⅲ-2から松本Ⅳ-2様式のものが多く出土する。出土遺物の量から考えると白枝荒神遺跡の中核の時期は弥生時代中期後半と考えられるが、平成5年度調査区では弥生時代終末から古墳時代初めの遺物も出土することから、平成7年度調査1区以西とは下限の時期が異なる。

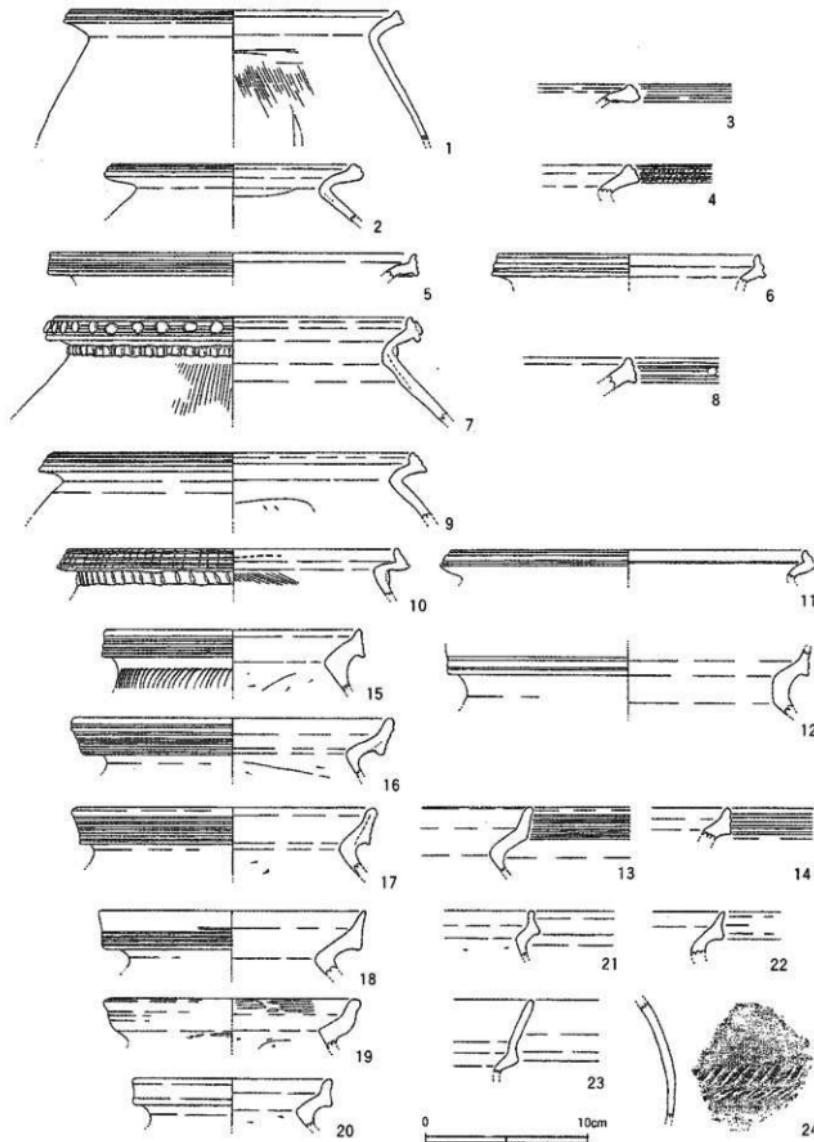
壺、壺以外の器種の出土は少なく45-18の高壺、45-20の低脚壺、45-21の注口土器などにとどまるが、特筆すべきものとして、45-22の分銅形土製品が挙げられる。瀬戸内地方を中心には分布する土製品であるが、出雲市内の遺跡では矢野遺跡、古志本郷遺跡に次ぎ3例目の出土であり、正蓮寺周辺遺跡で4例目の出土が確認されている。平成8年度調査区でも3点出土しており、白枝荒神遺跡全体の出土数は4点である。

### 土師器、陶磁器（第46図）

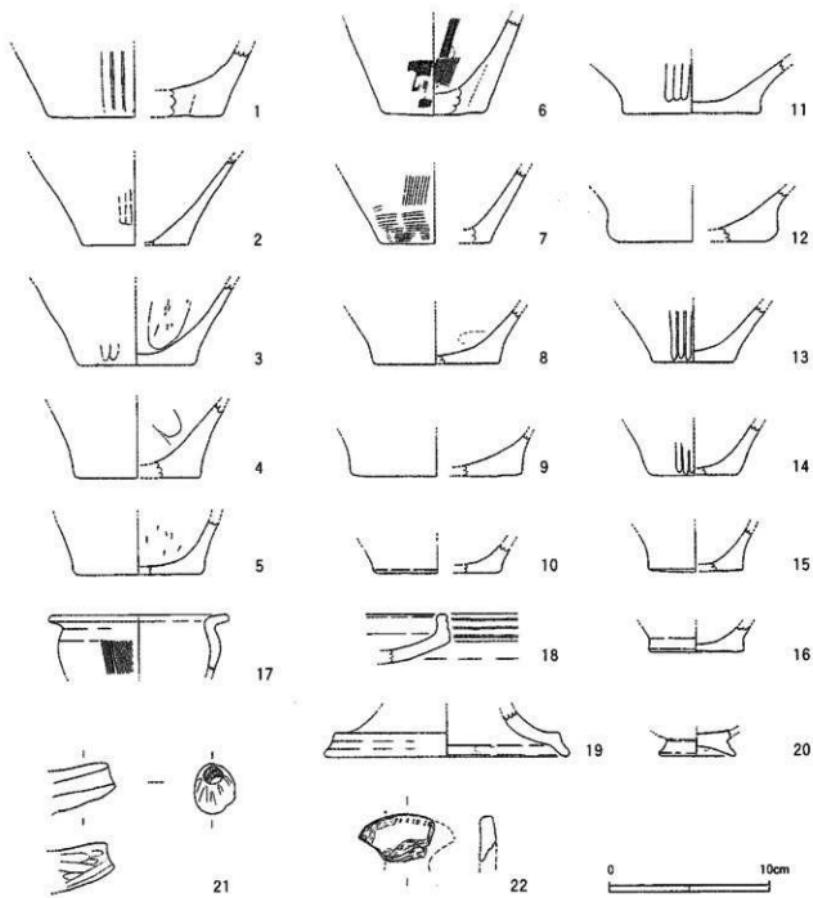
1層及び1'層からは、弥生土器の他に数は少ないが須恵器、土師器、陶磁器などが出土している。46-9は土師器の壺の口縁部と思われる。器肉は厚く、端部はさらにやや肥厚する。内面は細いヘラミガキが認められる。46-7の壺は中世のものと思われる土師器である。平底で底部から口縁部にかけて広がり、器肉は薄くなっていく。46-1の磁器の内面には染め付けが認められるが、絵柄は不明である。口縁端部が一部残っているが、屈曲が認められるため、単純な円形ではないようである。46-3は高台の付く青磁の碗と思われる。46-4・5・6は唐津焼きの底部と思われる。いずれも高台は削り出されているようである。



第43図 2区遺構外出土弥生土器実測図1 (S=1/3)



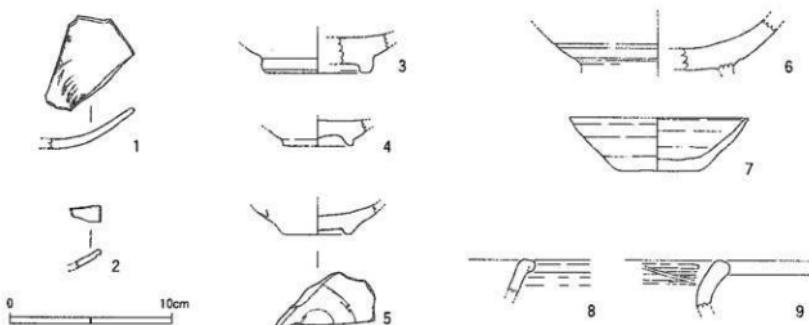
第44図 2区遺構外出土劣生土器実測図2 (S=1/3)



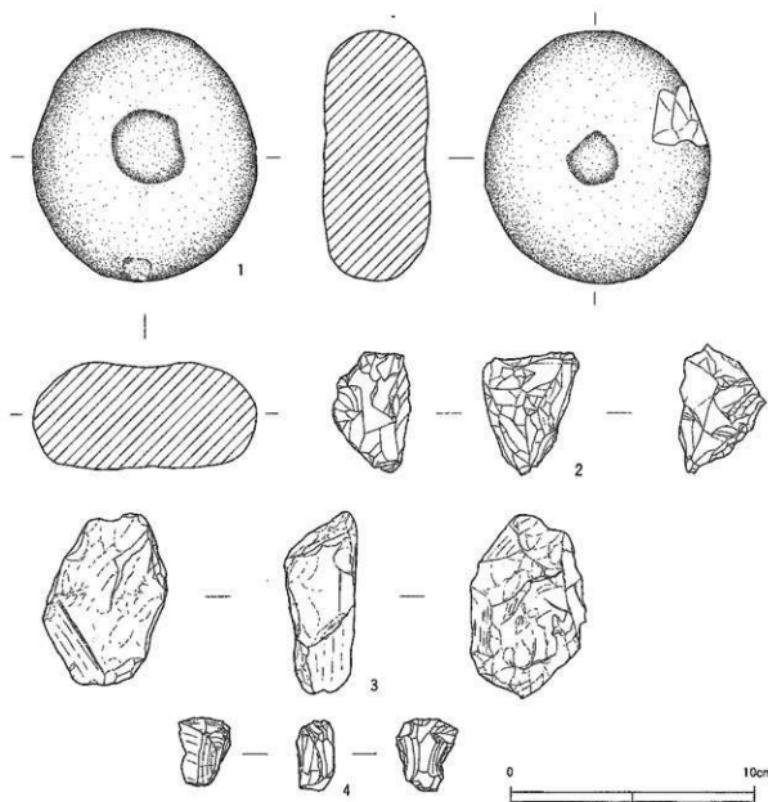
第45図 2区遺構外出土弥生土器実測図3 (S=1/3)

#### 石器（第47図）

1層、1'層、2層からは土器以外に量は少ないが石器も出土している。47-1は硬質の安山岩の凹石である。丸く扁平な石の両面中央に凹みが認められる。また、片面には磨った痕跡、縁には敷いた痕跡が認められ、磨石や敲石などに転用されていたものと考えられる。47-2は質の悪い碧玉である。47-3は砥石で、2箇所に研磨面を残している。流紋岩の風化したものを使用している。47-4は桂乳石と思われ一部に剥離面が残っている。色は乳白色であるが一部茶色がかっている。第47図に挙げるもの以外に、黒曜石の剥片なども数点出土している。



第46図 2区遺構外出土土器・陶器実測図 (S=1/3)

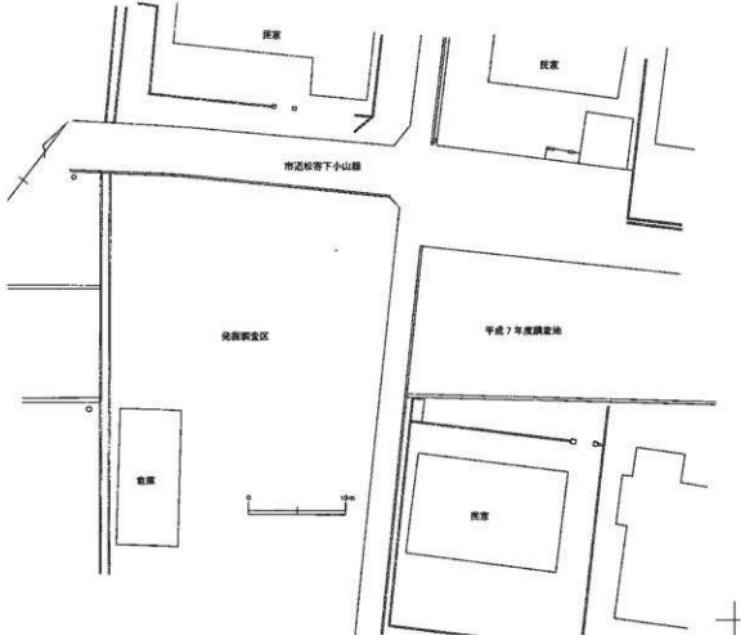


第47図 2区遺構外出土石器実測図 (S=1/2)

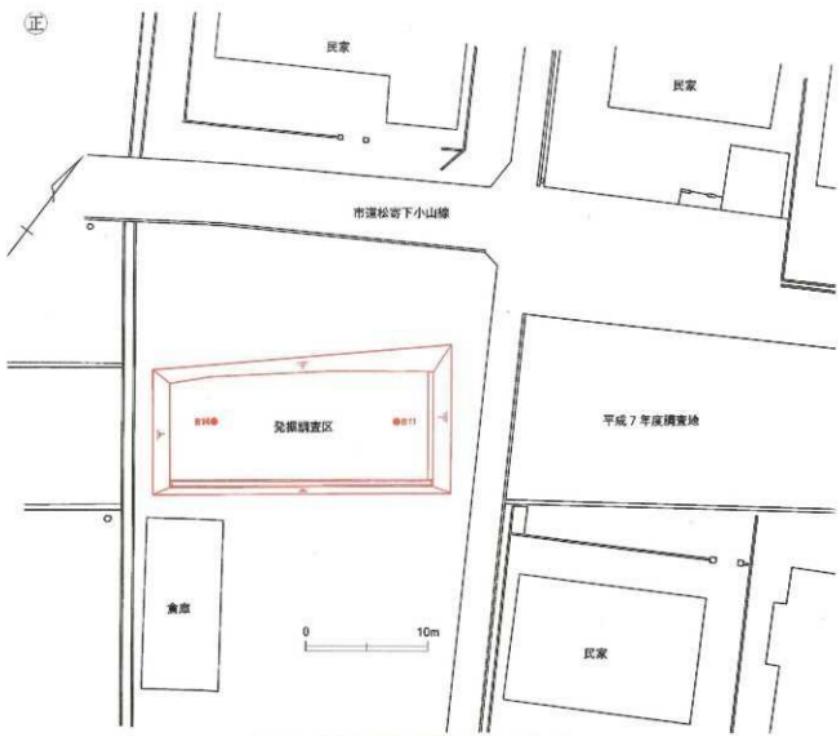
## 第6章 平成8年度調査

### 1. 平成8年度調査の概要

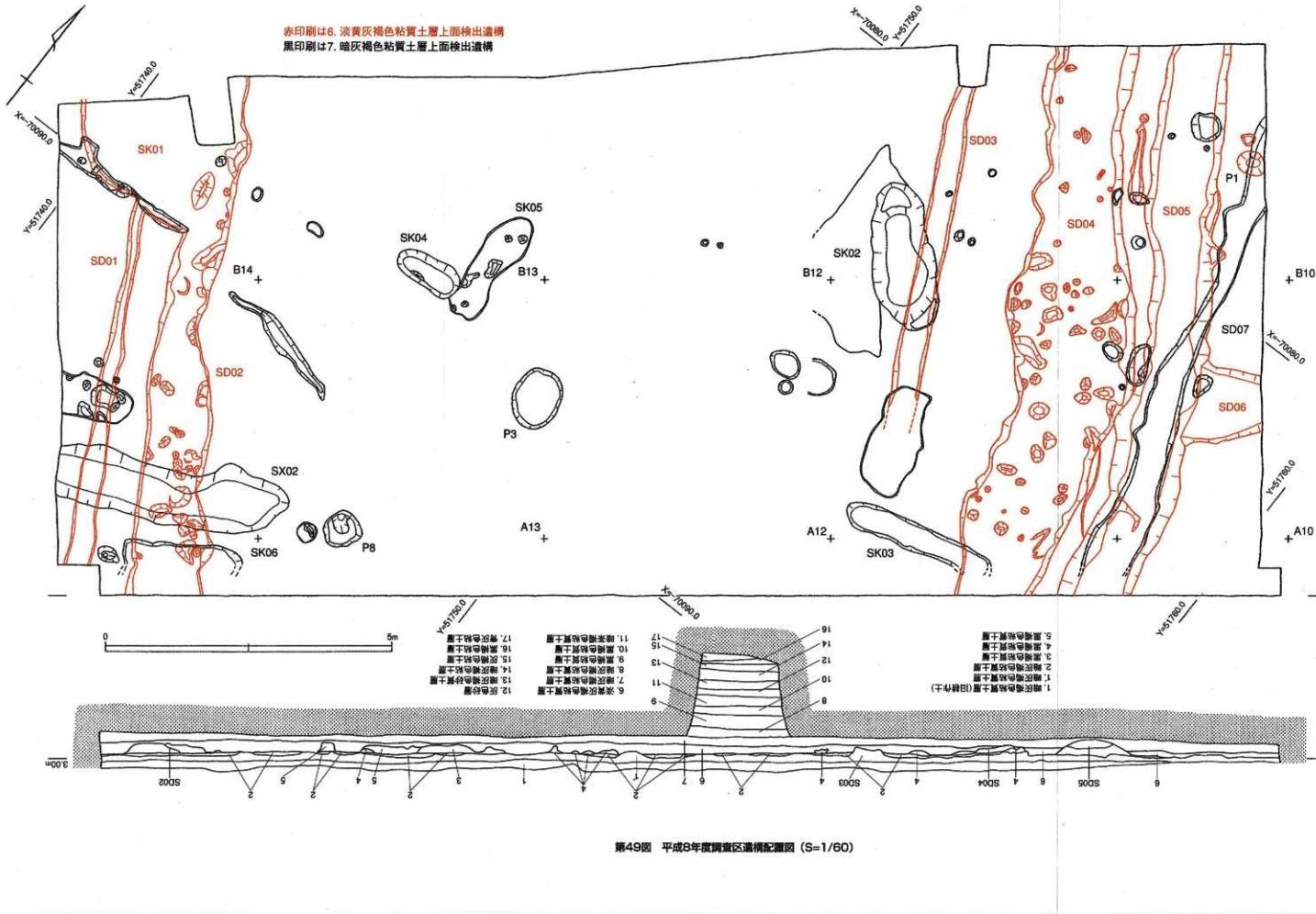
平成6年度調査地と平成7年度調査地の間に位置する東西30m×南北12mの360m<sup>2</sup>の調査地を平成8年度に実施した。この調査地は平成7年度調査予定であったが、民家の移築が遅れたために平成8年度に繰り越された。したがって、基準杭の設置も平成7年度調査地と同時に設定したため、調査区の中心線Bラインは1区、2区のBラインの延長線上にあり、5m間隔での設置の仕方も共通性をもたせている。宅地のための造成土は表上から約80cmあったため、これについては重機により掘削した。その後、調査区の南壁に沿ってサブトレーナーを設定し、層序を確認しながら徐々に手掘により一層ずつ遺構の検出に努めた。2区の西の調査区であるが、道路により分断されており、また、調査時期が異なるためすべてを対応させることはできなかったが、2区1層と1暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）、2区1'層と1'暗灰褐色粘質土層、2区9層と15灰褐色粘土層、2区10層と16黒褐色粘土層、2区11層と17青灰色粘土層は同一の土層と考えられる。遺構については、6淡黄灰褐色粘質土層及び7暗灰褐色粘質土層の上面から土坑、溝状遺構、ビットなどを検出した。7層上面からは弥生時代中期の土坑墓と思われる遺構を標高270cmで検出している。これにより、当時の生活面が標高3m前後であったことが窺える。平成8年度調査区全体での出土遺物の量は、弥生時代中期の土器片を中心にコンテナ8箱分であり、平成7年度調査区より増える傾向にあった。



第48図 平成8年度調査区位図 (S=1/400)



第48図 平成8年度調査区位置図 (S=1/400)



第49図 平成8年度調査区遺構配置図 (S=1/60)

## 2. 遺構と遺物

### 土坑

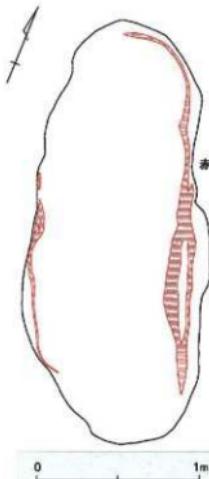
6淡黄灰褐色粘質土層上面で1基、7暗灰褐色粘質土層上面で8基の土坑を検出した。

### SK01 (第49・50図)

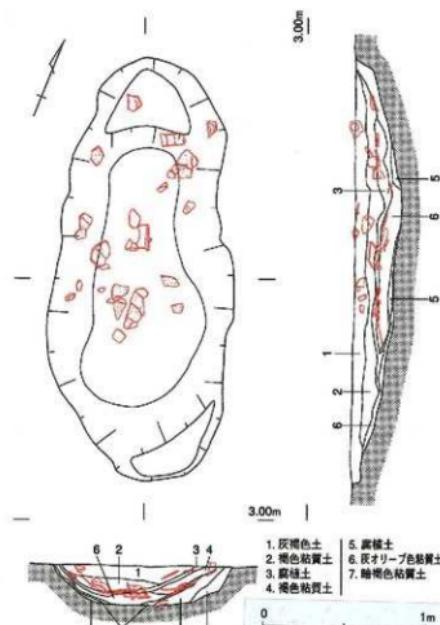
B14グリッドでSK01を検出した。ほぼ円形の平面プランと思われるが遺構の一部は調査区外に統いており、また、SD01・02に切られているため詳細は不明である。深さは8cmと浅く、覆土は暗灰褐色粘質土である。坑底は平坦であるが、柱穴などは検出されず、堅穴住居跡である可能性は低い。

覆土からは弥生土器と思われる小片が出土している。50-1の口縁端部は上方に拡張し、端面には1条の凹線をめぐらせている。器肉は全体的に薄い。50-2の口縁は頭部から単純に折り曲げられており、端部は若干上方に引き出されている。50-3の口縁端部は肥厚し、端面には2条の凹線が施し、凹線の間には刻目を施す。

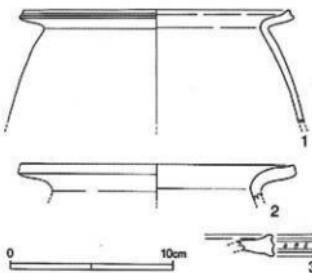
### SK02 (第51~54図)



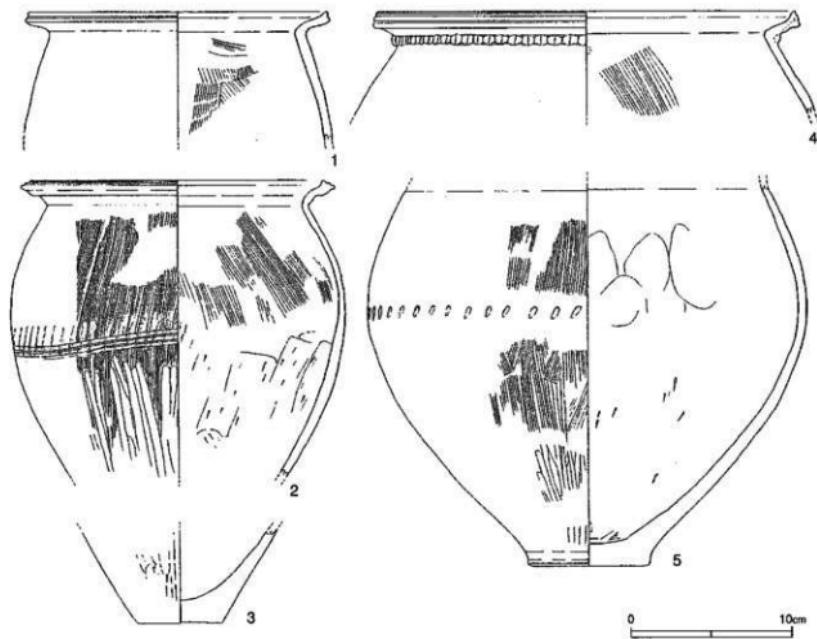
第51図 SK02平面プラン実測図 (S=1/30)



第52図 SK02実測図 (S=1/30)



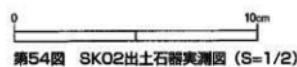
第50図 SK01出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第53図 SK02出土弥生土器実測図 (S=1/3)

A 11 グリッド及びB 11 グリッドの  
7 暗灰褐色粘質土層上面でSK02を検出した。北西を軸とし長さ261cm、幅  
110cm、深さ28cmを測り、土坑墓と  
考えられる。検出時に、とぎれてはいる  
が腐植土が平面プランを縁取るよう確認された。この腐植土は遺構内で層状に  
堆積している。覆土は1灰褐色土、2褐色  
粘質土、3腐植土、4褐色粘質土、5  
腐植土、6灰オリーブ色粘質土、7暗褐  
色粘質土である。

平面プランで確認された腐植土は3と  
5であり、坑底に草や葉などが敷かれた  
可能性も考えられる。覆土中から中期の  
弥生土器と石器が出土している。53-



第54図 SK02出土石器実測図 (S=1/2)

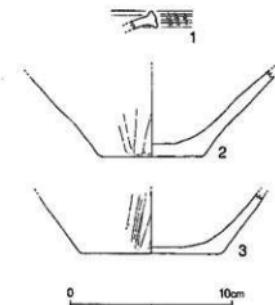
1の口縁端部は上方に拡張し、端面には1条の凹線をめぐらせている。頸部外面は強くナデつけられている。53-2の口縁端部は上方に内傾気味に引き出されている。口縁外面は、作製時に端面より折り返されたと思われる粘土が雑にナデつけられており、ふくらみをもつ。胴部最大径あたりの外面には原体を引きずりながら施文されたと思われる列点文が施され、それ以下は縱方向のミガキが認められる。胴部内面上半には斜め方向のハケメ、下半にはケズリが認められ、ケズリの後にハケメで調整されている。53-5の胴部外面には最大径あたりで列点文がめぐらされている。また、底部付近ではミガキが認められる。胴部内面上半には指頭圧痕が残り、下半はケズリが確認できる。54-1は凝灰質頁岩あるいは泥岩の砥石である。4面に使用痕が残る。

#### SK 03 (第49・55図)

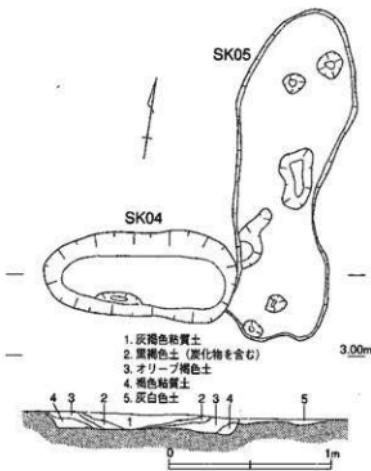
A 11グリッドの南壁際の7暗灰褐色粘質土層上面でSK 03を検出した。ほぼ東西を主軸としている。一部サブトレレンチにより壊してしまったが、規模を知る上で問題はなく長さ約280cm、幅48cm、深さ6cmを測る細長い遺構である。灰褐色砂質土を覆土に持ち、弥生土器を出土する。55-1の口縁端部は上下に拡張し、端面には2条の凹線を施文後、連続的に刻目をめぐらせている。55-2は底径6.2cmを測る底部である。外面には縱方向のミガキが認められ、内面は風化が著しいがケズリで調整されているようである。55-3は8.6cmの底径を測り、比較的大きめの底面である。外面は縱方向のミガキが確認できる。

#### SK 04・05 (第56図)

A 13グリッド及びB 13グリッドの7暗灰褐色粘質土上面でSK 04・05を検出した。切り合い関係が認められ、SK 04がSK 05を切っている。SK 04はほぼ東西を主軸とする梢円形の平面プランである。検出規模は長さ120cm、幅52cm、深さ9cmを測り、坑底は平坦である。覆土は1灰褐色粘質土、炭化物を含む2黒褐色土、3オリーブ褐色土、4褐色粘質土、5灰白色土である。2黒褐色土は腐植土であり、遺構内に覆土が堆積したときに形成されたものと思われ、後述のSX 02などにも観察された。覆土からは2本の突窓をめぐらせた広口壺の頸部など、弥生土器の小片と思われる土器片が出土している。一方SK 05はほぼ南北を主軸とする長さ208cm、幅50cm~75cm、深さ2cm~4cmの浅い遺構である。覆土は5灰白色土のみで、出土遺物はなかった。



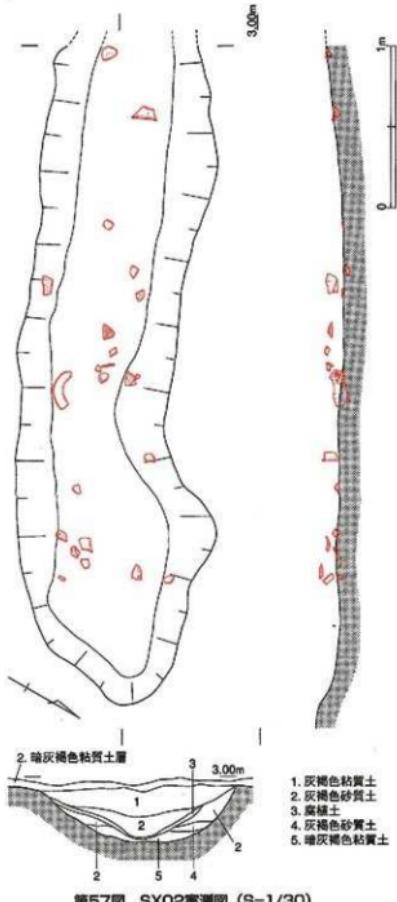
第55図 SK 03出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第56図 SK 04・05実測図 (S=1/30)

### SK 06 (第49図)

調査区南西の隅で検出したSK 06は北東を主軸とし、長さ205cm、深さ7cmを測る。サブトレンド掘削時に検出できず半分程度破壊してしまい正確な幅は分からないが、調査区南壁でこの遺構の断面が確認できることから80cmと推定する。覆土の灰褐色砂質土からは弥生土器と思われる底部の破片などが出土している。平成7年度調査区2区のSK 07に類似する平面プランを呈するものと思われる。



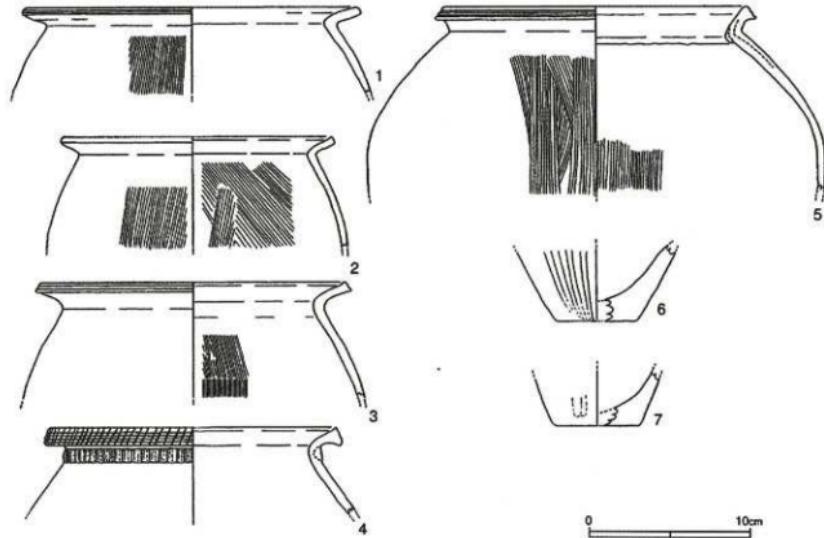
第57図 SX02実測図 (S=1/30)

### SX 02 (第57・58図)

A 14グリッドの7暗灰褐色粘質土上面でSX 02を検出したが、調査区西壁の断面の確認により6端黄灰褐色粘質土層上面から落ち込んでいることを確認した。北東を主軸とした細長い遺構であり、調査区外に一部遺構が続いている。検出規模は長さ405cm以上、幅88cm~109cm、深さ19cmを測るが、深さについては西壁の観察により31cmであることを確認している。坑底は平坦で、側壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は1灰褐色粘質土、2灰褐色砂質土、3腐植土、4灰褐色砂質土、5暗灰褐色粘質土であるが、これらからは、他の遺構より比較的大きめの弥生時代中期の土器片が出土している。この遺構でもSK 04などと同じように腐植土が観察された。平面プラン検出時に、遺構の内側を縁取るようライオン状に観察されたが、遺構内では4灰褐色砂質土や5暗灰褐色粘質土などを切り込んで層状に薄く堆積していた。この堆積状況からSX 02は一度掘り返された後に、腐植層が形成されたものと思われる。

出土遺物は弥生土器片のみである。58-1は口縁端面に1条の凹線がめぐらされている。頸部は「く」字状に屈曲し、頸部以下の内面は斜め方向の強いハケ調整が認められ、外面は縦方向のハケ調整である。58-3の口縁端部は上方にやや内傾気味に引き出されている。頸部の屈曲は比較的緩やかである。

58-2は口縁端部が上方に若干引き出されている。口縁端面に施文は認められない。頸部は「く」字状に屈曲し、頸部以下の内面は斜め方向の強いハケ調整が認められ、外面は縦方向のハケ調整である。58-3の口縁端部は上方にやや内傾気味に引き出されている。頸部の屈曲は比較的緩やかである。



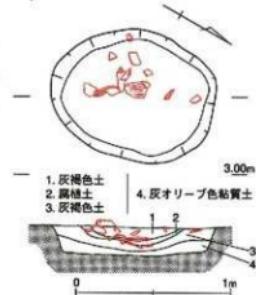
第58図 SX02出土弥生土器実測図 (S=1/3)

ある。頸部以下の内面にはハケメが観察できる。58-4は口縁端部が肥厚し、端面に2条の凹線がめぐらされた後に連続的に刻目を施している。また、頸部外面には突帯が貼り付けられ、突帯上に施文後、上方は強くナデつけられて、器表になじまされている。58-5の口縁端部は下方にのみ若干引き出されている。端面には2条の凹線がめぐらされている。頸部内面に段があり、口縁部形成時のものと思われる。

### P 3 (第59・60図)

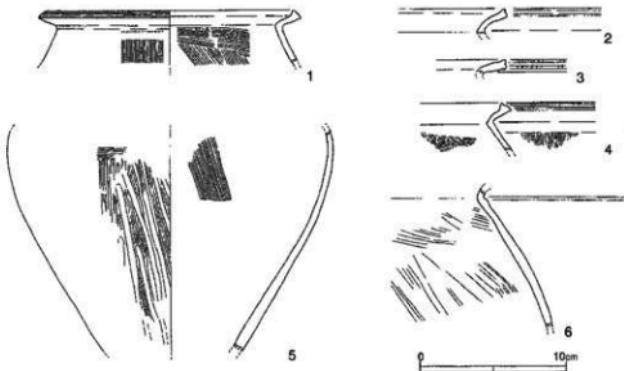
A 12・A 13グリッドの7暗灰褐色粘質土層上面でP 3を検出した。規模的に土坑として取り扱った方が適當と思われる所以ここで取り上げる。長径106cm、短径85cm、深さ18cmを測り、椭円形の平面プランを呈する。坑底は平坦で側壁の立ち上がりは急角度である。覆土は、1灰褐色土、2腐植土、3灰褐色土、4灰オリーブ色粘質土であり、2腐植土は平面プランでも確認された。

出土遺物は中期の弥生土器片のみで、他の遺構に比べ比較的大きめのものが出土した。60-1の口縁端部は上方へのみやや内傾気味に拡張する。端面には2条の凹線がめぐらされている。頸部は銳「く」字状に屈折し内面に稜をもつ。頸部以下の外面は縦方向のハケメが認められ、内面は頸部付近で横方向、それ以下は斜め方向のハケ調整である。器肉は全体的に薄い。60-2の口縁端部は上方への若干の拡張が認められる。端面には1条の凹線文が施される。口縁部の器肉は薄いが、頸部以下では



第59図 P 3実測図 (S=1/30)

やや厚くなるようである。60-3は口縁端部が上方へ若干拡張する。端面には1条の凹線がめぐらされた後に、連続的に刻目が施されている。60-4の口縁端部は上方にやや内傾気味に拡張する。端面に2条の凹線がめぐらされている。頭部が鋭く「く」字状に屈折するため内面に稜をもつ。頭部以下の外面には縦方向、内面には斜め方向のハケメが認められる。60-5は甕の胴部片である。外面には縦方向のハケメが認められ、ハケ調整の後に、荒く縦方向に細いヘラ状工具によるミガキ調整がなされている。内面には煤が付着している。60-6は甕の頭部から胴部にかけての破片である。外面は風化が著しく調整は不明であるが、煤の付着が認められる。内面は頭部付近で一部横方向、それ以下では斜め方向のハケメが観察できる。



第60図 P3出土弥生土器実測図 (S=1/3)

#### 溝状遺構

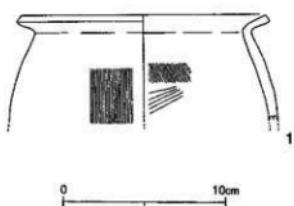
6 淡黄灰褐色粘質土層上面で6条の、7暗灰褐色粘質土層上面で1条の溝状遺構を検出した。前者はSD 01~06であり、後者はSD 07である。SD 06以外はいずれもほぼ北西方向を主軸としている。

#### SD 01 (第61図)

A 14・B 14グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でSD 01を検出した。調査区の南壁から北壁までの820cm間にわたり確認し、幅16cm~46cm、深さ5cm程度と浅い。南壁付近と北壁付近では、底の標高差が5cmあり、北壁付近の底の方が高い。覆土は1灰褐色粘質土のみで、ここから、弥生土器と思われる磨滅した土器片が若干出土するが、平面プラン精査時にSK 01を切った形で検出されており、時期については即断できないが、比較的新しい遺構という印象を受けた。

#### SD 02 (第61・62図)

A 14・B 14グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でSD 02を検出した。主軸はSD 01とほぼ平行しており、SK 01を切っている。調査区の南壁から北壁までの920cm間にわたり検出しており、幅56cm~140cm、深さ16cm程度を測る。南壁付近と北壁付近の底の標高差は8cmで、北壁付近の底の方が高い。覆土は、1、2とも淡黄灰褐色粘質土ブロックを含む黒褐色粘質土であるが、2黒褐色粘質土の方が1黒褐色粘質土よりブロックを密に含んでいる。この覆土からは弥生土器と思われる磨滅した小片が出土するが、図化可能なものは次に挙げる1点のみである。62-1の口縁端部は若干



第62図 SD02出土弥生土器実測図 (S=1/3)

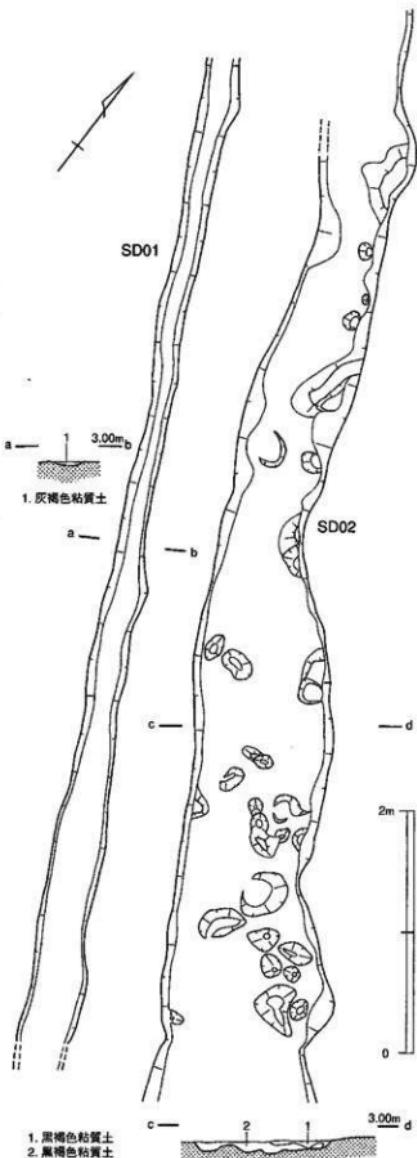
肥厚し、端面に施文は認められない。頸部の屈曲はあまり鋭くなく、頸部以下の中には縦方向、内面には斜め方向のハケメが認められる。内外面ともに煤が付着している。

#### SD 03 (第63・64図)

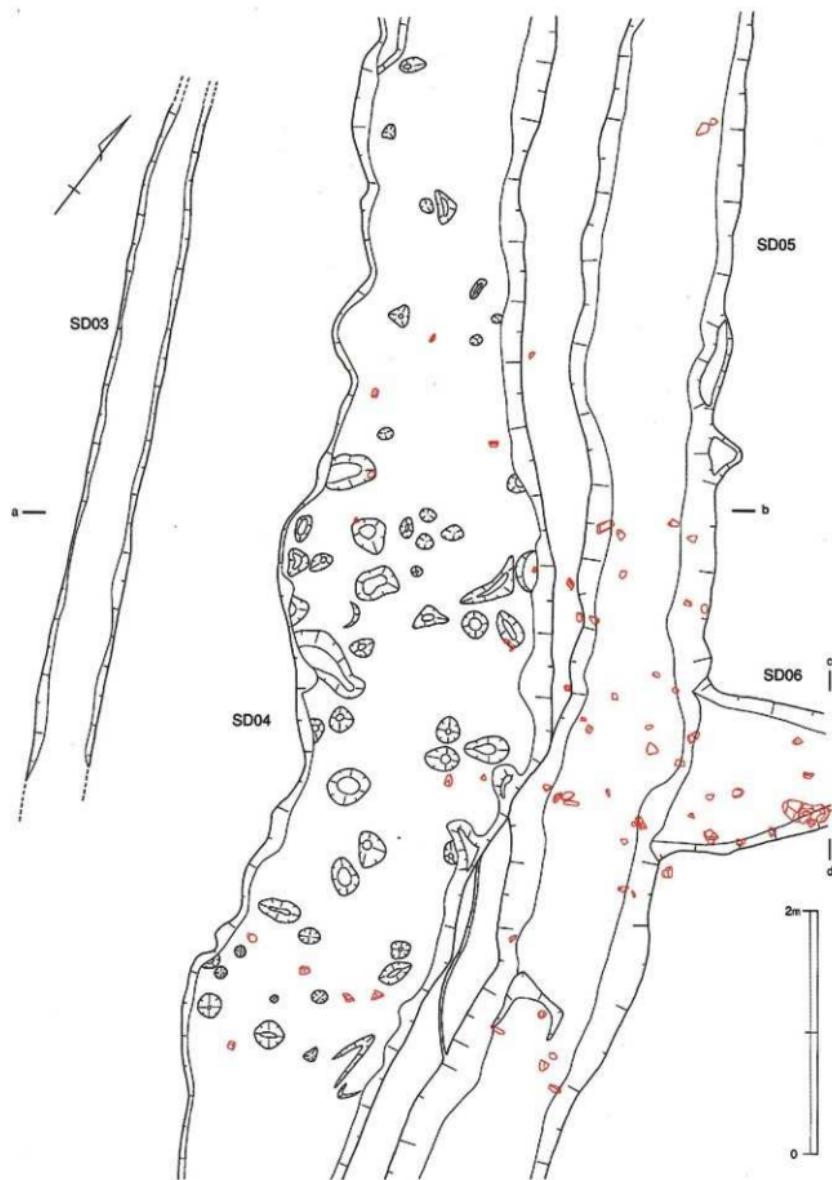
A 11・B 11グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でSD 03を検出した。調査区の北壁から570cm間にわたり確認し、幅46cm、深さ4cmを測り、底の標高差はない。1'暗灰褐色粘質土層がSD 03に入り込んでおり、弥生土器と思われる土器の小片が出土するが、この遺構は昭和30年代の耕作によるものと思われる。

#### SD 04 (第63～65図)

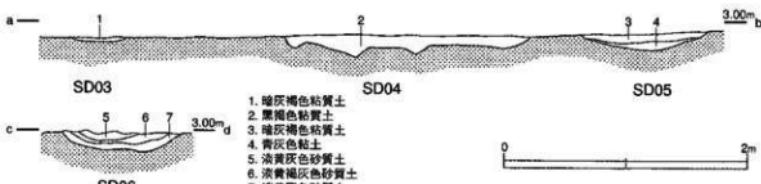
A 11・B 11グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でSD 04を検出した。調査区の北壁から南壁までの970cm間にわたり確認し、幅120cm～210cm、深さ10cm程度であり、主軸がやや湾曲した平面プランを呈す。南壁付近と北壁付近では底の標高差が10cm程度あり、南壁付近の方が高い。また、底には多数の凹凸がある。覆土は淡黄褐色粘質土ブロックを含む多く含む2黒褐色粘質土である。この覆土から弥生土器の小片が出土する。65-1は壺の口縁端部である。頸部からほぼ垂直に立ち上がり、端面は水平になるとされる。頸部から胴部にかけては張るものと思われる。調整は風化により不明である。65-2の口縁端部は上方に若干拡張する。頸部は「く」字形に屈折し、外面には突帶



第61図 SD01・02実測図 (S=1/40)



第63図 SD03~06実測図 (S=1/40)



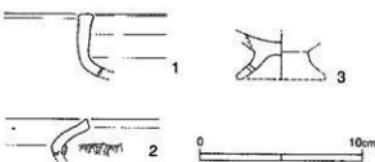
第64図 SD03~06断面実測図 (S=1/40)

が貼り付けられている。65-3は低脚壺である。

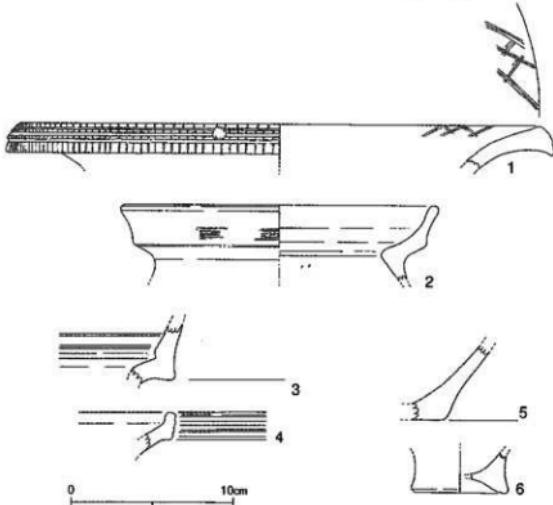
壺部内面はナデられており、脚部には1ヶ所に穿孔が認められる。

#### SD 05 (第63・64・66図)

A 10・B 10グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でSD 05を検出した。一部をSD 04に切られ、SD 06を直交する形で切っている。調査区の北壁から南壁までの970cm間にわたり確認し、幅100cm～130cm、深さ10cm～18cmを測り、主軸がやや湾曲した平面プランを呈しており、SD 04と類似している。南壁付近と北壁付近では底の標高差が6cmあり、北壁付近の方が高い。覆土は淡黄灰褐色粘質土をマープル状に含む3暗灰褐色粘質土、淡黄灰褐色砂を含む4青灰色粘土

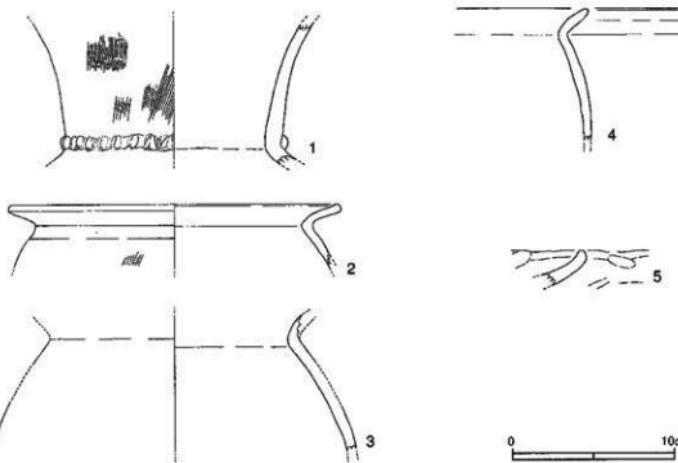


第65図 SD04出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第66図 SD05出土弥生土器実測図 (S=1/3)

である。この覆土から弥生土器片が出土する。66-1は広口壺の口縁部片である。口縁端部は下方に拡張している。口縁端面には3条の凹線がめぐらされており、連続的に刻目が施されている。この土器片は10cm程度の残存であるが、1ヶ所に円形浮文が貼り付けられている。また、口縁内面には斜格子文が施されている。66-2は複合口縁の壺である。口縁外面には風化により明確ではないが5条以上の沈線が確認できる。頸部以下の内面にはケズリが認められる。66-3の口縁部は、外面に施文は観察できないが、内面に2条の沈線が認められる。頸部から口縁部の境の内面は、強くナデつけら

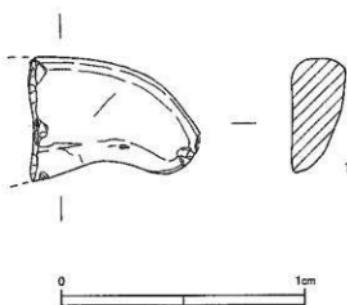


第67図 SD06出土弥生土器実測図 (S=1/3)

れているためくびれを有する。66-4の口縁部外面には3条の凹線がめぐらされている。66-6は上げ底の底部である。底壁は中心部にかけてごく薄くなっている。

#### SD 06 (第63・64・67・68図)

A 10グリッドの6淡黄灰褐色粘質土上面でSD 06を検出した。SD 05と同様に6淡黄灰褐色粘質土上面から掘り込まれている様子が調査区の東壁で確認できた。東壁からSD 05に切られるまでの150cm間の検出にとどまり、また、SD 05以西にこの遺構のつながりが確認できなかったため、溝状遺構であ



第68図 SD06出土石器実測図 (S=1/3)

るかどうか不明である。他の溝状遺構とは主軸の方向が異なっており、幅94cm~144cm、深さ10cmを測り、底もほぼ平坦である。覆土は5淡黄灰色砂質土、6淡黄褐色砂質土、5よりやや色調が暗い7淡黄灰色砂質土となっており、弥生土器片及び石器が出土した。67-1は壺の頸部片である。外面にはハケメが認められる。貼り付け突帯の凹部は工具により削り取られて形成されていると思われる。完全に削り取られてもとの器表が観察できる部分もある。67-2の口縁端部は若干肥厚する。頸部は「く」字状に屈折し、内面に縫を持つ。器肉は全体的に薄い。67-3の頸部から口縁部にかけては単純に外反する。内面はナデ調整であるが、外面は器表が剥落しており詳細は不明である。67-4の口縁部は端部にかけて先細りになっており、内外面とも横方向のナデで調整されている。67-5は浅い壺状の土器の口縁部と思われる。口縁端部付近の内外面はナデされている。以上の土器は弥生中期のものと考えられるが、他の遺構の中期の土器と比べ若干古いようである。68-1は用途不明であるが石器と思われる。縁に磨ったような使用痕と思われる痕跡が認められる。

### SD 07 (第49図)

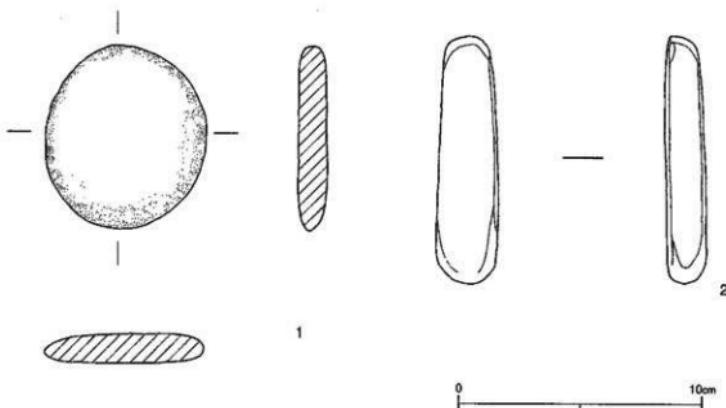
A 10・B 10グリッドの7暗灰褐色粘質土層上面でSD 07を検出した。調査区の東壁で7暗灰褐色粘質土層上面から落ち込んでいる様子を確認したが、水が流れていったような痕跡は観察できなかつた。7暗灰褐色粘質土層上面から落ち込む溝状遺構はSD 07のみであるため、平成8年度調査区の溝状遺構の中では最も古いものと言える。ほぼ北北西を主軸としており、SD 04・SD 05などとは方向を異にしている。東壁から南壁までの760cmにわたり検出したが、大部分はSD 05により搅乱を受けていた。幅26cm~92cm、深さ2cm~6cmを測るが、底の標高差はほとんどない。覆土は上から灰褐色粘質土、淡黄灰色砂質土の2層の堆積が認められる。これらの覆土からの出土遺物は少なく、弥生土器片と思われる土器片が数点出土しているが、時期及び器種を確認できるものは、弥生時代中期の甕の口縁部片1点のみである。

### ピット

平成8年度調査区では、遺構の底で検出したものを除いて20基程度のピットを確認している。これらは大小様々な規模及び形態を示しており、規格性のあるものはなく、建物の柱穴であるかどうかなど詳細は不明である。遺物を伴うものも少なく、先述したP 3を除いて、6淡黄灰褐色粘質土層上面で検出したP 1から石器、7暗灰褐色粘質土層上面で検出したP 4~8から土器片が出土しているだけである。P 8から弥生時代中期の甕の口縁部片と確認できるものが2点出土しているが、他のピットからは時期及び器種不明の小片の1~3点の出土にとどまっている。

### P 1 (第49・69図)

B 10グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でP 1を検出した。長径50cm、短径40cm椭円形の平面プランを呈し、深さは12cmである。覆土から、時期及び器種不明の土器片1点の他に石器が2点出土した。69-1は安山岩の磨石と思われる。薄い円盤状の砾の片面に研磨面が残っている。69-2は安山岩の砥石である。断面はほぼ長方形であり、4面に研ぎ面が残っている。



第69図 P1出土石器実測図 (S=1/2)

### 3. 遺構外の出土遺物

平成8年度調査区の遺構外の出土遺物は弥生時代中期の土器片を中心にコンテナ4箱分出土している。遺物を出土するのは6淡黄灰褐色粘質土層以上で、7暗灰褐色粘質土層以下からは全く遺物が出土しない。弥生土器以外の出土遺物として、石器、須恵器などが挙げられるがごく少量の出土にとどまる。須恵器などの出土がみられるのは5黒褐色粘質土層以上の層で、6淡黄灰褐色粘質土層からは、土器としては弥生土器のみの出土となる。これらの出土状況から、7暗灰褐色粘質土層上面で検出された遺構は弥生時代中期から後期にかけてのものである可能性が高い。

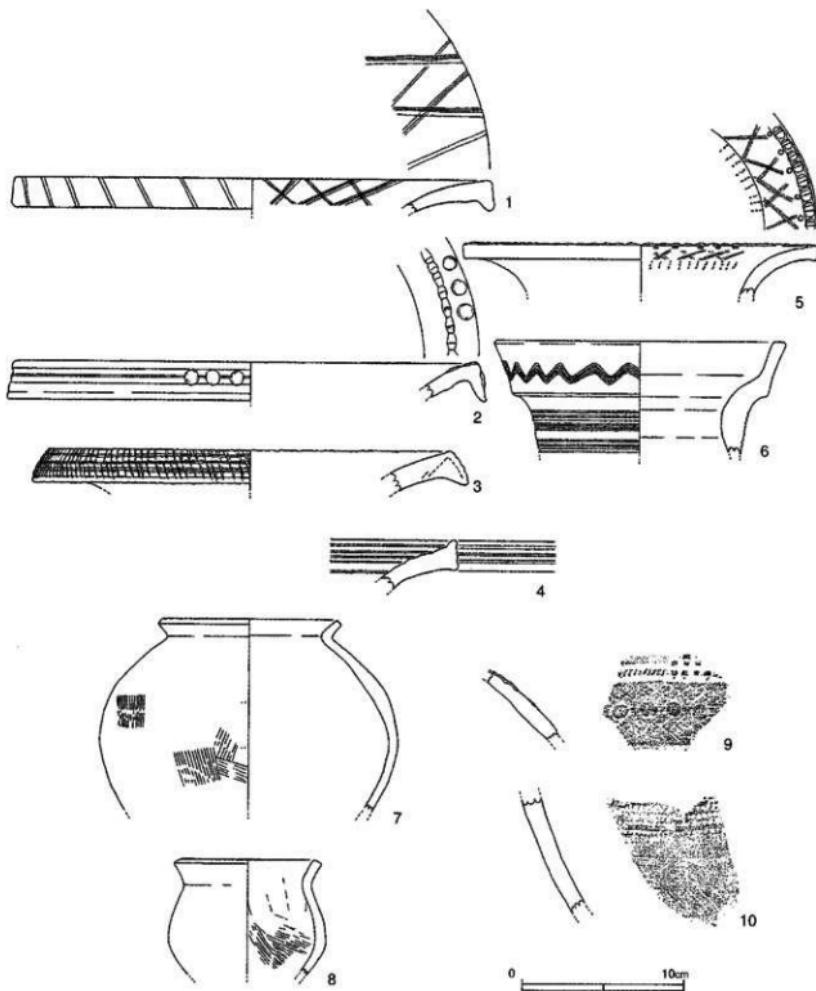
#### 弥生土器（第70～72図）

70-1～5は広口壺である。70-1の口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁端面には2本1組で連続的に斜行文を施し、口縁内面には複合斜格子文を施している。70-2は下方にのみ大きく拡張する。口縁端面には3条の凹線をめぐらせ、3個の円形浮文を貼り付けており、これらの上方の口縁部内面の端部付近にも同様に円形浮文を3個貼り付けている。また、内側の同心円上には突帯めぐらせている。70-3は口縁端部が下方に拡張し、端面に4条の凹線文を施した後に、上下2段に連続的に刻目を入れている。70-4は口縁端部が上下に拡張する。端面には3条の凹線をめぐらせており、口縁内面にも同心円上に凹線を施している。70-5の口縁端部は若干肥厚する。口縁内面の端部付近には突帯を貼り付け、その内側には連続的な穿孔、斜格子文、列点文を施している。70-6は複合口縁の壺である。口縁部外面には波状文を施しており、頸部外面には8条以上沈線をめぐらせている。70-7は口縁が単純に短く外反する壺である。胴部外面にはハケメが認められる。70-8は小型の壺と思われる。口縁部が単純に外反し、胴部内面にはハケメが認められる。70-9は装飾性に富む壺の上胴部片と思われる。破片上部に2条の凹線をめぐらせ、凹線間に刻目を入れた後に棒状浮文を施している。また、その下位には斜格子を入れた後に一部を帶状にナデ消し、その上に円形浮文を連続的に施文している。70-10は壺の頸部片と思われる。破片上部には4段の列点文、中央には6条の沈線をめぐらせている。羽状文あるいは綾杉文の一部と思われる施文が認められる。

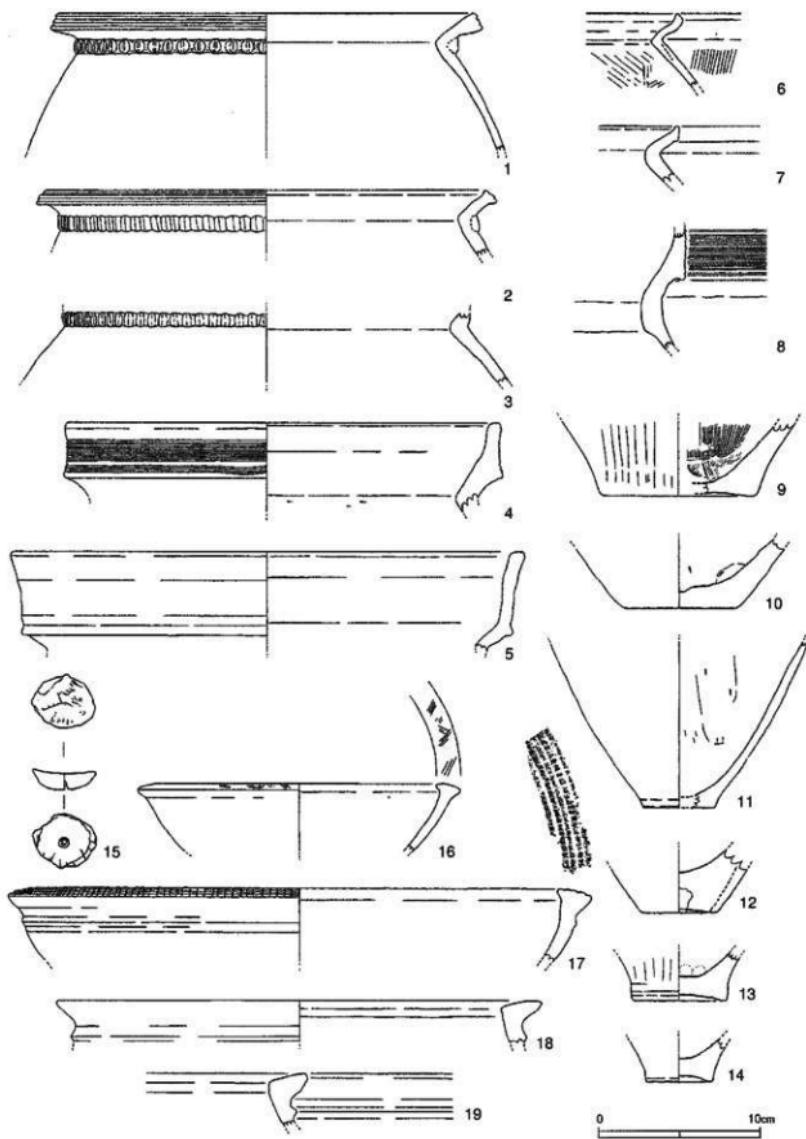
71-1～8は壺である。中期のものを中心に出土しているが、71-4・5・8など後期のものも出土している。71-1は口縁端部が肥厚し、端面に2条の凹線をめぐらせている。また、頸部の外面には突帯を貼り付けている。内面及び頸部の外面以下には煤の付着がみられる。71-2の口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の凹線がめぐらされている。頸部外面には突帯が貼り付けられている。71-4は、口縁部外面に10条以上の沈線が施されている。複合部の稜は斜め下方に突出している。頸部以下の内面には横方向のケズリが認められる。71-5は口縁端部は平坦部を有し、複合部の稜は斜め下方に突出している。大型の壺であるため草田5期に相当するものと考えられ、平成8年度調査区出土の弥生土器の中では最も新しいものである。71-6の口縁端部は上方に若干内傾気味につまみ上げられ拡張している。器壁は全体的に薄い。71-8の口縁部外面には12条以上の沈線がめぐらされている。複合部の稜は斜め下方に突出している。頸部以下の内面はケズリが認められる。頸部がやや長く壺の可能性もある。

底部は丸底のものは出土せず、71-9～12などの平底、あるいは、71-13・14などのような上げ底のものの出土にとどまっている。

高坏の出土は少ないが71-15~17などが挙げられる。71-15は円盤充填法によって作られた高坏底部の詰め土盤である。外面のほぼ中央に径6mm、深さ5mmの穴がある。71-16は口縁端部がほぼ水平方向に拡張し、端面に斜格子文が施されている。71-17も口縁端部が水平方向に拡張する。口縁端面には4条の凹線をめぐらせた後に、連続的に刻目を入れている。また、外面には削り出しによる突帯が施されている。71-18・19は鉢と思われる。口縁部は「く」字状に折り曲げられ、削り出しによる突帯を有する。71-18・19は同一個体の可能性もある。

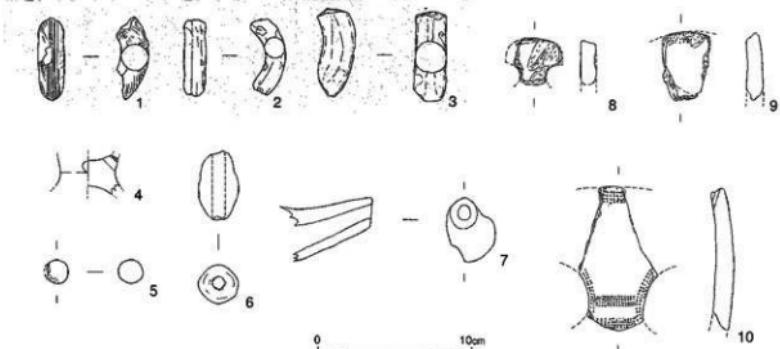


第70図 遺構外出土弥生土器実測図1 (S=1/3)



第71図 透構外出土弥生土器実測図2 (S=1/3)

72-1~3は把手である。断面はいずれもほぼ円形である。72-1は中央部縦方向に5条の沈線が施され、その脇にはハケメが認められる。72-2は縦方向にヘラ状工具による調整痕のようなものが見受けられる。72-3は明確な施文及び調整は認められない。72-4は蓋あるいは低脚壺である。残存片では1ヶ所に穿孔がある。72-5は穿孔のない球形土製品である。72-6は管状鉗錘形土錐である。8-1の浮子とともに漁撈にかかる生産活動を示す資料であるが、出土数は2点と少ない。72-7は注口である。縦方向にヘラによる調整痕らしきものが残っている。72-8~10は分銅形土製品である。72-8は小型のもので、表面は剥落しており、施文など詳細は不明である。裏面は平坦である。72-9はやや大型のものと思われる。一部に表面を縁取る列点文が認められる。断面は反りを呈している。72-10も大型のものである。表面を縁取りように列点文が施され、上端部から裏面に貫通する穿孔が2箇所に認められる。断面は反りを呈している。平成7年度調査2区遺構外出土の45-22とあわせて計4点が出土している。



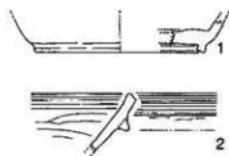
第72図 遺構外出土弥生土器実測図3 (S=1/3)

#### 須恵器（第73図）

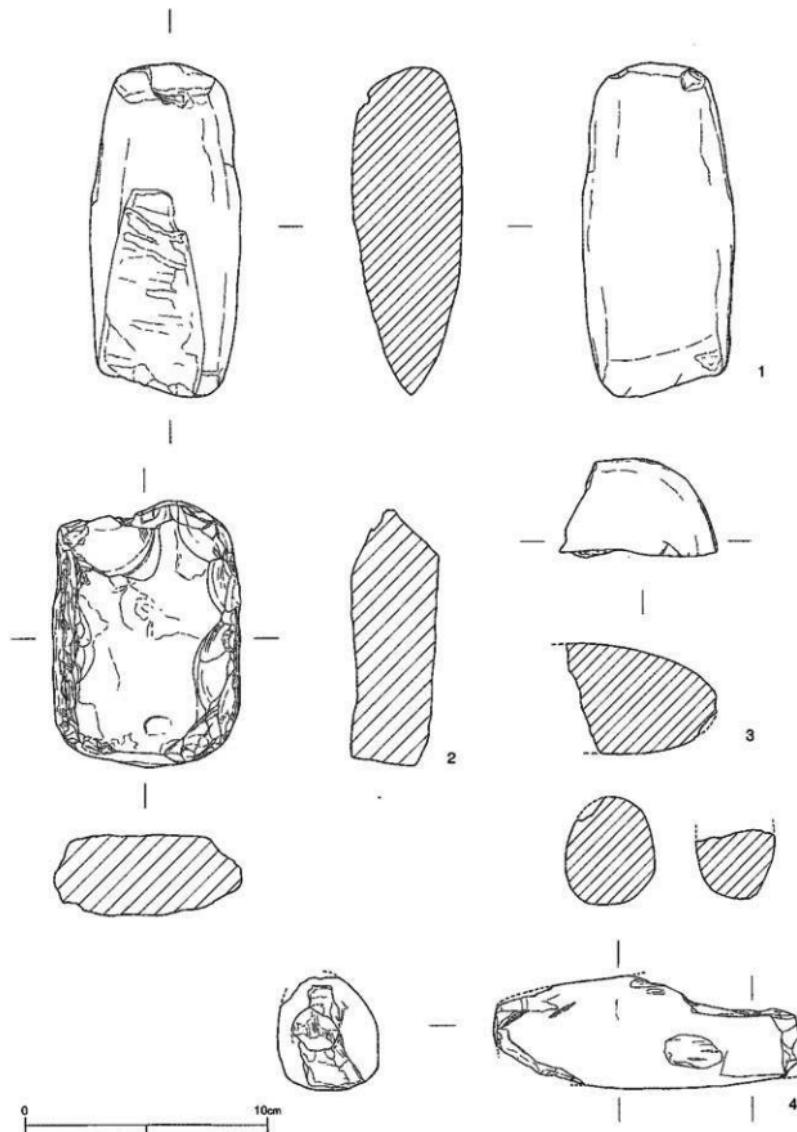
5 黒褐色粘質土層以上の層からは点数はごく少ないが須恵器も出土する。73-1は高台付の壺である。高台の端部は1条の溝を有しており、断面は凹状になっている。壺部は内外面とも回転ナデで調整されている。73-2は器種不明であるが口縁部片と思われる。内外面とも回転ナデが認められる。

#### 石器（第74・75図）

6 淡黄灰褐色粘質土層以上からは石器及び剥片も出土している。74-1は安山岩の太型蛤刃石斧である。柄の装着部には段を有している。74-2は器種は不明であるが石器の未製品である。葉理構造をもつシルト岩であり、縁に打ち欠いた痕跡が多数残っている。74-3は石英安山岩の敲石である。もとは楕円の扁平な石であったと思われる。一部に敲いた使用痕が残っている。74-4は刃の部分が欠けているが緑色片岩の乳棒状石斧と思われる。柄の装着用の段をわずかに有す

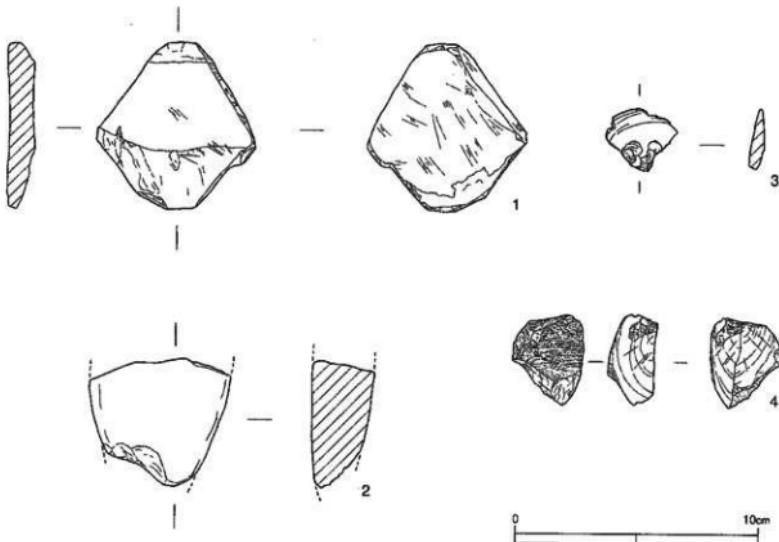


第73図 遺構外出土須恵器実測図 (S=1/3)



第74図 遺構外出土石器実測図1 (S=1/2)

る。75-1は泥岩の砥石である。3面で使用痕が確認できる。75-2は泥岩の端に両面から打ち欠いた痕跡が残るため、石錐と思われる。75-3は玉髓の剥片と思われるが、弧状の縁には一部刃をついた痕跡らしきものが残っている。75-4は黒曜石の石器の未製品と思われる。黒曜石はこのほかに1cm~7cm大のものが20点程度出土しているが、明らかに石器と思われるものは認められない。



第75図 遺構外出土石器実測図2 (S=1/2)

# 土 器 観 察 表

地質番号	基 種	出土地点	法 量 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①出土 ②焼成 ③色調	備 考
6-1	赤生土器 広口盤	A5 3層	不 明	口縁部内面及び縁端面には列点文を施す。口縁部外面に削り出し與帶文を施す。	不明	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
6-2	赤生土器 広口盤	B5 3層	不 明	口縁端面の上端に連続刻目文を施す。	内外面:不明	①2mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
6-3	赤生土器 蓋? (縁部)	B4-B5 セミシバハナ 3層	不 明	列点文の上下に羽状の連続刻目文を施す。	外側:不明 内側:ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
6-4	赤生土器 蓋 (縁部)	A5 3層	不 明	外側にヘラ括きによる羽状文を施す。	不明	①3mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
6-5	赤生土器 蓋	B4 3層	口径 16.0	頸部は「く」字状に屈曲する。	外側:不明 内側:ナデ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③黒褐色	
6-6	赤生土器 蓋	B5 3層	不 明	口縁端部はやや肥厚する。	内外面:ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄褐色	
6-7	赤生土器 蓋	B5 3層	口径 21.6	口縁端部は上方へ拡張し、端面に2枚の回線文を施す。	内外面:ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
6-8	赤生土器 蓋	B5 3層	不 明	口縁部外面に5条の回線文を施す。 複合部の段は下方に突出する。	内外面:ナデ	①0.5cm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③褐色	
6-9	赤生土器 蓋	B5 3層	口径 31.4	口縁部外面に6条の回線文を施す。 複合部の段は下方に突出する。	口縁部 外側:ナデ? 内側:ナデ 頸部以下 内面:ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	器肉が厚い。
6-10	赤生土器 (頸部)	B5 3層	不 明	頸部の屈曲は緩やかである。	外側:ナデ 頸部以下 内面:ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
6-11	赤生土器 蓋	A5 3層	口径 21.4	口縁部の外面は丸文で、複合部の段は斜め下方に突出する。	外側:ナデ 頸部以下 内面:ケズリ?	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
6-12	赤生土器 蓋	A5 3層	不 明	頸部はやや強く括り出す。	口縁部 外側:ナデ? 内側:ナデ 頸部以下 外側:ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄褐色	器土が他のものとやや異なる。
6-13	赤生土器 底 部	B5 3層	底径 7.6	平底。	外側:不明 内面:ケズリ? 底面:ナデ	①1mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③褐色	
6-14	赤生土器 底 部	B5 3層	底径 6.4	平底。	外側:ナデ 内面:ナデ? 底面:ナデ	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③洗黄褐色	
6-15	赤生土器 底 部	B5 3層	底径 6.0	平底。	不明	①1mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい褐色	
6-16	赤生土器 底 部	A5 3層	不 明	平底?	外側:荒いハケ後ナデ? 内面:ケズリ後ハケ?	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰白色	
6-17	赤生土器 底 部	B5 3層	底径 5.4	平底。	内外面:ナデ? 底面:ナデ?	①2mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
6-18	赤生土器 底 部	A1 3層	不 明	平底。	外側:不明 内面:ケズリ後ナデ? 底面:ナデ?	①0.5cm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③外側:黒色 内面:灰白色	
6-19	赤生土器 底 部	B6 3層	底径 6.0	平底。	内外面:ナデ? 底面:ナデ?	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③外側:底面:にぶい褐色 内面:灰黃褐色	
6-20	赤生土器 底 部	B5 3層	底径 4.4	平底。	外側:ハケ? 内面:ナデ? 底面:ナデ?	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③外側:底面:褐色 内面:にぶい黄褐色	
6-21	赤生土器 底脚付? (縁部)	A5 3層	脚端径 4.6	脚端部を深く引き出す。	外側:ナデ 内面:ナデ 脚部 内面:ナデ 底面:ナデ?	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰褐色	
7-1	乳 漏 器 高台付环	B1 3層	不 明	底部外縁付近に外反気泡に低い高台が付く。	内外面:回転ナデ 底面:糸切り	①0.5mm以下の砂粒を微量に含む ②普通 ③青灰色	
7-2	須 漏 器 平 明 (口縁部)	B5 3層	不 明	口縁端部は平坦である。	内外面:回転ナデ	①0.5mm以下の砂粒を微量に含む ②良 ③青灰色	器肉が厚い。
13-1	須 漏 器 (縁部)	I区 SKO1	不 明	5条の平行直線を輪にして、ヘラ括きによる羽状文を施し、その下に削り出し突起をめぐらす。	外側:ハケ 内面:不明	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	

押出番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態・文様の特徴	手造の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調	備考
15-2	弥生土器 器台(脚部)	1区 SK01	脚端径 13.0	脚部外面に5条の回藤文を施す。	外面：ナデ 内面：ケズリ	①3mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③淡黄褐色	
16-1	弥生土器 器	1区 SD01	不明	脚部外面に3条の回藤文を施す。脚部は「く」字状に屈曲する。	内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色	
19-1	弥生土器 便	1区 P14	口径 18.0	口縁端面に3条の回藤文を施した後に、通體斜方文を施す。 脚部外面に貼り付けた樂文を施す。	内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③灰褐色	
20-1	弥生土器 便	1区 不明	口径 25.0	脚端部は上方に弧張する。 脚部は「く」字状に屈曲する。	脚部 内外面：ナデ 脚部 内面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰褐色	口縁端部は焼成時に黒色化している。
20-2	弥生土器 便	1区不明	口径 16.0	口縁端部は上方に内傾気味に弧張する。 外縁に3条の回藤文と刻目文を施し、頭部に突唇を貼り付ける。	脚部 内外面：ナデ 脚部 内面：ハケ	①南 ②好 ③灰白色	
20-3	弥生土器 便	A1 2層	不明	脚部外面に2条以上の花緋を施す。 複合部の腰は斜め下方に突出する。脚部外面に列文らしき文様あり。	脚部 内外面：ナデ 脚部以下 内面：ハケ	①3mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	外面の一部底が付着している。
20-4	弥生土器 便	A1 2層	口径 16.2	口縁部は腰部に向かい先細りとなる断面を呈し、外縁は無文である。複合部の腰は斜め下方に突出する。	脚部 内外面：ナデ 腰部以下 内面：ケズリ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
20-5	弥生土器 底	A2 2層	底径 5.6	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	底面の一部底が付着している。
20-6	弥生土器 高井 (脚部)	A1 2層	不明	底部と脚部を別々に形成し接合している。	脚部 内面：ナデ 脚部 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③淡黄褐色	脚部は腰部に向かい、大きいくぼみがあるようである。
20-7	弥生土器 器台or高井 (脚部)	A1 2層	脚端径 19.0	脚部外面に10条の平行弦線を施す。脚部は厚く丸棒を帯びている。	脚部 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
20-8	弥生土器 底脚环 (脚部)	A1 1層	脚端径 5.4	脚端部は先細りの断面を呈している。	脚部 内面：ナデ 脚部 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
21-1	弥生土器 広口盃	2区 SK02	口径 28.5	口縁端部は肥厚し、端面、口縁部外面、肩部外面に被状文を施す。腰部には樂文を貼り付ける。	脚部 内外面：ナデ 脚部 外縁：ハケ 内面：ナデ+ハケ 腰部以下 内面：ハケ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	口縁端部は焼成時に黒色化している。
23-2	弥生土器 広口盃	2区 SK02	口径 29.0	口縁端部は下方に弧張する。	脚部 外面：ナデ 内面：ハケ後ナデ 腰部 内面：ハケ	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	口縁端部は焼成時に黒色化している。
23-3	弥生土器 便	2区 SK02	口径 23.0	口縁端部は上下に弧張し、端面に2条の回藤文と刻目文を施す。 脚部は「く」字状に屈曲する。	脚部 内外面：ナデ 腰部 内面：ハケ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄褐色	
25-1	弥生土器 底	2区 SK04	口径 24.0	口縁端部は上方に弧張し、端面に3条の回藤文を施す。また、内面には複数斜方文を施す。	脚部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
25-2	弥生土器 便	2区 SK04	口径 24.8	口縁端部は肥厚し、端面に1条の回藤文を施す。 脚部は「く」字状に屈曲する。	脚部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡黄色	
25-3	弥生土器 便	2区 SK04	口径 17.0	口縁端部は上方に弧張し、端面に2条の回藤文を施す。	脚部 内外面：ナデ	①0.3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③淡黄褐色	
25-4	弥生土器 底	2区 SK04	底径 7.8	平底。腰部は底面から腰部にかけて大きく開く。	外面：ミガキ 内面：ナデ? 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰褐色	内面に堀が付着している。
25-5	弥生土器 底	2区 SK04	底径 5.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③褐色	内面に堀が付着している。
27-1	弥生土器 底	2区 SK05	口径 27.1	口縁端部は上下に弧張し、端面に4条の回藤文を施す。	脚部 内外面：ナデ 腰部 内面：ハケ	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰白色	腰部内面はケズリを意図したような荒いハケ調型である。
27-2	弥生土器 便	2区 SK05	口径 32.0	口縁端部は内傾気味に上下に弧張し、端面に4条の回藤文を施す。脚部外面に突唇文を貼り付ける。	脚部 内外面：ナデ 腰部以下 内面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	

標識番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①給土 ②焼成 ③色調	備考
27-3	弥生土器 甕	2区 SK05	口径 16.0	口縁部は強く外反し、端部は曲面を有する。端部付近の内面に1条の浅い川字縞文を施す。	口縁部 内外面:ナデ 端部以下 内外面:ハケ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③赤褐色	端部外面の一帯に焼付着している。器全体は全体的に黒い。
27-4	弥生土器 甕	2区 SK05	口径 14.9	口縁端部は上下に外張し、端面に4条の回線文を施す。	口縁部 内外面:ナデ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む。 ②良 ③灰白色	
27-5	弥生土器 甕	2区 SK05	口径 10.3	口縁端部は上方へ軒張り、端面に4条の回線文を施す。	口縁部 内外面:ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③褐灰色	口縁部は焼成時に黒化している。
27-6	弥生土器 甕	2区 SK05	不 明	口縁端部は上下に外張し、曲面に2条の回線文を施す。	口縁部 内外面:ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい赤褐色	
27-7	弥生土器 甕(受盤)	2区 SK05	不 明	口縁部外側に5条の回線文を施す。内外面に褐色装飾を施す。	口縁部 内外面:ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい赤褐色	
27-8	弥生土器 甕	2区 SK05	不 明	口縁部外側に4条以上の平行弦文を施す。複合部の腹は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面:ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	
27-9	弥生土器 甕	2区 SK05	不 明	口縁部外側に5条以上の回線文を施す。	口縁部 内外面:ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤褐色	
27-10	弥生土器 甕	2区 SK05	不 明	口縁部外側に9条の平行弦文を施す。端部は丸味を帯びている。	口縁部 内外面:ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤褐色	
27-11	弥生土器 甕(脚部)	2区 SK05	不 明	脚部の外面に6条、端部に2条の弦文を施す。	外面:ナデ 内面:ケツリ 端部付近 内面:ナデ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③灰白色	
27-12	弥生土器 底部	2区 SK05	底径 5.6	平底。	外面:ミガキ 内面:ナデ 底面:ナデ?	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤褐色	
27-13	弥生土器 底部	2区 SK05	底径 3.5	平底。器壁は底面から脚部にかけて大きく聞く。	外面:ナデ 内面:ナデ? 底面:ナデ?	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	外面・底面は焼成時に黒化している。
28-1	土器 甕	2区 SK05	口径 15.8	口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。	口縁部 内外面:ナデ	①0.5mm以下の砂粒を微量に含む ②良 ③灰褐色	
30-1	弥生土器 広口甕	2区 SK05	不 明	口縁端部に肥厚し、端面に2条の回線文と2段の刻目文を施す。内面に波状文を施す。	口縁部 内外面:ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰白色 内面:黑色	
32-1	弥生土器 甕	2区 SK07	口径 18.4	口縁端部は上方に若干拡張する。端部は「く」字形に屈曲する。	口縁部 内外面:ナデ 端部以下 外面:ハケ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄褐色	外面の一部に焼付着している。
33-2	弥生土器 甕	2区 SK07	口径 25.6	口縁端部は上下に外張りし、端面に2条の回線文を施す。端部は「く」字形に屈曲し、外面上に突起文を貼り付けた。	口縁部 内外面:ナデ 端部以下 内面:ハケ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰褐色	脚部外面に焼成時の基盤が残る。
35-1	弥生土器 高环	2区 SK08	不 明	脚部の上面にヘラ書きによる連續斜行文、端面に刻目文を施す。	脚部 外側:ナデ? 内面:ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤褐色	
37-1	弥生土器 底口甕	2区 SK09	口径 26.5	口縁端部は下方に外張りし、端面に3条の回線文を施した後に内側斜行文を貼り付ける。	口縁部 内外面:ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	
37-2	弥生土器 底部	2区 SK09	底径 4.9	平底。	外面:ミガキ 内面:ナデ? 底面:ナデ?	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	焼成する内面全面に焼付着している。
37-3	弥生土器 底部	2区 SK09	底径 6.4	平底。	外面:ミガキ 内面:ケツリ 底面:ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰白色	外側、底面は焼成時に黒化している。
38-1	弥生土器 坏(坏部)	2区 SK10	不 明	脚部の器壁はやや内側丸味に立ち上がり、端部に2条、側面に5条の回線文を施し、上下に刻目文を施す。	脚部 内面:ミガキ 内面:ナデ?	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③灰白色	
39-1	弥生土器 底	2区 P3	底径 6.0	平底。器壁は脚部にかけて大きく聞く。	外面:ナデ 内面:ナデ? 底面:ナデ?	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
40-1	弥生土器 甕	2区 P5	口径 18.8	口縁端部は肥厚し、端面に2条の回線文を施す。	口縁部 内外面:ナデ 端部以下 内外面:ナデ?	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤褐色	
41-1	弥生土器 底部	2区 P8	不 明	脚部外面に突起文を貼り付け、その上にヘラ状工具あるいは貝殻により刻目文を施す。	脚部以下 内面:ミガキ? 内面:ナデ?	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤褐色	
42-1	弥生土器 甕	2区 P15	口径 17.1	口縁部外側に5条の平行弦文を施す。複合部の腹は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面:ナデ 端部以下 内面:ナデ 内面:ケツリ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰褐色	

押出番号	器種	出土土地点	法 直 (cm)	形態・文様の特徴	手筋の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調	備 考
43-1	弥生土器 広口壺	2区 1層	口径 31.3	口縁部は肥厚し、縁面に2条、内面に5条の印籠文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
43-2	弥生土器 広口壺	2区 1' 層	口径 23.6	口縁部に刻目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
43-3	弥生土器 広口壺	2区 1' 層	不 明	口縁部は上下に拵張し、縁面に3条の印籠文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③灰黄褐色	
43-4	弥生土器 広口壺 (頸部)	A7 2層	頸部径 12.0	頸部外面に文様文を貼り付ける。安堵の凸部は側でつまみ上げて形成されたようである。	頸部 外面：ハケ 内面：オサエ、ミガキ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②良好 ③灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
43-5	弥生土器 広口壺 (頸部)	2区 1' 层	不 明	頸部外面に原面三角形の実突文を3条施す。	頸部 外面：ナデ 内面：オサエ、ナデ	①0.5mm以下の砂粒を少しあむ ②良好 ③灰黄褐色	
43-6	弥生土器 要	B6 2層	口径 22.6	口縁端面に1条の印籠文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を少しあむ ②良好 ③灰白色	
43-7	弥生土器 要	B7 2層	口径 20.3	頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 外面：不明 内面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
43-8	弥生土器 要	C7 1' 层	口径 19.6	口縁端面に刻目文を施し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
43-9	弥生土器 要	B5 1' 层	口径 21.9	口縁部は肥厚し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	
43-10	弥生土器 要	A7 2層	口径 15.6	口縁端部は若干上下に拵張し、縁面に1条の印籠文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	内面の一帯に煤が付着している。
43-11	弥生土器 要	B5 1' 层	口径 20.2	口縁端部は肥厚し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	
43-12	弥生土器 要	B8 1' 层	口径 16.6	口縁端部は肥厚し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	口縁部外面の一帯に煤が付着している。
43-13	弥生土器 要	A7 2層	口径 24.0	口縁端部は肥厚し、縁面に具足による刻目文を施す。頸部外面に实突文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
43-14	弥生土器 要	C5 1' 层	口径 20.0	口縁端部は肥厚し、縁面に用字文を2段施す。頸部外面に实突文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	口縁部外面の一帯が焼成時に黑色化している。
43-15	弥生土器 要	2区 2層	口径 26.4	口縁端部は上方に拵張し、縁面に刻目文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	
43-16	弥生土器 鉢?	2区 2層	不 明	口縁端部は肥厚し、外面に段を有する。	口縁部 外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	
44-1	弥生土器 要	2区 1' 层	口径 20.2	口縁端部は肥厚し、縁面に2条の印籠文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ハデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	口縁部内面に焼成時の黒斑が残る。
44-2	弥生土器 要	B6 2層	口径 15.0	口縁端部は上方に拵張し、縁面に2条の印籠文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	口縁部内面に焼成時の黒斑が残る。
44-3	弥生土器 要	A7 2層	不 明	口縁端部は肥厚し、縁面に2条の印籠文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	頸部付近の器肉は薄い。
44-4	弥生土器 要	B7 1' 层	不 明	口縁端部は肥厚し、縁面に2条の印籠文を施した後に、刻目文を2段施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
44-5	弥生土器 要	A7 2層	口径 22.6	口縁端部は上方に拵張し、縁面に3条の印籠文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐色	口縁部外面が焼成時に黒化している。
44-6	弥生土器 要	A6 2層	口径 16.0	口縁端部は上方に拵張し、縁面に2条の印籠文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	器肉が薄い。
44-7	弥生土器 要	B7 1' 层	口径 22.0	口縁端部は上方に拵張し、3条の印籠文を施した後に、円周印文を貼り付ける。頸部外面に实突文を貼り付ける。内外面に灰黄褐色の黒斑が残る。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	

標識番号	器種	出土地点	法尺 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①埴土 ②焼成 ③色調	備考
41-8	弥生土器 甕	A7 2層	不 明	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の回籠文を施した後に、円形文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	口縁部内面及び端面の一部が焼成時に黒化している。
44-9	弥生土器 甕	A7 2層	口径 22.3	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の回籠文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部内面及び端面の一部が焼成時に黒化している。
44-10	弥生土器 甕	A7 2層	口径 20.4	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の回籠文を施した後に、刺突文を施す。端部の内面に突起文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ハケ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良好 ③灰白色	口縁端部の一部が焼成時に黒化している。
44-11	弥生土器 甕	A7 2層	口径 22.0	口縁端部は上方に拡張し、端面に2条の回籠文を施す。端部の内面に突起文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
44-12	弥生土器 甕	2区 1層	口径 約22.5	口縁部外側に2条以上の回籠文を施す。 複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1.5mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
44-13	弥生土器 甕	B6 2層	不 明	口縁部外側に6条の平行凸線を施す。 複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤面 内面：にぶい褐色	
44-14	弥生土器 甕	B6 1' 層	不 明	口縁部外側に3条の回籠文を施す。複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③褐灰色	
44-15	弥生土器 甕	A7 1' 层	口径 15.6	口縁部外側に4条の平行凸線を施す。 裏面外側に刺突文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	口縁部内面が焼成時に黒化している。
44-16	弥生土器 甕	A7 1' 层	口径 19.4	口縁部外側に5条の平行凸線を施す。 複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	複合部の後付近が焼成時に黒化している。
44-17	弥生土器 甕	2区 2層	口径 18.4	口縁部外側に5条の平行凸線を施す。 複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ハケ？ 内面：ケズリ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	口縁部外側の一部及び内面が焼成時に黒化している。
44-18	弥生土器 甕	A5 1層	口径 16.5	口縁部は端部に向かう先細りの断面をしており、外側に4条以上の平行凸線を施す。 複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ケズリ？ 内面：ケズリ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色 内面：灰白色	
44-19	弥生土器 甕	B7 2層	口径 15.0	口縁端部に平坦面を施す。複合部は丸棒を持ち、後はない。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ミガキ 底面：ナデ 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
44-20	弥生土器 甕	B7 1' 层	口径 12.0	口縁部は先細りの断面をせず、複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
44-21	弥生土器 甕	A7 1層	不 明	口縁端部は丸棒を兼びて記録する。複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	複合部の複付部が焼成時に黒化している。
44-22	弥生土器 甕	A6 2層	不 明	口縁部は先細りの断面を呈す。複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
44-23	弥生土器 甕	B6 1' 层	不 明	口縁端部は丸棒を兼びている。 複合部の後は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
44-24	弥生土器 甕 (網部)	2区 2層	不 明	網部最大径付近に其筋による刺突文を2段施す。	網部 内面：ハケ？ 内面：ケズリ？ 底面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
45-1	弥生土器 甕	B6 2層	底径 10.6	平底。	外面：ミガキ 内面：不明 底面：ナデ	①7mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	器身が厚い。
45-2	弥生土器 甕	2区 1' 层	底径 6.4	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ？ 底面：ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	外表面及び底面の一部が焼成時に黒化している。 底の器身が薄い。
45-3	弥生土器 甕	2区 2層	底径 7.0	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	内面の一部が焼成時に黒化している。
45-4	弥生土器 甕	B6 2層	底径 7.5	平底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい褐色 内面：灰黄褐色	底面の一部が焼成時に黒化している。

押固番号	品種	出土地点	法量 (m)	形態・文様の特徴	手術の特徴	①触土 ②構成 ③色調	備考
45-5	弥生土器底部	A7 2層	底径 7.6	平底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄色	
45-6	弥生土器底部	B6 2層	底径 6.0	平底。	外面：ハケ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄色	
45-7	弥生土器底部	C7 1'層	底径 6.7	平底。	外面：ハケ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄色	
45-8	弥生土器底部	C7 1'層	底径 7.6	平底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③外面：浅黄色 内面：にぶい黄褐色	
45-9	弥生土器底部	B6 2層	底径 10.2	平底。	外面：ナデ? 内面：ケズリ? 底面：ナデ?	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
45-10	弥生土器底部	C7 1'層	底径 7.4	平底。	外面：ナデ 内面：ナデ? 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	外表面及び底面の一部が焼成時に黒色化している。
45-11	弥生土器底部	B7 2層	底径 8.3	平底。縫隙は洞筋にかけて大きくなっている。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	外表面及び底面の焼成時に黒色化している。
45-12	弥生土器底部	B6 2層	底径 9.2	平底。	外面：ナデ? 内面：ケズリ? 底面：ナデ?	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
45-13	弥生土器底部	B7 1'層	底径 5.9	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ミガキ?	①4mm以下の砂粒を含む ②良 ③外面：灰白色 内面：灰白色	底面の一部が焼成時に黒色化している。
45-14	弥生土器底部	A5 1層	底径 5.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
45-15	弥生土器底部	B7 2層	底径 5.8	平底。	外面：不明 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
45-16	弥生土器底部	B6 1'層	底径 10.8	平底。	外面：ナデ 内面：不明 底面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰褐色	
45-17	弥生土器底部	2区 不明	口径 5.8	口縫部は単純に外反する。	口縫部 外縫部：ナデ 縫隙以下 外面：ハケ 内面：ミガキ?	①1.5mm以下の砂粒子を含む ②普通 ③灰白色	小系、外表面の一部に煤が付着している。
45-18	弥生土器高部(鉢部)	B5 1'層	不明	底部の縫隙はやや内屈張性に立ち上がり、縫隙は平坦面を有する。側面に3条の直線文が施す。	縫隙 外縫部：ナデ 縫隙以下 外面：ナデ 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
45-19	弥生土器高部(鉢部)	2区 1層	脚端径 14.8	脚端部の縫隙は若干肥厚し丸味を帯びる。外面に象嵌文様が施されていたようである。	脚端 外縫部：ナデ? 内面：不明	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
45-20	弥生土器高部(鉢部)	2区 1'層	脚端径 4.6	脚端部は先縫りの断面を呈している。	脚端 内縫部：ナデ 脚端外縫部：ナデ 内面：ケズリ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰褐色	
45-21	弥生土器注口土器(注口)	A5 1'層	注口径 0.9	縫隙は先縫りの断面を呈す。	外縫部：ミガキ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
45-22	弥生土製品分鋼形土製品	B6 1'層	横幅 6.0 (推定) 厚さ 0.9	表面を錐取るように列点文を施す。断面は反りを呈している。	不明	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	表面は焼成時に黒色化している。粘土は他の土器と似ている。
45-1	陶器器皿(底部)	2区 1'層	不 明	口縫部は皮状に縫隙の突起を持つ。発育があるが裂痕は不明である。	内外面：施釉	①堅密 ②良好 ③釉：白色 地：白色	
45-2	陶器器皿(底部)	2区 1'層	不 明	口縫部外縫部はくびれる。	内外面：施釉	①堅密 ②良好 ③釉：灰オーラー色 地：灰白色	
45-3	陶器器皿(底部)	A7 1'層	高台径 6.4	厚く高い高台を削り出していている。	内外面：施釉	①堅密 ②良好 ③釉：オーラー色 地：灰白色	
45-4	陶器器皿(底部)	B7 1'層	高台径 4.3	削り出し高台。	内面：一部施釉	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良好 ③釉：浅黄色 地：にぶい黄褐色	唐津焼き?
45-5	陶器器皿(底部)	2区 1'層	高台径 4.2	削り出し高台。	内面：一部施釉	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良好 ③釉：灰白色 地：にぶい黄褐色	唐津焼き?

押出番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
45-6	陶器器 (底面)	A5 1'層	不明	削り出し高台。	内面：茎脚	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良好 ③輪：灰ホリーブ色 底部：ヘラおこし？	唐焼続き？
46-7	土器 环	A7 1'層	口径：11.0 底径：5.0 厚さ：3.3	縁部は底部から口縁部にかけて大きく開き、先端部の断面を呈す。	内外面：回転ナギ？ 底部：へらおこし？	①4mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
46-8	陶器器 不 (口縁部)	A7 1'層	不明	口縁部は外へ折り返し丸味を帯びている。	内外面：茎脚	①緻密 ②良好 ③輪：ホリーブ黄色 底：灰白色	
46-9	土器 裏	B6 1'層	不明	口縁部は把厚し丸味を帯びている。	口縁部 外面：ナデ 内面：ミガキ	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良好 ③にぶい黄褐色	内面の一部が焼成時に黒色化している。
50-1	赤生土器 裏	H8年度 SK01	口径 16.2	口縁部は上方に拡張し、端面に1条の回線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 底部：下 外表面：ハケ？ 内面：ナデ？	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
50-2	赤生土器 裏	H8年度 SK01	口径 16.8	口縁部は単純に外反し、端部は平底である。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
50-3	赤生土器 裏	H8年度 SK01	不明	口縁部は肥厚し、端面に2条の回線文と刻目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内外面は大部分が焼成時に黒色化している。
53-1	赤生土器 裏	H8年度 SK02	口径 16.4	口縁部は上方に若干拡張し、端面に1条の回線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 底部：下 外表面：ナデ 内面：ハケ	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	外表面は大部分が焼成時に黒色化している。
53-2	赤生土器 裏	H8年度 SK02	口径 16.1	口縁部は内傾して上方に拡張し、端面に2条の回線文を施す。底部には刻点文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 底部：平 外表面：ハケ 底部：平 外表面：ミガキ 内面：ケズリ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内外面は大部分が焼成時に黒色化している。外表面の一部に保が付着している。
53-3	赤生土器 底	H8年度 SK02	底径 5.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内面および底面の一部が焼成時に黒色化している。底の墨色が薄い。
53-4	赤生土器 裏	H8年度 SK02	口径 25.9	口縁部は上下に拡張し、端面に2条の回線文を施す。底部外側に刻目文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 底部：下 外表面：ハケ？ 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③淡黄褐色	
53-5	赤生土器 裏	H8年度 SK02	胴部最大径 27.2 底径 7.3	胴部最大径付近に刻点文を施す。	胴部上半 外表面：ハケ 内面：オサエ 胴部下半 外表面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：オサエ、ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③淡赤褐色 ④淡黄褐色	外表面の一部に底が付着している。
55-1	赤生土器 底	H8年度 SK03	不明	口縁部は上下に拡張し、2条の回線文と長態による刻目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
55-2	赤生土器 底	H8年度 SK03	底径 6.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ？ 底面：ナデ	②2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	外表面および底面の一部が焼成時に黒色化している。
55-3	赤生土器 底	H8年度 SK03	底径 8.6	平底。	外面：ミガキ 内面：オサエ、ナデ？ 底面：ナデ	②2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	外表面および底面の一部が焼成時に黒色化している。底の墨色が薄い。
58-1	赤生土器 裏	H8年度 SX02	口径 20.4	口縁部は若干肥厚し、端面に1条の回線文を施す。頭部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外表面：ハケ 内面：ナデ	①3.5mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③灰黄褐色	
58-2	赤生土器 裏	H8年度 SX02	口径 16.6	口縁部は若干上方に拡張する。頭部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外表面：ハケ 内面：ナデ	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	内面の大部分が焼成時に黒色化している。
58-3	赤生土器 裏	H8年度 SX02	口径 16.8	口縁部は上方に拡張し、端面に1条の回線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外表面：ハケ？ 内面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	口縫部外側の一部が焼成時に黒色化している。
58-4	赤生土器 裏	H8年度 SX02	口径 17.1	口縁部は肥厚し、端面に2条の回線文と刻目文を施す。底部外側に刻目文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外表面：ナデ？ 内面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	

桟回番号	基 種	出土地点	法 直(cm)	形態・文様の特徴	手ぬの特徴	①底土 ②焼成 ③色調	備 考
58-5	弥 生 土 器 甕	H8年度 SX02	口径 18.8	口縁部は下方に拡張し、端面に2条の印綱文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 端面以下 内外面：ハケ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい褐色	外画面に塗が付着している。 焼成内部に口縁部形成時の段を有する。
58-6	弥 生 土 器 甕	H8年度 SX02	底径 5.0	平底。	外表面：ミガキ 内外面：ナデ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	外画面及び底面の一部が焼成時に黒色化している。
58-7	弥 生 土 器 甕	H8年度 SX02	底径 5.1	平底。	外表面：ミガキ 内外面：ケズリ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
60-1	弥 生 土 器 甕	H8年度 P3	口径 17.0	口縁部は内側して上方に拡張し、端面に2条の印綱文を施す。 脚部は「く」字状に曲がる。	口縁部 内外面：ナデ 端面以下 内外面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	外画面の一部が焼成時に黒色化している。
60-2	弥 生 土 器 甕	H8年度 P3	不 明	口縁部は上方へ若干拡張し、端面に1条の印綱文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄褐色	外画面の大半が焼成時に黒色化している。
60-3	弥 生 土 器 甕	H8年度 P3	不 明	口縁部は上方へ若干拡張し、端面に1条の印綱文と刻文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
60-4	弥 生 土 器 甕	H8年度 P3	不 明	口縁部は内側して上方に拡張し、端面に2条の印綱文を施す。 脚部は「く」字状に曲がる。	口縁部 内外面：ナデ 端面以下 内外面：ハケ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄褐色	
60-5	弥 生 土 器 (頸部)	H8年度 P3	腹部最大径 22.3	脚部は倒錐形を呈す。	脚部 外表面：ハケ後ミガキ 内外面：ハベナ	①4mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	外画面の一部が焼成時に黒色化している。 内画面に塗が付着している。
60-6	弥 生 土 器 (頸部)	H8年度 P3	不 明	——	脚部 外表面：ハケ？ 内外面：ハケ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄褐色	外画面の一部に塗が付着している。
62-1	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD02	口径 15.0	口縁部は若干肥厚し、端面は平坦である。	口縁部 内外面：ナデ 端面以下 内外面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	内外画面に塗が付着している。
65-1	弥 生 土 器 直口甕	H8年度 SD04	不 明	口縁部は頸部からほぼ垂直して立ち上がり、底部は肥厚し、平底面を有する。	口縁部 内外面：ナダ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
65-2	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD04	不 明	口縁部は上方へ若干拡張し、端面は平緩である。頸部外面に突起文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	口縁部外画面に塗面が焼成時に黒色化している。
65-3	弥 生 土 器 低脚甕	H8年度 SD04	脚周径 5.4	脚部は先端より断面を呈している。1ヶ所に鉄孔を有する。	外表面 内外面：ナデ 脚部 外表面：ナデ 内外面：ケズリ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
66-1	弥 生 土 器 直口甕	H8年度 SD05	口径 32.0	口縁部は下方に拡張し、端面に3条の印綱文、3段の刻文、円筒浮文を施す。内外面に斜糸子文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③灰白色	
66-2	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD05	口径 19.2	口縁部は肥厚し、丸味を帯び、外表面に5条以上の平行刻文を施す。複合部の横は脚の方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 端面以下 外表面：ナデ 内外面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色 内外面：にぶい黄褐色	
66-3	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD05	不 明	口縁部内面に2条の比較を施す。複合部の横は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
66-4	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD05	不 明	口縁部は上方に拡張し、端面に3条の印綱文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
66-5	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD05	不 明	平底。	外表面：ナデ？ 内外面：ケズリ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③灰白色	
66-6	弥 生 土 器 底足	H8年度 SD05	底径 5.6	上げ底。	外表面：ナデ 内外面：ケズリ 底面：ナデ？	①0.1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	底面は焼成時に黒色化している。
67-1	弥 生 土 器 (頸部)	H8年度 SD06	頸部径 14.0	頸部の器壁は外縁気味に立ち上がる。外表面に突起文を施す。	頸部 外表面：ハケ 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
67-2	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD06	口径 20.0	口縁部は単純に外反し、端面は平底である。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 端面以下 内外面：ハケ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
67-3	弥 生 土 器 甕	H8年度 SD06	頸部径 15.3	口縁部は単純に外反する。	口縁部 外表面：不明 内外面：ナデ 端面以下 外表面：不明 内外面：ナデ	①0.3mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内面は焼成時に黒色化している。 始土と並ぶものとやや異なる。

井筒番号	器種	出土地点	法星 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調	備考
67-4	弥生土器 甕	H8年度 SD06	不 明	口縁部は単純に外反し、先端より断面を呈す。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 内外面：ナデ？	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②普通 ③にぶい黄褐色	表面の大部分が焼成時に黒化している。 底部が他のものとやや異なる。
67-5	弥生土器 不 明	H8年度 SD06	不 明	底部は若干肥厚し、丸底を帯びている。	内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	表面は焼成時に黒化している。
70-1	弥生土器 広口甕	A14 6層	口径 29.3	口縁部は下方に拡張し、表面に2本の回転文を施す。内面には複数斜筋子文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	口縁部に焼成時の底盤が残る。
70-2	弥生土器 広口甕	A11 6層	口径 28.4	口縁部は下方に拡張し、表面に3本の回転文、3箇の円周浮文を施す。内面には3箇の円周浮文、安樂文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄褐色	
70-3	弥生土器 広口甕	B11 6層	口径 24.6	口縁部は下方に拡張し、表面に4条の回転文、2段の斜目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
70-4	弥生土器 広口甕	A11 1層	不 明	口縁部は下方に拡張し、表面に3条の回転文、内面には複数斜筋子文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	
70-5	弥生土器 広口甕	A10 不明	口径 21.7	口縁部は肥厚し、表面は平坦である。内面に安樂文、穿孔、複数斜筋子文、列点文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
70-6	弥生土器 甕	A12 6層	口径 17.6	口縁部は平面に半周面を有す。口縁部外側に波状文、瓶部外側に8条以上の斜紋を施す。複合部の壁は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 底部 外面：ナデ 内面：ケズリ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	口縁部内面の一部が焼成時に黒化している。
70-7	弥生土器 甕	A14 6層	口径 10.7	口縁部は単純に外反する。外面に赤色塗装を施す。	口縁部 内外面：ナデ 底部 外面：ハゲ 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③良 ④内面：浅黄褐色	
70-8	弥生土器 廣口甕	A13 6層	口径 8.2	口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部 内外面：ナデ 底部 外面：ナデ 内面：ハケ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄褐色	
70-9	弥生土器 甕？ (瓶部)	A12 6層	不 明	瓶部外側に2条の波状、肩口文、陳状浮文、斜筋子文、円周浮文を施す。	瓶部 外面：ナデ？ 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
70-10	弥生土器 甕？ (瓶部?)	A11 6層	不 明	瓶部外側に4段の波状文、6条の波状、斜筋文あるいは斜筋子文を施す。	瓶部 外面：ハケ？ 内面：オサエ、ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
71-1	弥生土器 甕	A14 6層	口径 25.8	口縁部は肥厚し、表面に2条の回転文を施す。瓶部は「く」字状に屈曲し、外面に安樂文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外面：ナデ 内面：ナデ？	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内面の大部分が焼成時に黒化している。
71-2	弥生土器 甕	A10 6層	口径 27.9	口縁部は内傾して上下に拡張し、表面に2条の回転文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外面：ナデ 内面：ナデ？	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③浅黄褐色	
71-3	弥生土器 甕(瓶部)	A11 6層	瓶部径 25.0	瓶部は「く」字状に屈曲し、外面に安樂文を施す。	瓶部以下 内外面：ハケ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③良	
71-4	弥生土器 甕	A13 6層	口径 25.0	口縁部外側に8条以上の平行弦紋を施す。複合部の壁は斜め下方に突出する。瓶部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1.5mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
71-5	弥生土器 甕	A11 6層	口径 31.5	口縁部は肥厚し、表面は平坦である。複合部の壁は斜め下方に突出する。瓶部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
71-6	弥生土器 甕	A10 6層	不 明	口縁部は上方に拡張し、表面は平坦である。瓶部の屈曲は継ぎ。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外面：ナデ 内面：ハケ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄褐色	瓶肉は全体的に薄い。
71-7	弥生土器 甕	A14 6層	不 明	口縁部は上方に拡張し、表面は平坦である。瓶部の屈曲は継ぎ。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外面：ナデ 内面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③良	
71-8	弥生土器 甕(瓶)	A11 6層	不 明	口縁部外側に12条以上の平行弦紋を施す。複合部の壁は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
71-9	弥生土器 甕(瓶)	A11 6層	底径 9.3	平底。	外面：ミガキ 内面：ハゲ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	

押出番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①絞上 ②絞成 ③色調	備考
71-10	弥生土器底部	A 1.1 6層	底径 6.8	平底。	外面: ナデ 内面: ケズリ 底面: ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③淡黄褐色	外面及び底面の大部分は焼成時に黒色化している。
71-11	弥生土器底部	A 1.4 6層	底径 4.3	平底。	外面: 不明 内面: ケズリ 底面: ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③灰黄色	全面で焼成時の墨色化が目立つ。外側の一端に焼が付着している。
71-12	弥生土器底部	A 1.0 6層	底径 4.6	平底。	外面: ミガキ 内面: ナデ 底面: ナデ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	底面の大部分が焼成時に黒色化している。底の器肉が厚い。
71-13	弥生土器底部	A 1.2 6層	底径 5.7	上げ底。	外面: ナデ 内面: ナデ 底面: ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内面の一部が焼成時に黒色化している。
71-14	弥生土器底部	A 1.1 1層	底径 4.0	上げ底。	外面: ミガキ? 内面: ナデ 底面: オサエ?	①0.5mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
71-15	弥生土器底部(鉢形?)	B 1.0 1層	径 3.8	外面の中央に径6mm、深さ5mmの穴を有する。	外外面: ナデ	①0.2mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
71-16	弥生土器高杯(鉢形?)	A 1.2 6層	口径 18.0	口縁部はほぼ水平方向に拡張し、裏面に複数斜格子文を施す。	底部 外外面: ナデ	②.5mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③淡黄褐色	
71-17	弥生土器高杯(鉢形?)	A 1.1 6層	口径 32.4	口縁部はほぼ水平方向に拡張し、裏面に4条の横縞文、肩目文を施す。外面に削り出し突唇を施す。	底部 外外面: ナデ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③灰黄色	
71-18	弥生土器鉢?	A 1.2 6層	口径 29.8	口縁部は「く」字状にほぼ水平に屈曲する。 斜面部に削り出し突唇を施す。	口縁部 斜面部: ナデ 斜面部以下 外外面: ナデ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	口縁部が裏の一部が焼成時に黒色化している。71-19と同一模作の可能性あり。
71-19	弥生土器鉢?	B 1.2 6層	不 明	口縁部は「く」字状にほぼ水平に屈曲する。 斜面部に削り出し突唇を施す。	口縁部 斜面部: ナデ 斜面部以下 外外面: ナデ	②.5mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	71-18と同一模作の可能性あり。
72-1	弥生土器把手	A 1.0 6層	長さ 5.3 断面径 1.8	断面はほぼ円形。 中央斜面部方向に5条の波線を施す。	表面: ハケ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄褐色	
72-2	弥生土器把手	A 1.2 1' 層	長さ 5.0 断面径 1.4	断面はほぼ円形。	表面: ヘア調整?	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③淡黄褐色	
72-3	弥生土器把手	A 1.0 1層	長さ 5.9 断面径 2.0	断面はほぼ円形。	不明	②2mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③淡黄褐色	
72-4	弥生土器盤(或て環) 或て環	B 1.0 6層	径 3.5	1ヶ所穿孔を有する。	外側: ナデ 内面: ナデ?	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
72-5	弥生土器盤形土器	A 1.1 6層	径 1.6	完全な球形であったと思われる。 穿孔はない。	調整なし。	①2mm以下の砂粒を微量に含む ②普通 ③灰黄色	
72-6	弥生土器盤形土器	B 1.1 6層	長さ 4.5 幅 2.6 孔径 0.8	管状防護形土器。	表面: オサエ?	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	
72-7	弥生土器注口土器 (柱口)	A 1.1 6層	口径 1.0	表面は先端の断面を呈す。	外側: 不明	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③淡黄褐色	
72-8	弥生土器品分網形 土器品	A 1.3 1' 層	横幅 3.7 (推定) 厚さ 1.0	施文はないと思われる。裏面は平坦である。	不明	①2mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい橙色	紹上が他の土器と異なる。
72-9	弥生土器品分網形 土器品	A 1.1 6層	厚さ 1.0	一部に表面を縫取る列点文が認められる。 表面ははりを施している。	不明	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	紹土は他の土器と似ている。
72-10	弥生土器品分網形 土器品	A 1.0 1層	厚さ 1.1	表面を滑脱し列点文が認められる。 上部脇から脇直に放り下げる小円孔を2つ有する。表面ははりを施している。	表面: ナデ? 裏面: ナデ?	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	紹土は他の土器と似ている。
73-1	須恵器高台付耳	B 1.1 1' 層	高台径 10.4	高台の端部に1条溝を有しており、新面が圓形になっている。	外側: 回転ナデ 底面: 磨削糸切り墨ナデ?	①2mm以下の砂粒を微量に含む ②良 ③灰色	
73-2	須恵器 不明 (口縁?)	A 1.1 1' 層	不 明	外側に高台あるいは突唇状のものが付く。	外側: 回転ナデ	①2mm以下の砂粒を微量に含む ②良 ③灰白色	

石 器 観 察 表

標記番号	出土地点	器種	遺存状態	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備 考
8-1	B4 3層	浮子?	一部欠	輕 石	4.6	4.4	2.3	19.0	中央に筋状の溝あり。
8-2	B6 2層	不明	完	安 山 石	4.2	3.1	2.5	44.2	1ヶ所に凹みあり。
33-1	2区 SK07	砥 石	一部欠	砾 灰 石	12.5	7.6	4.6	750.0	1面に研磨面があり、3条の縦き裂を有する。
33-2	2区 SK07	圓石or磨石 片刃石斧	一部欠	千枚 磨	6.2	3.4	7.0	27.0	斧身に磨き跡のような痕を有する。
33-3	2区 SK07	磨石or磨石	完	安 山 石	11.8	9.8	4.2	757.0	片面と縁に使用痕を残る。
33-4	2区 SK07	石 砥	完	安 山 石	14.8	13.6	6.5	2106.0	片面の中央付近に集中して使用痕が残る。
47-1	2区 2層	阳 石 完	完	安 山 石	10.4	9.2	4.2	735.0	両面の中央に凹みを有する。片面に磨いた痕跡、縁に鋸いた痕跡が残る。
47-2	B7 1'層	石 砥	—	碧 玉	4.8	3.3	3.1	58.8	剥離面が多数残る。
47-3	A6 1'層	砥 石	一部欠	滑 磨 石	7.2	4.6	2.2	118.0	2面に研磨面を有し、2ヶ所に刃跡を残す。
47-4	2区 2層	未 製 品?	—	桂 乳 石	2.8	2.3	1.4	7.5	一部に剥離面が残る。
54-1	H8年度 SK02	砥 石	一部欠	真 砂 or 鹿角	8.3	2.9	2.4	125.0	4面に研磨面が残る。
68-1	H8年度 SD06	不 明	一部欠	砾 灰 石	6.6	5.1	2.0	97.1	使用痕は観察できない。
69-1	H9年度 P1	磨 石?	完	安 山 石	7.5	6.6	1.2	98.9	片面に研磨面が残る。
69-2	H9年度 P1	砥 石	完	安 山 石	11.1	2.4	1.6	69.0	4面に研磨面が残る。
74-1	B13 6層	大 刃 鋒 始 刃 石斧	一部欠	安 山 石	13.5	6.2	4.5	600.0	柄の装着部に縫を有する。
74-2	A10 6層	未 製 品	—	シルト 石	10.6	7.7	3.3	571.0	縁に剥離面が多数残る。
74-3	A12 6層	敲 石	一部欠	石英安山岩	6.4	3.8	4.5	139.0	縁に使用痕が残る。
74-4	A11 6層	乳 檍 状 石斧	一部欠	緑色 片 石	12.5	4.6	4.0	341.0	柄の装着用の段をわずかに有する。
75-1	A11 6層	砥 石	一部欠	泥 石	6.8	6.5	0.9	69.1	3面に研磨面が残る。
75-2	A12 6層	石 砧?	一部欠	泥 石	5.2	5.6	2.3	87.0	縁に両面から打ち欠いた痕跡が残る。
75-3	B13 6層	未 製 品?	—	玉 鏊	2.5	2.9	0.5	3.1	弧状の縁に一部刃をつけた族飾らしきものが残る。
75-4	H9年度 不明	未 製 品	—	黑 鞭 石	3.7	2.9	1.9	15.9	剥離面が数カ所に残る。

# 第7章 白枝荒神遺跡における花粉、プラント・オパール分析

川崎地質株式会社 渡邊 正巳

## 1. はじめに

本報告は、出雲市教育委員会が遺跡周辺地域での古環境推定、特に遺跡内で検出された「腐植層」の堆積環境推定のために川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析、プラント・オパール分析の概報である。

白枝荒神遺跡は島根県中部の出雲市西部に位置し、西に浜山砂丘、南に神戸川を望む。

## 2. 試料について

図1に示す調査区内の2地点において、出雲市教育委員会との協議の上、川崎地質株式会社が分析用試料を採取した。各地点の柱状図、および試料採取層準を図2、3の花粉ダイアグラム中に示す。No.2地点は「腐植層」の堆積環境を推定する目的で分析を実施し、「腐植層」の1試料のみの分析を行った。花粉分析はNo.1、2地点の全試料を対象とし、プラント・オパール分析はNo.2地点を対象として実施した。

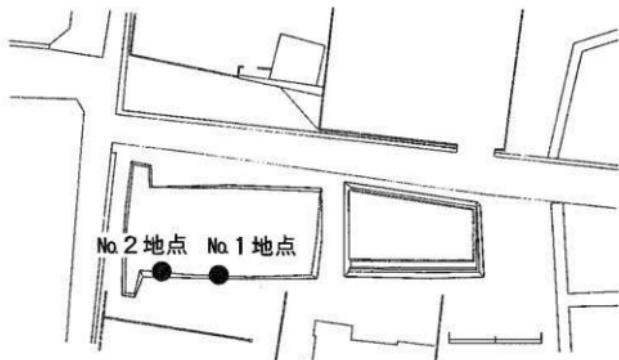


図1 試料採取地点

## 3. 分析方法および分析結果

### (1) 分析方法

花粉分析処理は渡邊（1995）に従い、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラス・ビーズ法に従った。

### (2) 分析結果

花粉分析結果を図2、3、プラント・オパール分析結果を図4に示す。

花粉ダイアグラムでは、木本花粉を基数とし各種類の出現率を百分率で算出したものをスペクトルで表した。また木本花粉検出数の少ない試料については、出現した種類を\*で示した。

プラント・オパールダイアグラムでは、1g当たりの検出数をスペクトルで表した。

白枝荒神遺跡2区

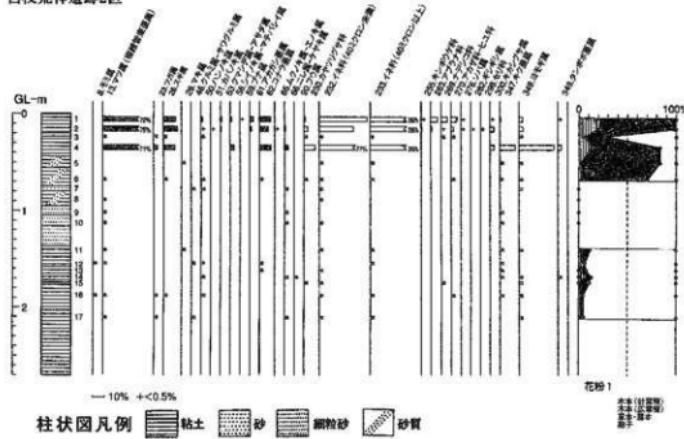


図2 No.1地点の花粉ダイアグラム

白枝荒神遺跡2区腐植層

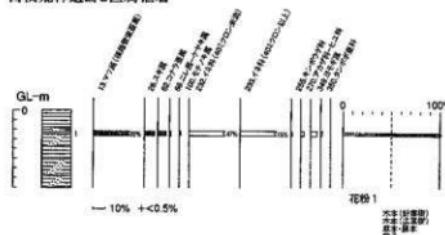


図3 No.2地点の花粉ダイアグラム

白枝荒神遺跡2区腐植層

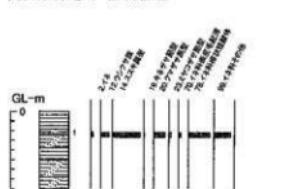


図4 No.2地点のプラントオパールダイアグラム

#### 4. 花粉分帶

一般には花粉分析結果より花粉帯を設定し、花粉帯を基に古植生を復元する。しかし、今回の試料の多くは花粉化石の含有量が少なく、統計処理に充分な花粉化石が検出できなかった。また、花粉ダイアグラムにスペクトルで示した4試料では、花粉組成にはほとんど変化が認められなかったことから、今回は花粉分帯を行わなかった。

#### 5. 「腐植層」の堆積環境について

「腐植層」の成因についてトイレ遺構などという見方もあるが、寄生虫卵が認められなかった事から、この可能性は極めて低い。

一方多量の炭片が検出され、イネ科植物起源のプラント・オパール化石が多数検出された。このことから、炭片がイネ科植物に由来することが指摘できる。

ビット中に稻葉などの炭がまかれ（捨てられ？）埋められたことにより、「腐植層」が形成されたの

ではなかろうか。

#### 6. 花粉化石の検出量が少なかった原因について

花粉化石の検出量が少ない原因には、一般に以下の2つの要因が考えられている。

① 堆積速度が早かったために、花粉化石の含有量が極めて少なかった。

② 花粉化石は堆積時に充分含まれていたが、二次的要因により分解された。

①の場合には、花粉化石はもとより、胞子化石、他の有機物の含有量も少ないと考えられる。一方今回の場合、微少な炭片が大量に認められることから①の要因は考えにくい。

②の場合、分解の要因として主に以下の2つの要因が考えられている。

(1) 堆積中、あるいは堆積後に紫外線の影響により花粉膜が劣化し、花粉化石が消滅した。

(2) 堆積後、地下水の影響により酸化・還元環境における、花粉化石が消滅した。

(2) の場合、地層に酸化鉄の検出が認められるなどの現象が観察できる。しかし今回の観察では、明瞭な酸化鉄の検出は認められなかった。

したがって、今回の試料中に花粉化石が少なかったことの主な原因として、堆積中、あるいは堆積後に紫外線の影響により花粉膜が劣化し、花粉化石が消滅したことがあげられる。

連続的な炭片、および劣化花粉粒の検出は、いわゆる「土壤化」を示唆すると考えられる。したがって遺跡内は、水域から陸域、さらに水域と、不安定な堆積環境を何度も繰り返しながら、現代に至ったと考えられる。

#### 7. 各層準の堆積時期について

今回行った花粉分析の内、充分な量の花粉化石が検出された4試料では、いずれもマツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴う。また、イネ科（40ミクロン以上）が高率で出現する。

穴道湖地域での花粉組成変遷（大西、1993）では、マツ属（複維管束亜属）が卓越するのはイネ科花粉帯マツ亜帯であり、およそAD 1500～1930年頃と考えられている。このことから考えると、いずれの試料も近世以降の堆積物である可能性が指摘できる。

一方発掘の成果から、試料No.2層準が弥生時代～中世の堆積物、試料No.3層準が弥生時代以前の堆積物であると考えられており、花粉帯から推定される時期と矛盾する。

試料No.2以深で得られた花粉化石には、耕作により下方に移動したものである可能性も否定できない。しかし、試料No.3層準ではほとんど花粉化石が検出されていないにも関わらず、下位の試料No.4層準では花粉化石の検出量が多く、花粉化石の移動の可能性は低いと考えられる。

今回得られた花粉組成からは、遺跡内での稲作と周辺の二次林化が推定されることからこれらの層準の堆積時期を確定することは重要である。今後、遺跡内での理化学的な年代測定、および従統的な花粉分析の実施が望まれる。

#### 8. 古稲生復元

今回得られた花粉組成のうち、No.1層準は従来の花粉分析結果と一致した。一方、前述のようにNo.2層準以深で得られた花粉組成は、従来の花粉分析結果と異なった。

現状では、弥生時代以前から現代に至るまで遺跡内では稲作が行われ、中国山地縁辺部や北山山地はアカマツの二次林に覆われていたと考えられる。しかし、No.2層準以深でのマツ属（複維管束亜属）

の出現は、遺跡北西部に広がる浜山砂丘などに分布したクロマツ林（海岸林）に由来するとも考えられる。

出雲市内では、花粉分析などの自然科学分析が行われだしたのが近年になってからであり、既存の資料も乏しい。このため、植生復元に係わる要因のうち、不明な事柄が多い。したがって、今後同遺跡内、あるいは周辺地域での継続的な分析による資料の蓄積が望まれるところである。

## 9.まとめ

今回の分析結果から、以下のことを考察した。

- (1) 花粉化石の含有量が少なく、かつ炭片が多量に検出できた。この原因を追及する過程で、各層準の「土壤化」を推測することができた。
- (2) 「腐植層」の形成過程を推定した。
- (3) 試料No.1～4層準の堆積時期について花粉組成から推定される時期と、考古学的な発掘成果から推定される時期の間で矛盾が生じた。
- (4) 遺跡周辺の古植生を推定した。しかし今回の分析で得られた資料が断続的であり、今回行った古植生復元は今後修正をする必要がある。

今後、遺跡内、あるいは周辺地域での理化学的な年代測定、および継続的な花粉分析の実施が望まれる。

## 10.引用文献

- 藤原宏志（1976）. プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13, p. 187-197.
- 大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分带と植生変化. 地質学論集, 39, 33-39.
- 渡邊正巳（1995）40. 花粉分析法. 考古学ライブラリー-65 考古資料分析法, 84-85, ニュー・サイエンス社, 東京.

## 図表一覧

図1 試料採取地点

図2 No.1地点の花粉ダイアグラム

図3 No.2地点の花粉ダイアグラム

図4 No.2地点のプラント・オパールダイアグラム

## 第8章 平成6～8年度調査のまとめ

平成6年度調査から平成8年度調査については、下記の項目に沿って調査者の所見を述べ、当該調査のまとめとしたい。

### 当該調査区検出遺構の性格について

平成6年度から平成8年度調査の主な検出遺構は土坑と溝状遺構であり、ピットも検出しているが建物が建つものではなく、あまり生活臭のしない調査区であった。出土遺物のほとんどは弥生時代中期後半の土器片であるため、この時期が当該調査区で遺構が築かれた中核の時期を示していると思われる。また、平成7年度1区以西の出土量は平成5年度調査区と比較すると格段に減少する傾向にあり、平成6年度調査区以西では平成5年11月に行った試掘調査において遺構・遺物ともに検出されず、白枝荒神遺跡の西端を確認する結果となった。さらに、検出遺構の中で明らかに遺物を伴い時期を確定できる遺構としては、平成8年度調査区のSK02などを中心に土坑が抽出される。これらのことから、当該調査区は日本海に開けた入り海を望む、弥生時代中期後半から後期にかけての集落の西端に築かれた墓域であることが可能性の一つとして挙げられる。

### 土層堆積状況について

当該調査区では土層堆積状況観察用に計7ヶ所で深堀を行った。その結果、壁の崩壊により掘削が不可能となった1ヶ所を除き、6ヶ所において標高60cm付近で、三瓶山から神戸川によって出雲平野に供給された石英安山岩の砂層の上面を確認した。この上には大きく捉えて標高110cmまでは粘土層、標高260cmまでは砂層の堆積が認められる。土層をさらに細分し堆積状況を詳細に観察すると、A1-A15ラインではA15方向に土層が下がりながら堆積している状況が認められるのに対し、A-B-Cラインでは長さ10m未満の確認であったが、ほぼ水平に堆積している。このことから、局地的な現象の可能性もあるが、南西方向へ下がりながら土層が堆積している様子が窺え、出雲平野が神戸川により、この方向に形成されていったことを想像させる。

### 遺構検出レベルについて

上記の堆積土を土台に、ある程度の削平を受けているが、遺構はほぼ標高280cm～300cm間で検出している。この検出レベルは出雲平野中央部では最も低い値であり、遺構が築かれた時期、つまり、弥生時代中期後半から後期にかけての集落造営可能な最低標高と考えられる。しかし、平成7年度調査に伴い実施した花粉分析では、遺構検出レベル以下の堆積土層からの花粉化石の検出量が少ないため、ある程度土壤化が進んでいた可能性があるという結果を得た。この結果もって即、弥生時代に標高3m以下の出雲平野中央部で集落造営が可能であったとは言えないが、平野周辺の平田市の源代遺跡で弥生時代中期の溝が、また、湖陵町の西安原遺跡で弥生時代終末から古墳時代中期の杭列あるいは木道がいずれも標高0m以下で検出されていること<sup>10</sup>などを勘案し、一つの可能性として今後さらなる検討を加える必要がある。

### 分銅形土製品について

当該調査区において、4点の分銅形土製品が出土した。いずれも遺構に伴わず遺物包含層からの出土であり詳細を知る術はないが、矢野遺跡で1点出土しているほか近年の出雲市内の調査で、古志本郷遺跡で1点、正蓮寺周辺遺跡で3点出土しており出土例が相次いでいる。島根県内での出土数も29<sup>11</sup>

点を数えることとなり、当地域と瀬戸内との交流を示す貴重な資料を追加する成果を得た。

### 引用・参考文献

- 田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本 清・磯田由紀子 「出雲市矢野遺跡の研究（I）」「山陰地域研究」第3号 島根大学山陰地域研究総合センター 1987
- 田中義昭・西尾克己 「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号 島根大学山陰地域研究総合センター 1988
- 中村唯史 「4. 上長浜貝塚と周辺の古環境」『上長浜貝塚』 出雲市教育委員会 1996
- 『古代の出雲を考える3 出雲平野の集落遺跡Ⅰ』 出雲考古学研究会 1983
- 『古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡Ⅱ』 出雲考古学研究会 1986
- 『山特川川岸遺跡』 出雲市教育委員会 1996
- 正岡睦夫・松本岩雄編 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社 1992
- 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会 1992
- 田中義昭 「山陰地方における弥生時代の海水準について」『島根大学地球資源環境学研究報告』第15号 1996
- 西尾克己・野坂俊之 「神西湖周辺の集落遺跡」「湖陵町誌研究」第4号 1995
- 東 潤 「分銅形土製品の研究（I）」「古代吉備」第7集 1971
- 神原英朗 「集成4 分銅形土製品」「吉備の考古学的研究（上）」 1992

#### 註1

平田市教育委員会 原俊二氏、湖陵町教育委員会 野坂俊之氏のご教示による。

#### 註2

分銅形土製品の島根県内出土点数は出雲市内で9点確認されているほか、米田がとりまとめたところ平成9年3月現在で次のとおりである。布田遺跡（松江市）8点、西川津遺跡（松江市）6点、タテチヨウ遺跡（松江市）3点、石台遺跡（松江市）1点、十善遺跡（安来市）1点、鶴貢遺跡（東出雲町）1点。県内出土点数合計29点。

## 平成5年度調査区

図版1

1. I区検出遺構



2. 土器群1出土状況



3. 土器群5出土状況



## 平成5年度調査区

図版2



1. 土器群5上位出土状況



2. 土器群5下位出土状況



3. 土器群7出土状況

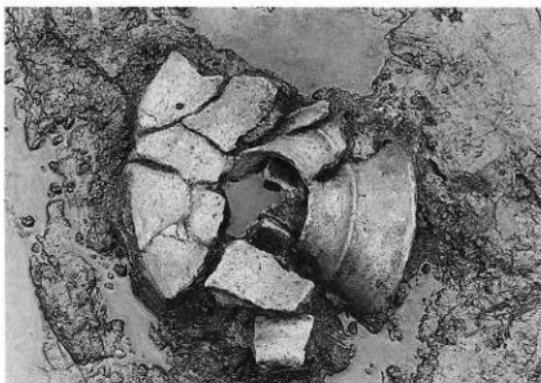
平成5年度調査区

図版3

1. 土器群7出土状況（近景）



2. 土器群7出土状況（近景）



3. 土器群9出土状況



## 平成5年度調査区

図版4



1. 土器群9出土状況（近景）



2. 土器群9出土状況（近景）



3. 土器群10出土状況